



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニーチェとオーヴェルベックとの往復書簡（1871-1879）
Author(s)	古内, 武
Citation	北海道大学人文科学論集, 9, 73-188
Issue Date	1972-12-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34300
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P73-188.pdf



ニーチェとオーヴェルベックとの往復書簡（一八七一—一八七九）

古内 武

凡 例

- 一、原書（一九二六年、インゼル社刊）にはミスプリントが可成りある。七七年五月までのニーチェ書簡に関しては、歴史的批判的ニーチェ全集の書簡篇第三及び第四卷によって訂正し、その後の分についてもオーヴェルベック集（バーゼル大学刊）やハンゼル版ニーチェ全集第三卷などを参照しながら訂正を加えた。
- 二、判明している伏字のうちの重要と思われるものは訳者注において示した。特にボードダッハ著「ニーチェのノート瞥見」によって明らかにされた部分は訳文をゴシック体にした。
- 三、編者による脚注及び後注は《……》内に入れて本文の中に挿入した。編者が指示している頁は無論原書の頁である。
- 四、訳者注は番号を打って、各書簡の後に置いた。人名に関しては、索引に載っていないものについてのみ考慮した。
- 五、◇印を付した記述は訳者の補足である。特に、二人の同居時代には文通が少ないから、若干詳しい補足を必要と考えた。
- 六、下欄の数字は原書の頁数を示す。

序

お互いに対立している両派は、それぞれの立場を放棄することなしに、フリードリヒ・ニーチェのフランツ・オーヴェルベックとの往復書簡を公刊するために協調した。

ニーチェ書簡のテキストはバーゼル図書館蔵の原物に基づいている。オーヴェルベック書簡は一部分しか残っておらず、ワイマルのニーチェ文庫から用立てられた。

この書簡集はそれ等の書簡と一緒にして年代順に配列したものである。

ニーチェ書簡に対しては最初の署名者が、オーヴェルベック書簡に対しては第二の署名者が責任者である。

ボンとバーゼルにて 一九一四年一〇月一五日

博士リヒャルト・エーラー

カルル・アルブレヒト・ベルヌリ

一、ニーチェより

〔ルガーノ、バルク・ホテル、一八七一年三月〕

わが親友なる同僚よ、小生の余りの筆不精に呆れませんか？貴兄にこんなに長いこと御無沙汰するなんて！小生は大いに呆れているのです！小生がどんなに誠実に貴兄のことを考え、そしてどんなに感謝して貴兄の親切な看護のあれこれをお願い出したかということだけはせめて信じて下さい。貴兄のおかげ、貴兄の毛皮えりまきのおかげで今回は何とか切り抜けてきました⁽¹⁾——言葉の凡ゆる意味において。確かにぎりぎりの瀬戸際でした。何故なら今バーゼルの正月をふり返って見ると、小生は絶えず全神経がはち切れるほどに緊張した夢の様な状態で歩き回っていた様で、そのため貴兄に余り愉快でなかったことは確かだと思われるからです。それなのに貴兄はあの時に小生を我慢して、小生と一緒に散歩したり、その他色々。そのお礼に貴兄をこの青い湖の畔にひょいと移してあげたいと思いますよ——ただし今日は何とも、いけません、北ドイツ的なひどい雨気と毛皮の様なこの厚い霧ですから！しかし明日か明後日なら或いは！そしたら一緒に春の最初の草花を探しに出掛けて、貴兄がこの休みに行かれるであろうドレースデ

ンでと全く同様の確実さでここでもそれを見付けるかも知れませんよ。湖畔に暖い場所が見付かったら、そこで小さな蛇やとかげ共と一緒に坐るのです。ブラウエン⁽²⁾の土地にもこういった楽しみがあるとは思いますがね。大いに気分が良ければ小舟に乗って湖を乗り回すことも出来ましょう、勿論足おおいには必要ですし鼻風邪の恐れもなきにしも非ずですが。ところでここには北ドイツ的気分も若干あるのですよ、北スイスにおける以上かも知れませんが、北スイスは、そこに確認されている「ドイツ人憎悪」の結果、国民投票の類によって達成される共和主義的な、何れにせよ北ドイツ的ではない気象状態を持っていますからね。ところがここへくるとプロイセン的になります、最近などは如何なる流血騒ぎもなしに皇帝ウィルヘルムの誕生祝を催すことさえ出来ました、そして「活人」画をやらしたのですが撃たれやしないかと心配する必要はありませんでした。それどころかここにはキターラを弾くことさえ平気でやる無邪気なドイツ人たちがいます、さらにここには丸腰で湖畔を散歩し休日にも軍服のままでいる匿名のプロイセン将校が二人滞在していて昨日から四人に増えたこともお報せせねばなりますまい。一切が一緒になってルガーノの気持良さを証しています、これは確かにバーゼルを凌ぐものですが、ドイツの諸都市が持つておりドレスデンは何れにせよ持つている気持良さによってだけは凌がれるかも知れません。それで若し貴兄が小生に示して下さった親切の報酬としてドレスデンからここへ魔法で移されるとすれば、それは嬉しい報酬であるかも知れませんがね。ですから小生は別のやり方で貴兄に対する小生の感謝を表わそうと思います。これは先ず小生の写真なのです、小生が元氣になったことをほんの僅かしか示しておらず、特に交感神経と淋巴管の組織における断然たる変化はマントに包まれて分らなくなっています。

このマントと貴兄の毛皮えりまぎとを身につけて小生は依然たる小生です。寒さに凍えながら貴兄を偲び貴兄に感謝しつつ

貴兄の友、仲間、同僚、同居人

(1) (パーゼルを) 離れてきた、という意味にも取れる。

(2) ドレースデンの南部地区、オーヴェルベックの帰省地を指しているであろう。

◇オーヴェルベックは一八七〇年四月にパーゼル大学助教授として赴任し、或る同僚が手配してくれていたシュッツェングラーベン四五号(現在は四七号。当時の家主はフォークラー夫人。一八七三年頃にバウマン夫妻が家主になった。友人間では、ハールツ山地の名所に因んで「バウマンの洞穴」と呼ばれた)に入った。上の部屋には既にニーチェが入っていた。ニーチェは八月に看護人として独仏戦争に参加、九月に赤痢と咽喉ジフテリアにかかり、ナウムブルクで療養してから一〇月末にパーゼルに帰った。その後二人の親交が始まり、冬の初め以来は夕食を一緒にオーヴェルベックの部屋で取る習慣が出来た。七一年一月にニーチェの健康悪化。二月中旬から冬学期の終りまで休暇を取り、妹を呼び寄せて共にルガーノへ発ち四月初めまで滞在した。この手紙はその時のものであり、二人はまだお互いに敬語を用いている。

二、オーヴェルベックより

ドレースデン、七一年四月一七日

親しいニーチェよ、手紙の返事を書かないのが小生の原則なのだと決め込まれることだけは有難くありません。それで今日は手紙を書くことにします。一週間も経てば貴兄とまた会う喜びが持てるのですし、手紙書きとしての小生の名誉を救うにはこの手紙はどうせ遅過ぎるのですがね。けれど小生が貴兄の長い沈黙に復讐する気だったのだから、何故小生がここでこんなに不精になっちゃったのか自分でも分らないのです、貴兄がいなくて毎日淋しかったパーゼルで既に小生自身を貴兄に思い出させることを何故しなかったのかとなると益々分りません。実際貴兄の手紙を待ち焦れていたのです、そしてその手紙は小生の出発したその日にパーゼルに着いたのですが、小生は回り道をしてからここへ来たものですから、貴兄が考えたであろうよりも一週間以上遅れて小生の手に入ったのです。貴兄の印象深い写真には大感謝です、この写真の貴兄は、何時か貴兄から見せられたデューラーの勇ま

しい騎士を思い出させます。貴兄の交感神経と淋巴管の組織が直接に撮られていないことは確かですが、見据えている不敵な命令的なまなざしが組織の状態の反映なのだと考えても宜しいでしょう。

ここでの小生の状態は、ルガーノでの貴兄に負けない位だとも言えなければ、それ以上だとも言えません。無論色々の地方を見てきた後に小生はこの地方の良さを再評価する様にはなったのですが、青い湖の畔にいるわけではありませんし、蛇やかげの様に利口で賢い動物たちとの交際を楽しめるわけでもありません。それに反して寒さと凍えには不足していません。今年の四月は不機嫌の特製見本と言うべきもので、それが今はこの小生の気分をも不快ならしめており、小生は熱があつて不調です。これだけのことで済めば、週末には出発する積りです。貴兄がドイツから呼び寄せた新同僚⁽¹⁾はもうバーゼルに到着して、今は恐らく、例のツューリヒ騒動⁽²⁾のために彼が思い込まされていた彼の身の危険に関しては、最近ライプツィヒで小生が成功したらしい度合⁽³⁾よりもっと徹底的に安心していることでしょう。彼は全く獅子の穴へ踏み込む様な気持だったのですからね。

フォーグラ―夫人は意外にも、貴兄が三月末にはもうバーゼルに戻られるものと考えていました。貴兄の帰来の時期について同じことをクレメンス・ブロックハウスが小生に伝えました、この人は最近ここに来ていたのでして、ナムブルクでそのことを聞いてきたのでした。それでこの手紙を我々のお城へ宛てることにします、そこでもう直きお会いする折にはすっかり回復しておいでなら良いがと思います。妹さんにどうか呉々もよろしく。

楽しき再会を期しつつ

友情と誠実をもって

フランツ・オーヴェルベック

(1) ニーチェのライプツィヒ時代の友人エルヴィン・ローデを指している。七一年一月初めにニーチェはタイヒミュラーが去った後の哲学教授席を得ようとして願書を出し、自分の文献学講座の後任としてはキール大学の私講師ローデを推薦していた。しかし哲

学教授席はニーチェの旅行中にルードルフ・オイケンに与えられた。

(2) イェス伝(一八三五年刊)を著して物議をかもした自由主義的神学者ダーヴィト・シュトラウスが一八三九年に、既に任命されていたツェーリヒ大学の教授席を、スイス保守層の猛反対のために断念せざるを得なくなった事件。

(3) 独仏戦争中にバーゼルを動かなかったオーヴェルベックに対してイエーナやライプツィヒの友人から非難の声があがっていたから、オーヴェルベックはドレーズデンへ帰省する時には若干の懸念を抱いていた筈である。ライプツィヒの友人エーミル・ドームケ、ザーロモン・ヒルツェル、ゲオルク・エーベルス等に対するオーヴェルベックの説明がうまく行ったことを指しているものと思われる。

◇この手紙の少し後(六月二三日)にオーヴェルベックは、三歳年長の友人トライチケの「プロイセン年鑑」にニーチェの論文「音楽と悲劇」を推薦した手紙の中にこう書いた、「彼は総じて全く非凡な才能の人間であることは確かであり、愛すべき人間でもあるし聡明でもあります。要するに小生は彼を好きになり驚嘆する様になったのです」(ベルヌリ著「オーヴェルベックとニーチェ」第一卷八三頁)。

三、ニーチェより

〔一八七二年春〕

おお、ヘラクレスノ⁽¹⁾ 全⁽²⁾

く快調に今までは万事が進んできましたよ、今日の天気が実に不機嫌になったという事実を除けばです。ところで小生たちがいるのはケテラー館ではなくて、ヴェルネー⁽³⁾付近のロリウス館です、友人ピンダーにここを教えてやって下さい。⁽⁴⁾彼がバーゼルに着いたら直ぐ小生に電報を打つ様に言って下さい、若し彼が、今まで約六十人も詰めこまれているこの同じ旅館で暮す積りならです。

我々両名《バーゼルのインメルマン教授とニーチェ》は貴兄のお元気を心から願っています、今まで何回も貴兄が一緒にないのを嘆き合いましたよ!

どうか、来た手紙もここ宛に送って下さい。

貴兄に大いに愛着している友にして、神ニ在ッテノ兄弟なる

F・N

(1) ヘラクレスにかけて、誓つての意。

(2) 次の手紙の原注で説明されている様に Ganz (全く) が Ga と nz とに分けられているのであるが、何故こんな無理な分け方がされたかについては書簡集の編者たちも解釈に苦しんだのであり、後になってから O Herr Kollega (おお、同僚よ) の書き替えてあると分つたそうである。ベルヌリ著「ニーチェとスイス」一九二二年刊一頁参照。

(3) ジュネーヴ湖畔、モントルーの西方の町。

(4) ビンダーがジュネーヴ湖への途次にバーゼルのニーチェを訪問する旨を報せてよこした手紙を、オーヴェルベックがニーチェ宛に転送してあつた。

◇ニーチェは七二年初めに調子が悪くなつてインメルマン教授の世話になつたが、二月には同教授がニーチェの近くに住む様になつてお互いに親密さを増し、復活祭休みには一緒にジュネーヴ湖畔へ保養に行つた(インメルマンは頭部丹毒から回復中だつた)。ビンダーは、クルークがニーチェに献呈した作曲を持参してニーチェを喜ばせた。ニーチェは前年秋に帰省した時に二人の友と旧交を温めたのだつた。

四、オーヴェルベックより

バーゼル、七二年四月二〇日

わが親友よ、貴兄がお便りの中で呼びかけておいでの、そして小生がまだ知らないけれども多分良い性質の怪物と思われる全の神《前のニーチェの手紙をオーヴェルベックが誤解したもの。Ga は O Hercole に続いている単語 Ganz の前半部に過ぎず、Ganz がその行に入りきらなかつたのである》も混っているところの異教の神々やその他の神々の名において小生が貴兄にお許しを乞うのは、この同封の電報⁽¹⁾をどう扱つてよいのか分らなかつたために小生が昨日、全権を委任されてもないのに開封したことです。これはもう不要のものでしょうが、出来るだけ早く入手される方が宜しいでしょ

う。こちらは貴兄が去って以来全く北国的になってしまいました。インメルマンによろしく、この人の美しい魂が封筒の大きさの点で貴兄の魂と競い合っているのを見て嬉しく思います。しかし貴兄の四角なサテュロスの眼の方が大きい。どうかお二人ともお元気で

お二人の
オーヴェルベック

(1) 次の手紙で分る様に、ワーグナーからのものである。

(2) ニーチェの封筒を指している。

五、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七二年四月二日

親しいわがニーチェよ、また電報です、どうせ内容は見当がついたのですが、開封するに如かずと思つてそうしました。この前のを同封して送つたことを貴兄は変に思つたでしょうね。後になって、小生の手紙がもう小生の手を離れてしまつて、土曜の午後のいつものお茶の時間の豊かな瞑想に耽つていた時になってから、電報を打つた方が良かったのだということに気付きましたよ。小生は、貴兄が何とか日曜より前に返事をお出しになれるだろうと思つていました。今日の電報で見ると、貴兄はそうされなかつたのですね。今日小生が直ぐ折り返してトリープシエンに貴兄の今の滞在地を電報で報せておきました。

昨日ピンダーがここへ来ましたから、必要な一切をお知らせしました。ハイツのところへ小生はゲルラッハ及びオイケンと一緒に食事に招かれました。ショープンハウアーについて二時間討論し、小生はショープンハウアーを少々熱っぽく弁護したのですが、ゲルラッハの言によれば「騎士的」だったそうです、そして確かに小生は、針と棒しか用意していない相手を前にして何回か華麗な分列行進をやらかしたのです。何とも愉快的喜劇でした。

インメルマンによろしく。貴兄たちの眼界が小生たちの眼界よりも沢山の雲におおわれているのでなければ幸いで

す。こちらは雲しか見え、寒くてたまりません。

昨日キールからの手紙を転送しました、グラザー⁽¹⁾が日曜で休みでしたから切手を貼らずに。

お二人とも好調に過ごして、そして健康で元気で帰ってきて下さい。

お二人の

オーヴェルベック

(1) 切手売の店名であらう。

◆トリープシェンから二回電報を受けたニーチェは四月二五日から二七日まで最後の(二十三回目)トリープシェン訪問を行なった。ワーグナーは既にバイロイトへ発った後であつた。ニーチェはコーズィマの荷作りの手伝いをしたりした。

六、オーヴェルベックより

ドレーステン、七三年二月二日

親しいわがニーチェよ、原稿はフリッチに届いている、且つ彼は早速にも印刷にかからせる積りの様に見受けられる、何れにせよそのことは強く念を押しておいた。僕が会った時の彼は不調気味ではあつたけれど、如何なる点でも、ワイマルの詩人カルル・グロースが見事に歌っている如き「近き終りを思わせる」様なものではなかつた、商売人としてもだ。滞っている謝礼については、全くのずばらに過ぎないという印象を受けた。彼の率直さは、少なくとも話し合いの間は終始申し分のないものだった、全く率直に彼はロザリーエのことも話し始めたし、遺書事件のこと⁽¹⁾もだった。彼がこの女性と如何なる関係をも持とうとしていないことは明らかだ。ただ彼の商売のやり方にもつとエネルギーと実際の常識があればとは思ふ。彼はしつかりやろうという気がないわけではない、とにかく彼の立場は君が色々心配せねばならぬ様なものでは決してない様だ。誕生⁽²⁾は新版が出される、反時代的第一作の状況に關しては彼はまだはつきりしたことを何も言おうとしなかつた、僕のクリスト教性⁽³⁾に關しても同様。残念ながら僕は僕の

訪問の一番長い時間をチェロ奏者グリュツマッハー《ワイマルの宮廷チェロ奏者レオポルト・Gではなく、この人に教えた兄、ドレースデンのコンサートマスターで宮廷名手のフリードリヒ・Gであったろう。彼は数多く作曲した、そしてフリッツは先ず第一に音楽関係の出版者であった》と話し合うことに費さねばならなかった。——キーツ作の胸像は君を大いに喜ばせるだろうと思う。バイロイトのための最近の檄とそれに関連した方策全体からは実際何にも期待出来ない様に思われる。

その他ライプツィヒでは気の利いた話は何にも聞かなかった、第一そこでは殆んど誰にも会わなかったのだ。君と交替したのがゴットヘルフ・ヒューブラーだということはお報せしておこう。この人はつまりワグナーの最近の友人であつて、フォン・プリングスハイムの弟分のものであり、恐らくタッペルトによつてこの焼肉に注目させられたのだと思うが、何れにせよそれを大してうまく調理しはしなかった。君と御一家皆様とに良きクリスマススを、特に君がこの休み中に徹底的に回復することを心から願いつつ

君の
オーヴェルベック

(1) ロザリーエ・ニールゼン関係の事件に関してはベルヌリ書第一巻一一五頁を参照のこと。

(2) 悲劇の誕生。

(3) 現代の我々の神学のクリスト教性について。

(4) ニーチェがやっていた仕事を指しているのであるが、詳細は不明。フリッツの音楽週報(バイロイトの機関誌)の編集を助ける仕事の類であらう。

◇二人はいわゆる「君、僕」の間柄になっている。七歳という年齢差を考えるとこれは並ならぬことである。そのきつかけは、ニーチェのライプツィヒ時代の友人ロームントが七二年六月にバーゼル大学哲学私講師としてやってきたことであつたと思われる。ロームントとオーヴェルベックも「君、僕」の付き合いになつたことは勿論である(七三年七月二日のオーヴェルベック宛ロームント書簡参照)。ロームントは七四年三月からパウマン洞穴の同宿者となつた。序でながら、オーヴェルベックよりも少し遅れてニーチェの友人となつたパウル・レーはニーチェと実に親しくなつたけれども「君、僕」の関係にはならなかった。ペーター・ガストに対してニーチェは最後まで「先生」であつた。オーヴェルベック以後にニーチェと「君、僕」の関係に入つた者としては、一八八五年に旧交を復活したザイト

リッツが挙げられる。

七、ニーチェより

〔ナウムブルク、一八七三年二月三一日〕

親愛誠実な友よ、君の新年の第一日に対して旧年の言葉をちょっとだけ。何故なら僕は君に感謝の負債が余りにも多くて全く首が回らないまま新年に入るのでせめて大晦日のうちに僕の古い負債をはっきり認めておかねばならないと思うからさ。

ねえ、僕たちはお互いに何時までも善良で誠実であり続けよう。僕たちは願望の、戦いの、壁の隣人同志、奇妙なふくろう共さ、バーゼルの「ふくろう小屋」のね、だが本当に平和な感心なふくろうだ。これはお互い同志に対してのことさ、外部に対しては忌わしい殺戮的猛獸、咆哮する虎、そして同様な砂漠の王者たちの仲間だ。

実際、僕はもうユダヤ的・聖書的、詩篇的な言い方をしているね。グスタフ・ビンダーが聞いていないのが辛いだ（彼は、ひとの話では、四号目でやっと終えたとのこと、その論文は僕の小冊子『悲劇の誕生』⁽¹⁾位の長さがあるとのことだ。最近彼は僕に、今後は鉄板に印刷させる様にと薦めたりしている。

昨日フリッツのところへ行った。土曜には最初の校正刷『第二反時代的考察の』を受け取ることになるだろう。リッツ・チュル家での体験は口で話すことにする。身体 of 工合が悪くて僕は寝て暮した、バイロイトへは行けない、一気にバーゼルへ出来るだけ早く帰りたい。家族から呉々もよろしくとのこと。では古き良き仲間オーヴェルベックよ、再会を期す！そして、希望を持つ者たちの集いよ万歳！

君のフリードリヒ・ニーチェ

お便りどうも有難う。

(1) 歴史的批判的ニーチェ全集、書簡編第四巻後書三七二頁によれば、グスタフ・ビンダーは「現代」誌において「ニーチェ氏」と題

して「第一反時代的」を鋭く批判したとのことであるから、小冊子は「第一反時代的」を指すものと考えらるべきであろう。

(2) リッチェル夫妻がニーチェに食つてかかったのであつて、この体験については、ニーチェが矢張り一二月三一日に出したローデ宛書簡を参照のこと。

八、オーヴェルベックより

ドレーズデン、七四年七月二十六日

親しい友等よ、僕は最近全くの曇り空の日にパーセルを離れたのだが、シュマイツナー関係の色々な苦しい考えに耽りながらであり、その中には全く突然浮んできた「ロザリーエの復讐」についての考えもあった。結局僕は、この幽霊もその他の幽霊共も遠ざけてしまうのが一番いいのだと思つた、そして素晴らしい天気のチュービンゲンに着いた。空は僕が発するまで青空続きだった、しかし思想の地平線は、殆んど激戦の様相で経過した会話を友人マイヤーと交しているうちに忽ちまた曇ってしまった。ついには、大学の旧友でベルリンから来た市會議員ウェーバーも僕たちの話に加わつた、追従者の典型というべきエギーディとすっかり結托してだ、彼は彼なりに大いに有能で親切な男なのだが、君たちも見当がつくであろう様に、僕にとっては何の助けにもならなかった。これだけは僕の成果と言えるのは、マイヤーが自発的に直ぐ反時代的考察の二書を書店に買いに行かせ、そして両方とも店にあったことだ。この或る書店で僕の母が知らされたところから判断すれば、この二書の売れ行きは決して悪くなかつた筈だ。敵共の確信は大きい、そして言うことは何時も同じで、「おっしゃることは尤もだが、事態はまだそんなに悪化してはいないよ」というのだ。ウェーバーの到着を待つてチュービンゲンに予定より二日長く留まつたので、僕は昨日やつとここに着いた。僕が得てきた丸で慰さめにならない印象はこういうことだ、つまり、長年の友人たちからさえ奇妙なことばかり聞かされねばならぬ身であるとすれば他の人々の眼にはどんな風に映っているやら、僕がまださして話をしていないうちにもう、丸でゾンネマンだ、フランクフルト新聞だ！と言われた。こんなことやその他のことにも

僕は快活に勇敢に応答はしたものの必ずしも丁重にはなかった。チュービンゲンではリーバーマイスターと（——）にも会った、後者の書齋の古い人形、ミロのヴィーナスは、美人の奥さんを手に入れる手助けをしてはくれなかった様だ。彼が結婚した奇妙な小柄な女性、女学生とサロン婦人の混合物の様な人は、どこかの近代的な女神によって彼に与えられたものと思われぬ。——ここに着いたらローデから写真入りの手紙が来ていて、僕たちの秋休みの予定についての詳しい報せを要求しているが、僕はニーチェについては残念ながら今彼に報せてやれない。——シュマイツナーの手紙は実に愛想が良くて全ききちんとしたものだが、次の文句だけは気になる、即ち、この貴き名の所有者は特に「わが国の現代の社会的（——）諸問題の解決を目標としている著作に対して」関心を寄せているというのだ。直接会いたいという申し出を彼は非常に気持よく受け入れてくれた。だから僕は、とも角も帰路に会って見ようと思っている。残念ながら彼は反時代的考察のことは何も述べていない。しかし彼の手紙全体の様子から見ても、彼がそれを問題なく引き受けるだろうという凡その見当がつく。——フックスの二通の手紙を昨晩一時間かかって読み終えた。長い方のは君たちがもう読んだものだ、これによって見ればこの愚かなふくろうは既に感激的幻想を抱いている。死者の舞踏はバーゼルに留めておくことにする、そして今日バウマン夫人に、その包みをニーチェが要求した時に渡す様にとの指示を送った。若しかすると彼はそれをバイロイトへ持参するのかも知れない。バイロイトへの旅行について詳しく報せてくれないか、特に帰りの時期について。今はバーゼルに動物園が出来ていることもあって、君たちがベルギューンで特別珍種の ^{ベルグ・ヒューナ} 山雞 ⁽²⁾ になったと報されて心配だ。このことやその他のことについて早速報せてくれ給え、望むらくは哲学者の鉄槌の完成についても。心から元気を祈る、君たちの誠実な友なる穴居人

オーヴェルベック

(1) ニーチェはベルギューンから七月二日に妹宛にこう書いている、「フックス博士がまた手紙をくれた、十六枚の実にいい手紙だ、そしてG・リーメンシュナイダー作の（ゲーテの詩による）『死者の舞踏』という大作の楽曲を送ってくれた、彼が編曲したもの

で見事なものだ」。次の手紙をも参照のこと。

(2) フックスの十六枚から成る手紙にニーチェが書き添えてオーヴェルベックに送った文中の言葉。

九、ニーチェより

〔アルブラ河畔のベルギューン、一八七四年八月〕

最愛の友にして戦友よ、周囲は灰色の雲海で朝早くから雨の音だ。その上に、富と榮譽についての、そして両方とも我々の如き者を避けて益々遠ざかつて行くということについての考察だ。憂鬱だ。ロームントの鼻も深く垂れ下がる。

それにも拘らず君に今や山雞の手紙を送ろうと思う、僕たちが恵まれた良いこと楽しいことを全部挙げてみようと思う——僕たちが本心に心から感謝している君の手紙以外に。

先ずシュマイツナーが実に丁重に承諾を告げてきた、そして反時代的を入手出来ることを喜んでおり、それを「儲かる企て」だとさえ見なしている。第二にフリッチが手紙をよこし、反時代的の出版を手離すことに完全にそして文句なしに同意している。第三に僕は勤勉だった、そして印刷頁にして八四頁位を書き上げて発送出来るまでにした。無論僕が尻ごみしてまだ書かずにいる部分はある、真中のちょっとした章なのだ、実に困難な事柄についての部分だ、／＼言にくい事柄なのだ、／

第三に僕は今度の月曜日に僕のイタリアの婦人ゲリエーリとシュタツヘルベルク⁽¹⁾で会う。彼女は僕に三回目の手紙をくれた。

第四に僕は続いて火曜日にバイロイトへ行きそこに終りまで留まる積りだ、君を待ちながら。神よ若干の気晴らしを与え給えだ、何しろ生は重たいし益々重くなりそうな気がするからね。

第五に、リーメンシュナイダーの曲は僕がここへ持つてきている。一緒にこれを楽しむことが出来るね。これは僕

にとつてはまたしても、僕が複雑極まる曲をも思い浮べることが出来、思い浮べながら楽しむことが出来るということの証明になった。難解な点はあるし、実際の音への憧れは大きいだけだ。

ところでここでは僕たちは一流ホテルで丁寧な扱いを受けて暮らしているけれど値段は高過ぎはしない。今は若干の宿泊人が加わっている、ヴェルテンベルクの貴族がいてフランクフルト新聞を取り寄せている。僕たちが今までに見たものは、アルブラ橋付近の一つの岩、これは高地の孤独な谷を二つに分けて見下ろしている、そこに僕は塔を建てることを考えている。それからそのわきの谷の中にある硫黄泉で、僕たちは便秘（ヴェルトリン産葡萄酒のために生じた）を直すために瓶につめて持ち帰った。それから、ロームントの眼の前で子を産んだ山羊。二人の女優を連れて興行主。クルールでは去年のフリススで⁽²⁾の僕たちの仲間に会った、ロール嬢もいた。ホテル・ルクマールニエルには実にいいボーイがおり、これは何れ僕の下男兼旅行付添人にせねばならない。アルブラ峠の近くに湖があり、恐ろしく冷たくて、そこで泳いだ僕は一週間も罪滅ぼしをしなければならなかった。アメリカにいた人で今はベルギーより少し高い処に住んでいて生粋のドイツ語を話す学校教師がいるが、この人も凡ての山地人と同様に洗面も入浴もしない。

今日僕たちが聞いた話によれば、アウエルバック⁽³⁾はタラスプで次の様な観察をしたとのことだ、「最初の日には私はじろじろ眺められ、二日目には挨拶をされ、三日目にはこう聞かれる、どうだね博士さん、湯治の効き目は？」——彼の答はこんなものではないかしら、「僕の赤い足がこう言っているよ、もうこれ以上湿めるわけには行かないとね」。昨日はロームントがシュトラウスの新しい信仰の一部を朗読してくれた、そして僕たちは、若干の文章がアウエルバックに匹敵することを認めた。

僕は殆んど何も読まずにいる、ロームントはウィルヘルム・マイスターを読んで、食後にユリアン・シュミットの様にそれを談ずるのが常だ。食事のおかげで教養が増す様に思われる。

君も良い飲み物を醸造しているものと考えたい、甘くて苦く、薬でも毒でもある飲み物を。どちらであるかはそれを注いで飲む人によるのさ。少なくとも僕は哲学教授たちのためのなみなみとした毒杯《教育者としてのショーペンハウアー》を作り上げた——願わくはこれが君には純粹甘美な飲み物であらんことを、

誠実をもって

君の友たる毒Ⅱ穴熊一味

ベルギューンにて、木曜日。

- (1) ワーレン湖畔のウェーゼンから三〇軒ほど南の温泉地。ベルギューンからは西北西へ、直線距離で約七〇軒。
- (2) クール西方の保養地。前年の夏休みのフリムス行きについてはベルヌリ第一巻一一四頁参照のこと。
- (3) 作家（一八一二—一八八二）、ユダヤ人。この人の作「素足の子供」をニーチェは一八六二年二月プフォルタからの手紙で母親にすすめている。
- (4) スイス東端付近の温泉地。

一〇、オーヴェルベックより

ドレーズデン、七四年八月一〇日

親友よ、僕は少なくとも胃に関してはこの休みは全く君と同様だった。既にテュービンゲンでこれがまたもやひどくなり始め、今も相変らず悩まされている。だから僕の方は、甘いにせよ苦いにせよ飲み物の醸造は問題にならない、最近僕が熱心だった唯一の醸造作業は胃液の醸造だった、僕はさまざまな有効な方策、特に多くの運動によってそのための努力をした。ところでこの点では、出来るだけこの滞在を延ばすことも有効だと思う。バイロイトをすっかり諦める気はないが、僕たちはそこでは殆んど一緒にいる時がないことになりそうだ。既に一昨日僕は友シュマイツナーに次の金曜に会いに行くことを伝えた、土曜朝八時五五分に僕はバイロイトに着いて鷲屋へ行く。君に会え

なかった場合には、一一時頃に駅へ出てみる。ところで君に注意したいのは、君がアウクスブルク、ウルム、リードルフツェル經由ならば土曜晚七時一〇分にバイロイトを発つことも可能だということだ、そうすれば日曜午後四時五五分にバーゼル到着だ。僕自身はバーゼルとバイロイトとの間の凡ての経路を試してみるために兎に角このコースを選ぶだろうが、バイロイト出発は日曜晚にしようと思っている。その人たちに呉々もよろしく言っておいてくれ給え、君に対しては今が胃病の仲間として回復を願わねばならない、今度会う時にはその必要は無くなっているかも知れないがね

君の

オーヴェルベック

君の秋休みの予定をローデに報せただろうか？僕自身は最近彼に、僕が今覚えているところでは秋休みは九月末から一〇月初めにかけてであることを報せた。このことは彼が非常に知っていたがっていたから。

◇この手紙は、次のニーチェよりの手紙の後に置かれるべきもの。

一一、ニーチェより

バイロイト、ワーンフリート〔二八七四年〕

親友よ、何としてもバイロイトへ来給え、ここで見るもの、聞くもの、総じて体験するものについては僕は何も言わないことにする——ただ、来給え、そして快適にやり給え。

僕自身は旅のために胃と腹をひどく害してしまつて着くと直ぐに寝なければならなかった。しかし今は痛みが起ることは可成り少なくなりつつある——らしい。

二人のピアノ名手、クリントウォルト氏とヨーゼフ・ルービンシュタイン氏とが来ている、前者は家⁽¹⁾に泊って

いる。

僕は土曜朝一二時頃にバイロイトを発つ積りだ。噫、それを思うと恐い！

再会が本当に待ち遠しい！ワーグナーの挨拶や招待を含めて——僕たち皆が君を待つて楽しみにしている。

君の フリデリクス

(1) ワーグナーの家「ワーンフリート」。

一一、ニーチエより

「ルツェルン、一八七四年九月末」

「この手紙はルツェルンのホテル・聖ゴットハルトの総入りである。」

これはつまり、親友等よ、火曜以後の僕の本営だ、そして今度の火曜の晩までそうである筈だ。健康のために何かをするために、——或いは、している積りになるために僕が予約した温泉回りは、それで終了するわけさ。今日は雨降りで、聖レオーデガル記念の大都市の日だ。僕の窓の前で道化役が演技をやっており、絶えず音楽が奏されている。

しかし僕がそんなものに誘惑されないことはセネカの如しだ。僕の食卓仲間の同宿者は司教ラインケンスと教授クノートだ。ボーイ頭は僕にこの人たちのスイスにとつての重要性を説き、修正主義党の勝利を彼等に帰している。こんなに全くの身近に接している僕は皮肉な気分を脱し得ない。しかし彼等は善良な連中であり、司教の臭もないし僕たちの知っている教授たちと同じだ。ところが僕が若干の馬鹿馬鹿しい言葉をオルテンについて（牧師ヘルツォークもここにいます）やペテルスブルクとモスクワとの間のロシアの鉄道食堂について吐いたために、善良なクノートは誘われて、彼が後者を来年は実際に知ることになるだろうということを親切にも教えてくれた。うへえ！と僕は思ったよ。——ところで僕は神々しいばかりの無邪気さで暮している、散歩しながら、そして自分が三〇歳になるのだと

いうことを了解しようと常に努めながら。いつも漫然と歩いたりボートに乗ったり入浴したり読んだりしている、どれをやっても同じ気分、散歩気分 *amnis spatiant* なのだ。バウマン夫人に、僕のピアノを調律すること、ストーヴを試しにたいみてくれること、火曜晚には例の上等なグラハムパンをまた買っておいでくれることを頼んでくれ給え。天気が回復すれば僕たちの友ゲルスドルフが二、三日ここへ来るかも知れない、何しろここは非常に美しく、僕は僕の塔を持ち歩いてゐるのだから《どこかに塔を建てようとのニーチェの計画を指している》、ここにしたいくなつたりあそこにしたくなつたりで午後ごとに建てるべき場所を新たにしながら。

君たちのことを大いに考える。三〇歳ともなれば、自分の財宝を勘定し、自分が生に堪えて行けるかどうかを自問してみるものだと言われている。——本當に、そうであるらしい。

さて校正はどうなっているかね？そして一〇月五日という期限は？そして生まれる筈の新作、バウマン洞穴鳥たちの卵は？

序でながら、ロールドンメルというのはクロップシュトックの学者共和国に出てくる主要人物の一人だ。

バウマン夫人への頼み。ゲルスドルフのための部屋を一度検分して、足りないかも知れないもの、絨毯、ランプ、花などを備えてくれる様にと。僕のを沢山取り出して移してくれればくれるほど有難いと。

それではお元気で、誠実な友等よ

君たちの友にして兄弟

聖ゴットハルト

(1) パーゼルとルツェルンとの中間にある町。一七番の書簡の注(5)を参照のこと。

一三、オーヴェルベックより

パーゼル、七四年一〇月三日

親友よ、同封の緑色の手紙——恐らくクルークからのもの——はリーギ・シュタッフエルから転送されてきたものだが、今でも君にとって嬉しいものだと思う。ゲルスドルフからは昨日着き、ロームントが君から受けてきた指示に従って開封された。校正刷はうようよしている、昨日も今日も着いた、そろそろ一〇枚目が来る頃だ、しかし何れにしても一三枚にはなる筈だから、五日の期限というのは、どんなに頑張ったところで妄想でしかない。ロームントは国家を済ませて、今は宗教の中を散歩しており、最近専門の同僚H（一八七四年復活祭以来バーゼルの哲学教授となったマックス・ハインツェ）と実に注目すべき議論を数回行なった。水曜日のインメルマン家の洗礼祝への君宛の招待状がもう来ている。ロームントと僕は今かいばおけへ急いで出掛けるところだ、前者が如何にそれに値しているかは既に暗示した通りだ、そういうわけで僕たちは、君もよろしく召し上がることに僕たち皆の真近い楽しい再会を願うだけの時間しかない。パウマン夫人はグラハムIIパンを買うことを拒んでいる、病気を家の中へ持ち込みたくない主張して。ローデから今日鍵が届いた。しかし今は大急ぎで左様ならする、クノートとラインケンスによろしく、この人たちは君を聖ゴットハルトとして古カトリックの聖者にしてしまったらしいね。

君のオーヴェルベック

及び

ロームント

《及びロームント》はロームントの筆跡》

(1) ルツェルン湖に突き出ているリーギ山塊の中央部の観光地。ニーチェは九月末にロームント及び弟子アドルフ・バウムガルトナーと一緒にリーギに登り、その後ひとりでルツェルンへ湯治に出掛けたのである。

一四、オーヴェルベックより

カルルスバート、七五年五月一二日

親友よ、昨日僕は「時刻表通りに」到着して、夜のカルスバートを見た——つまりこの時間にはこの町は、高処にある駅から見ると、輝く蛇が谷間をのたくっている様に見えるのだ、——今朝は実に素晴らしい朝で、明るくなっても町は矢張り実に好ましい、明るくなって僕は早速熱心に探した挙句宿に入ったのだが今まで見た感じでは実に良い宿だ、そして医者とも話したのだがこの医者は物識り顔をしながらここにある一ダースの温泉の中から僕にはミュール鉱泉が適当だと見て取り、さらに聴き取りもした——彼は僕の肝臓の打診もしたのでから——そして今僕が坐っているのは、君に走り書きで以上のことを報せるためであり、以上の間ずっと君のことを大いに考えていたのだと君に告げるためだ、但し、打診の時は別だ、その時には君は幸いにして思い出されるべき理由がないのだもの。僕は君からのこの次の報せに、そして君が例えば反時代的に関してどう決めるかに全く心を緊張させている。反時代的は実際今は危機に陥っている様に思われるのだ。それが余り長く君を多忙ならしめないことを僕は切望するけれど、君が現在もうそれに別れを告げるとすれば僕は本当に悲しい。壁一つ隔てただけの隣人として過ごした僕たちの毎日だったから手紙なんかで埋め合せは到底つきそうもない。しかし余りいらいせずに、より良い手段が現われない限りは手紙で我慢するとしよう。そういう次第だから、どうか早く君のことを報せてくれ給え——ボヘミアのカルスバート、大王荘だ——そして今日はこの僅かな走り書きの言葉で我慢してくれ給え。僕は直ぐ町へ下りて色々な用事をしなくてはならない、しかもここは思ったよりも遠い処にあるのだ。序でにこの手紙も投函する積りだ。今朝僕は早速シュプルーデルを見物した、これは実に美しくて印象深い自然現象の一つであり、特筆すべきはその側を流れている小川の床から一緒に湯煙を立てて何フィートも吹き上げながら煮えくり返っている珍しい側腕だ。この町に来てからも僕の便秘はまだ続いているから、この森にとっては有難くないだろう。ミュール鉱泉の最初の一杯を飲めば——明朝飲む積りだ——この閉塞状態から解放されるだろう。ところでこの樹木はまだ箒の柄の様に見える。自然がフレックレスのために作られているものとすれば、樹木は何時もそんな風に見えるだろうがね。しかし幸いにしてこの

男が僕の医者ではなくて、僕の医者はツインマーという良いクリスチャン・ネームの持ち主で、序でながら退役陸軍少佐の様に見える男だと言えば先ずびたりだろう。ところで彼が下痢は我々が先ず恐れねばならない「陰險な敵」であると言った時に、僕は流儀の点では少なくともフレックレスの派だなど分った。それがどうであれ、僕はこの場所が健康作りには全く良いものと実際信じている、ちゃんと養生すればね。車中では何事もなかった、僕はあの二人の坊主が去ってからは殆んどずっと一人だった。このコースと列車を君のバイロイト行きに大いに薦めるよ。さて君の妹さんの来訪が確實になつていれば良いが。妹さんにどうかよろしく、手紙を直ぐくれ給え

君の誠実な友

オーヴェルベック

バウマン夫人には既にちよつとした報せを送った。

(1) ニーチェは前年秋以来、第四反時代的考察として「われら文献学者」の稿を進めてきたのであったが、五月初めには全体を仕上げの意欲を失つてしまつていた。

(2) この医師は味気ない人物なのであろう。

一五、ニーチェより

(バーゼル、七五年、聖霊降臨祭の後の金曜日)⁽¹⁾

親友よ、バーデン・バーデンで妹を迎えて戻ってきたらお便りが来ていた。心から感謝するよ、そもそも何時も僕は静かな感謝の念を抱きながら君の部屋に坐っている、今だつてそうだよ。バウムガルトナー夫人が僕たちを駅に出迎えてくれた、そして僕たちがバウマン洞穴に近付いた時に誰が穴の中にいたと思う？ポンから二四時間×二の予定でどび出してきたアードルフ・Bさ。身体をこわさなかつたら幸いだ。僕たちの家庭整備(一八七五年夏学期、オーヴェルベック病氣休暇中は、ニーチェがオーヴェルベックの部屋に住み、妹がニーチェの部屋に住んだ)は非常にうまく行っている。こ

の学期は辛いことになりそうで、僕の講義は全部行なわれるし、予科も大いに骨が折れるから、君の勤勉さが咲き香っているこの部屋は少なくとも怠惰によって汚されはしない、何しろ僕は毎日五時から二時まで仕事をし、それから午後は予科と学部 of 授業で詰まっている、或いはむしろずたずたに引き裂かれていると言う方が正しいだろう、こんなことでは大したことは出来ない（一三時間だ！）。胃と眼の状態は甚だ由々しい！昨日は全く無能力状態だった、そしてワーグナーに誕生日祝いの手紙を書くことさえ出来なかった。妹が代りに書いてくれた。

僕はワーグナー夫人を通じてワーグナーの見事な青銅製のメダルを貰っている。君が彼女について若干知り得る様に、彼女の手紙を同封する。同じくシュマイツナーの手紙もだ、これについては君も色々考えるだろう。（シュマイツナーの手紙は返送してくれ給え、返事を直ぐに出さねばならないから。）シュマイツナーは印度研究を振興したいと言っているから、僕は彼に印度の著作、特に哲学的著作の良い翻訳の叢書を創ることを提案しようと思う、そして例えばウィンディッシュとドイセンを考えた。僕の反時代的第四《われら文献学者》の執筆は全然やらずにきた、今も出来ないし、今後もやらないだろう。学期が終ればやるかも知れないが。

バーデン・バーデンではもうちょっとで皇后にたまさきそうになり、失礼なことだった。リヒャルト・ポールのところで実に気持よく昼食を馳走になった。ここの学生数はとに角もう一八四だ、喜びは大きい。今日僕はヤーコプ・ブルクハルトと一緒に実が実に元氣そうだった、ヒレブランド⁽²⁾を既に知っていて、彼即ちヒレブランドは一つの宝即ち一人の婚約者、或いはハッノ種ノ凡ユルモノ *vel hoc genus omne* をフィレンツェに持っているということを物語った。

カルルスバートの温泉参考書についてはアウクスブルク新聞の最近号の關係論説を見るべし！

さて、わが親友よ、起ち上がれ、君の肝臓を乗り越えて歩め！

妹と僕の二人は、病氣の幸福者に心からの挨拶を送る。

(1) 五月二一日

(2) ヒレブランドの著「時代、民族、人間」。「人間」の項でニーチェに触れている。

一六、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七五年聖靈降臨祭の後の金曜日

「カラー文字の「ジュプルーデル」湯治効能書が刷り込まれている書簡紙」

カルルスバート、七五年五月二六日

親友よ、無名の一芸術家はこの魔法の泉をこんな風に考えているが、勿論僕に奇蹟が行なわれたとはまだ言えない。この泉が彼の兄弟たちと同じ様に効き目があることは確かだろうけれど、今までのところ香ばしくない。差し当り僕はこう思っている、苦によって楽に到らんと、君の今度の手紙の場合も同様だった、僕は待っているうちに次第にいら立ちが大きくなった。手紙を狩り出す試みをもう一度しようとした丁度その時に手紙がやっと自分からやってきたのだ。それによって僕が得た喜びと言えば、君の様子がまた分ったという位のことではなかったのは勿論だがね。何故なら他に何も格別嬉しいことが書いてなかったからさ。特に僕には君がもっと忙しくないことが願わしかった。僕の部屋は少なくとも今は君の勤勉という犠牲を要求する権利を全く持っていない、何故ならその部屋の主は全く何もせずにひよろひよろの国費患者の生活を送っているのだからね、但し今年は僕たちカルルスバート人には例外的に素晴らしい五月が恵まれたので大いに山や谷、森や野を回り歩いている、しかし勿論全く罰があたらないわけではなく、その折にも時々自分の状態を思い出させられる。僕は最近ワグナーにこんなことを書いたよ、僕が望みをかけることは結局殆んど不可能であり、とにかく多くの他のここの湯治客たち以下でしかない奇蹟的湯治効果とやらを僕が若し望むとすれば、それは君のためであり、君もこれを何時か試してみる様に元気づけるためののだと。君の胃がどうしてもおとなしくならないならば、何らかの工夫をすることを本気に考え給えよ。ここでは兎に角、実際に

素晴らしい効果があった多くの人たちのことを耳にする。ワグナー家からは、僕が最近お祝い状を出そうとした丁度その時に、親切な挨拶をミヒャエル・ラルスという人を通じて受けた。この人は君の知っている音楽家の兄弟で、トルコの商人であり、バイロイト訪問をしてきて今ここで矢張り療養をしており、療養を大いに必要とする様に見えらるる人だ。非常な好人物で、明らかにバイロイトにすっかり惚れ込んでおり、ここでは早速「ベートーヴェン」屋に宿を取った。君の送付物が着いた時には僕は既にこの人から最も必要なことは知らされていた。善良なルース《ワグナーの大きな犬の名前》の回復のことも既に彼から聞いていた。今までは彼とまだ大して会っていない、昨日僕たちは一緒に散歩を申し合わせた、ドイツ語は彼にはまだ少々難儀だ。今までの僕の交際の主なものは大学時代の或る旧友、僕がゲッティンゲンの学生組合に入った時の委員長だ《この人の名前はルードルフ・ベルント》。僕たちは偶然同じ食卓につくことになった時に直ぐお互いが分った、一七年もお互いにも見聞きしなかったのだけれど。ここに彼が滞在しているのは、以前悪評のあったハニバル・フィッシャーの孫娘である彼の愛らしい奥さんの胆嚢の病気のためだ、そして彼は今は、色々暴れてきた挙句に火災保険会社の社長だ。無邪気な人間であり、個人的能力が大きく過ぎてドイツの満足セル輩 *Satisfiers* の群には属し得ない、それで僕は、現在のドイツについての我々の個人的見解を実に喜んで聞く人間の一人を彼において見出した。個人的見解という言葉を使わねば、「帝国」の完全市民と話をする場合には何時も、我々の見解が個人的なものに過ぎないのだという発見をして驚いてばかりいるからだ。丸でこちらの言っていることが、大抵の者にとって馬鹿馬鹿しい未聞のことでもあるかの様だ。さて僕はここで幾多の印象——しかも北ドイツ全部がカルルスバートへ移住してきた様な——を受けた後に君にこう告白する、僕は僕たちの確信を強めるのみであり、僕の友人トライチケの期待に反して、近くで見れば見るほど益々強めるのみであらうと。——送ってくれた手紙には心から感謝する、その中のワグナー夫人のものは次の折に送る。シュマイツナーによるしく、そして僕が間もなくドレスデンから便りするだろうと伝えてくれ給え。——ゲルスドルフからは僕がここに来

た最初の頃にもう彼の伯母さん宛の名刺を貰った、しかしその伯母さんはまだここには来ていない筈だ。彼には近々手紙を書く。ロームント⁽¹⁾からは、なかなか来なかった手紙が遂に來たが、残念ながら明るい展望は殆んど述べられておらず、差し当っては、ザクセンでは何にも見付からなかったということだけだった。彼ともドレーズデンで会うことになる。ここに六月九日までにはいる積りだから、それを頭において手紙をくれ給え、僕のドレーズデンの住所はレックニッツ街一七号だ。ここは恐しく値段が高い。僕の宿の主人はファーズルトという名前だがファーフナー⁽²⁾という名前の方が似つかわしい、何故なら「黄金よりは少女」という様な文句は彼には無縁だから。ところでリッチュル顧問官夫人が一週間前から僕と一つ屋根の下に住んでいるのだよ、しかし宿泊者名簿と湯治客名簿に載っている彼女の名前以外にはまだ全然彼女らしきものを認めていない。妹さんに呉々もよろしくお伝えあれ、妹さんが君の傍にいるのを知って嬉しい。インメルマン家、ミアスコフスキー家、パウマン夫人にもよろしく。インメルマン夫人は僕の療養記録を受け取ったと思う。また新しいのをもう直き送る。最近バーゼルの婦人たちをも訪ねた、しかしその中のシュミートリン夫人は今かなりの重態だ。ミアスコフスキーの調子はいいだろうか？君からの次の手紙が君の調子の向上を報せてくるといいのだが。手紙が來たとたんに僕が喜ぶことは君が知っている通りだ。心から君のものなる

オーヴェルベック

(1) ロームントはバーゼル大学を退いて四月にバーゼルを(従つてパウマン洞穴をも)去っていた。

(2) 宝を守る竜。ズイクフリートに殺された。

一七、ニーチェより

(バーゼル、七五年五月三〇日)

親友よ、日曜日のささやかな便りだ。君が今日は気分が良ければいいが、そして強力な鉱水が内部で暴れなければ。今は珍らしく穏やかな天候で、殆んど理想的な晴れ工合だ(勿論農夫にとっては必ずしも然らず)、それで僕は、

この典型的傑作の春全体が君の回復を断然助けるに違いないと考えた。バーデン・バーデンでの五月の数日の様なものを僕は全く今まで体験したことがなかったし、ドイツの土地では殆んど有り得ないものと思っていた。現在僕は毎朝、君が飲むのと同じ頃に熱い湯を飲み、少し後に、薄めたミルクと生卵一個を飲む。夕食はスープと少々のお茶だけ。その上、酸っぱいもの、塩漬けのもの、脂肪の多いものは控えている。僕は君の現在の生活法に非常に近づいていると思う、こんな風にしてまた何とか持ちこたえている、勿論極度に用心しながらだ。妹は僕の生活を非常に楽にしてくれる。ところで僕たちは一〇月一日から何処かに住居を借りて独立所帯を作ること企てている。パウマン夫人はまだこのことを全然知らない。僕たちは既に住居探しをしている。そもそも僕は、自分がもう暫く地上で持ちこたえるためには自分に適合した家庭生活が今は殆んど不可欠となっていることに気付いているのだ。夏には僕のバイロイト行きは難しい、或いはちょっとした間しか行けないだろう、何故なら僕は山の空気と鉱泉飲用療法を僕の胃に適用せねばならないからだ。どうにも仕様のない状態なのだ。今日の午後僕たちはレラッハ⁽¹⁾のbaumgartner夫人のところへ行く積りだ、彼女は心から君のことを考えている、そして何れ手紙も出すことと思う。アードルフは無事にボンに帰り着いたよ⁽²⁾。昨日僕たちはケストナー嬢とザーラズィン夫人とを訪問した。晩の訪問は全くもうやらない。今学期は僕は実に忙しい。予科では非常に良いクラスを受け持っている。ちびのケルターボルンが四つ折判四四八頁ぎっしりの、立派に装丁されたノートを僕にくれた。ブルクハルトのギリシャ文化だ。しかもこれはbaumgartnerが仕上げたものに比して幾多の長所を持っている。材料が豊富で整っているから優れた補足物だ、他方、baumgartnerはブルクハルトその人と偉大な模倣能力とに對する繊細な眼を持っている。フックス博士は自分の作品第一番を送ってくれた、近代ギリシャ民謡のためのピアノ曲で、ヘラスという題だ。ワグナー夫人からはワグナーの顔の入った非常に凝った青銅製のメダルを贈られた⁽³⁾。《二二頁参照のこと》。

フェステルゼンが君から注文されてとつくに到着している書籍をドレーズデンとカルルスバートとの何れへ送れば

良いかと問い合わせてきている。——ロームントについて何か良い報せが耳に入らぬものかなあ、文学中央新聞には何時も新しい教職が出ている、どうして彼が掴まないのであるのか或いは掴もうとしないのか僕は不思議だ。しかし聖ガレンの場合と同じことなのだろう。⁽³⁾

ミアスコフスキーのことはその後何も分らない。ラウ博士は何時かバーゼルへ来る積りでいる。⁽⁴⁾インメルマン夫人は療養記録を受け取った、そして大いに感謝している。僕たちは今週インメルマン夫妻をお客に呼ぶ。

帝国の完全市民たちに接して君が得た諸経験は非常に貴重だ、詳細を君の口から聞くのを楽しみにしている。昨日はベルリンの新聞局のビスマルクによる廃止の記事を読んだ。彼が余りにも乱暴に扱われたかららしい。

では左様なら、わが親友よ。僕も妹も君の健康を大いに気遣っている。

君の誠実な フリードリヒ・ニーチエ

バーゼル、一八七五年五月三〇日

今日は新しい州議会議員選挙——国民投票の投票権問題はうまい経過を辿った。今日はオルテンでの会議もある。⁽⁵⁾

(1) バーゼル東北方のドイツの町。

(2) 「ギリシヤ文化史」の講義をノートしたもの。

(3) 聖ガレンは、六一三年にボーデン湖南方の高地に修道院を創ったアイルランドの僧、カトリックの聖者であるが、その修道院のある町の名も聖ガレンである。その町での就職の可能性をロームントが掴まなかったことがあるのではないかと思うが、詳細は不明。

(4) ミアスコフスキーは、ラウ博士が所長をしているホーエンハイム農業研究所への就職を考えていた。同研究所にいたゲルスドルフがニーチエを介して誘ったのである。

(5) バーゼル、ベルン、ツューリヒの大学教員の合同会議がオルテンで毎年行なわれた。

一八、オーヴェルベックより

ドレーズデン、七五年六月一日

親友よ、君には想像がつくと思うが君のこの前の手紙は僕を可成りびっくりさせたよ、そして、準備が始まったばかりのこととして君が僕に報せている事柄は、昨日パウムガルトナー夫人から、決定した事柄として報告されてきた。実を言うと僕はこの春の間ずっと、パウマン洞穴が最近さらされていたさまざまな動揺下にあつてこの素晴らしい建物¹がそれ等に堪え得るかどうかという疑いのために心配になることがしばしばだったのだが、こんなに早く瓦壊しようとは考えていなかった。残念ながら君についてのその他の報せも、事柄のその様に急速な進展を僕に実に良く納得させる種類のものだ。とも角も君の移転が好結果をもたらす様にとの僕の心からの願ひを受けてくれ給え。パウムガルトナー夫人から僕は、僕たちが少なくとも隣人同志ではあり続けるのだという慰さめを受けている。バイロイトにおける僕たちの再会が疑わしいということも、この夏についての僕の考えや夢をまですく狂わせるものだ。秋に何とか良くなった君と再会出来さえすれば万事良しとせねばならない。僕自身の湯治の成果については、それが僕に費やさせただけの力を僕はまだ取り戻しておらず、そしてまた僕は自分をまだ健康者に算え入れることが出来ないということだけしかまだ言えない。こちらでさらに数週間、食事療法が続けられる。この療法について君のこの前の手紙が述べていた或る箇所は僕には嘆かわしいものと思われたが、一人のカルスバート客にとっては極めて啓発的なものだった。ゲルスドルフの伯母さんを訪ねることが出来たのは、カルスバートの湯治客名簿の怠慢のおかげで僕のカルスバート滞在の最後の頃になってからであり、彼女にゲルスドルフの写真を手渡しただけで左様なら言うことになってしまった。かりそめの印象しか得られなかったのだけれども、非常に知的で明晰でしっかりした人でゲルスドルフに非常な好意を持っているらしいこの婦人ともっと会えなかったことは残念だ。ワグナー夫人の親切のおかげでハンブルクの市参事会議員ペーテルセンと会ったが勿論可成り皮相的な会見でしかなかった。ワグナー夫人はこの人の娘さんと特に親しいのだ。その娘さんは僕の「クリスト教性」の熱心な説者だと聞いているけれど残念ながらカルスバートへやってきたのは僕の出発の翌日になってからだった。

ここに僕は今月一〇日以来いる、そして到着後すぐにロームントとシュマイツナーに僕を訪ねてくる様にと促した手紙を出した。返事はまだない。ローデからも便り待っており、ゲルスドルフには早速書く、我々三人だけでもせめて申し合わせてパイロイトで会うためだ。——今僕は国民新聞(二六九号)にまたハウザー⁽²⁾に関する記事を見付けたがこれはフォイエルバッハの仮説を確かに打ち砕く様に思われる、他方、あれは詐欺師の仕業だったのだらうという疑念を新しいやり方で遠ざけるものであることは勿論だ《カスバル・ハウザーの伝説とそれに関する刑法学者A・フォン・フォイエルバッハの手記とが明らかにパウマン洞穴での話題となったことがあるのである》。——折があつたらミアスコフスキーに、僕がシュモラーの書をまだ返していないことを詫びておいてくれ給え。僕はこの種のを今は全く読む気がしないのだ。君と別れてから僕はウィルヘルム・マイスターを二、三巻だけだが読んだ、だから治療のために鉱水を飲んだばかりでなく反時代的なものの中で少々入浴することもやったのだ、これは実に楽しかった。——後から直ぐ気が付いたのだが、既に二回も僕はパウムガルトナー夫人によろしく言つて貰うのを忘れてしまった、同時にジュール・ヴェルヌの返却を督促して貰うことも。次の機会に彼女に呉々もよろしく言つて、カルスバートから僕に転送されてきた彼女の手紙への返事を近いうちに書くそうだと伝えてくれ給え、パウマン夫人がくれた手紙は君の決心を全く悲しんでおり、僕についても懸念している、僕はパウマン洞穴の残片、否むしろ小破片として彼女に忠実であり続ける積りだと言明してやつた。ところでパウムガルトナーはどうするのだらう？手紙書きは君には重荷だらうが、他の人たちが君について報せてくれることを期待し、報せを切に待っている、しかも最近僕に伝えられた大方のものよりも良い報せを。妹さんと友人たちに呉々もよろしく

心から君の

オーヴェルベック

(1) 八月にニーチエが妹と共に移つたシュパーレン門前通り四八号はパウマン洞穴(シュツツェングラーペン四五号)の直ぐ近くで

ある。

(2) カスバル・ハウザー。謎めいた棄児。一八二八年にニュルンベルクに現われ、バーデンの皇子と見なされたりナポレオン一世の子と見なされたりした。

一九、オーヴェルベックより

ドリースデン、七五年六月二九日

親友よ、君が明後日去るであろうとバウムガルトナー夫人が最近報せてくれた古い洞穴宛てにもう一回挨拶して君の移転の幸を心から祈る、僕には実に悲しい移転のだけれど。君については最近インメルマンから報されたが本当にはっとする内容だった。恐らくヴァルツェイナ⁽¹⁾が最後の仕上げをして、僕が秋に君との再会を喜べるまでに君を回復させてくれることだろう。僕自身もその時までにもうちょっと前進して健康を再び手に入れねばならない。差し当ってカルスバートは僕が思った以上に僕を低下させた、今度こそは消化したぞという期待は繰返し裏切られてきた、だから僕は、数週間以来昨夜初めてまた昔の様に眠り今は内臓に或る種の落着きが感じられるという事実を生じさせるために骨を折ってくれた人たちについてあれこれ述べるのは止めておく。ワグナー夫人は最近親切にもウエーゼンドンク夫人宛の名刺を送ってくれた、しかし僕は目下のところそれを用いることが出来ない。僕は当分まだ、町の中でやれる限りにおいて健康のためにのみ生きる、ところで町を逃げ出す機会はいざいざあるのだ、田舎の別々の場所に住んでいる二人の妹たちのおかげで。その中の一人の健康は悲しいことに僕よりずっと悪い。

依然ワルトハイムにいるルームントに僕はまだ会っていない。ここへ来る決心を彼はまだつけ兼ねているのだ、僕が彼に会うのはバイロイトへの途次ということになるかも知れない。彼は最近、ローデはどうかしたのかという質問をよこして僕を驚かせた。その数日後にローデの手紙がその悲しい答えをもたらした。⁽²⁾他処では緑に輝いているこの夏も僕たちの小さな仲間にとっては緑色ではない。自分が緑色に染まったり、その上、黄色に染まったりしない様に

することだけは必要だ。少なくともローデは兎に角八月初めにバイロイトへ行く。ゲルスドルフがこの点どうなのは分っていないが、近く報せがあるものと期待している。

シュマイツナーは一週間前にやってきた。翻訳が依然停滞していることはバウムガルトナー夫人からもう聞いているだろう。⁽⁴⁾ また僕たち二人の私的な喜びである最近の僕たちの著作の返品が今頃になっても相変らず入ってくる。出版者変更は何時までも色々な害を生む、特にフリッチの香ばしからぬやり方の場合には。君が印度関係の叢書を考えて書いてよこしたことをシュマイツナーに伝え、序でに君についても話して、君から手紙が貰えるという期待を当分捨てる様に頼んでおいた。バウムガルトナー夫人は僕の手紙を受け取ったと思う。心からの挨拶と共に僕の住所（レックニッツ街一七号）を彼女に教えてあげてくれ給え、残念ながら僕の手紙に付記することを忘れたのだ。インメルマンに手紙の礼を言ってくれ給え、彼の一家にもよろしく。頭では君はもう長いこと食事をしていないのだろうね、全くやめてしまったのかも知れないね。それでも僕たちのテーブルに時たま挨拶する位のこととは何時だって出来ることだし、バウマン夫人への挨拶も頼むよ。最後に、新しい組織作りを始めようとしている君と妹さんの元気を心から願ひ、僕たちが何時までも良い隣人であり友人であることを願う

君の古き穴居人にして友なる

オーヴェルベック

- (1) クールの北方の保養地。
- (2) ローデは失恋したのである。
- (3) 「緑と黄色になる」は、怒って顔色を変えること。
- (4) バウムガルトナー夫人は「教育者としてのショーペンハウアー」をフランス語に訳しつつあった。
- (5) 「黄金の頭」屋のこと。ベルヌリ書の第一巻一二頁参照。

二〇、ニーチェより

〔バーゼル、七五年七月〕¹⁾

親友よ、明後日僕は遂に出発する、休暇の第一日の早朝に。目的地はシュワルツワルトの小さな温泉だ、そこは特に胃患者用に定められていて食事療法の用意がされており、定評のある老練な専門医師の指導下にある。つまり、

「バーデンのシュワルツワルト、ボンドルフ付近のシュタイナバート」だ。

僕の調子は絶えず実に悪かった、毎週一日は寝ていなければならぬ日があった、激しい嘔吐と非常に痛む持続的な頭痛のために。昨日もだ。僕は約二週間前から、また独りだ、妹は僕たちの家庭用のあれこれを準備するためにナムブルクにいる。つまり、引越しはまだやっていないのだ、休みが終ってからだ。君の祝辞は実に良い時にやってきて、僕たちの移転準備に力を添えてくれるかの様だ。そんなわけで今日もまだ君の部屋で、君の机で書いている。何処から一体君は僕についての報せを貰ったのだい？つまり、最近僕のところへ来る殆んどどの手紙からも、僕に関する、しかも僕の知らない新事実が読み取れて、僕は意地の悪い満足とでも言うべき気持を味わったのだ。例えば、ニーチェ氏は七月一日以来シュパーレン門前通り四八号に住んでいるとか、彼は確かに偏頭痛を病んでいるとか、病気がまた癒って彼は好調であるとか。僕はそのニーチェ氏に幸あれと祈るけれど、僕自身を知っているほどにはその人を知っていないのが残念だ。僕自身については僕は、以上の三つとも当てはまらないことを知っている。

合唱祭の行列は実に華やかに行進した、僕は殆んど見も聞きもしなかった、音楽会には行かなかった。しかし僕は或る日カウフマン氏を捉えて、或る「興味ある」曲を所有しているかの如くに振舞わねばならぬ様に彼を追い込んでから、それを取り寄せることを許可してくれる様に頼んだ。しかし彼は自分で持つてくると言い張った。「けれど私は近日中に旅行に出るのです！」「よろしい、私は明日参上します」。しかし彼は来なかった、明後日になってもだ、これではもう彼からその「芸術品」をひたたくるわけには行かない。

僕はくる日もくる日も全くのその日暮らした、そして自分の講義を楽しんでいる、それが愉快だというわけではなく、それが僕の考えをまとめてくれるからであり、こんな状態には当然付き物の落着かぬ気持を取り払ってくれるからだ。しかし、こういうことが分った。つまり、半分の生命力でも教授たり得るのだ。そう考えると、生命力が完全である時に教授たり得るかという疑問が湧いてくる。いつまでも？おなぐさみにフックスの手紙を送りたいところだけれど、これ等は僕にとって既に余りにも高価につき過ぎた。最近のものは郵送料不足で僕が二フラン払ったのだが、既に四枚の大きな切手が彼によって貼られていたのだ。数学問題、その厚さと重さはどれだけだったか？——
G・クルークが作曲を送ってくれた、彼の四重奏曲の終楽節だ。「——」は不幸なお産をした、クルークのところの出産は真近い。ベルリンのフェルスター博士という人⁽²⁾が僕を知ろうとやってきた。僕は自由に物を言って、いやな印象を与えてやった。僕は長々とベルリンのクルツイウスと画家シュウィンントとの悪口を言い、どちらの場合にも急所を、つまりお客さんの心臓のある場所を射当てた。——作曲家フェーリクス・ドレーゼケ氏も僕を訪ねてきた。

さて、変らぬ誠実な友よ、湯治による君の内部掃除の効果が日に新たならんことを。君と一緒に行くだけの分別が僕にあれば良かったんだが、さて遂に君は回復せる内部の典型的見本となって帰ってくる、そうすると洞穴は空っぽで僕は消え去っているのだ、しかし僕たちは良き友人、誠実な隣人であろう、そしてあり続けよう！

(1) 七月一四日。歴史的批判的全集、書簡篇、第四卷、二〇一頁参照。

(2) 人名索引で分る様にパウエル・フェルスター(ベルンハルトの兄)である。

二一、オーヴェルベックより

親友よ、まだここからの僕の手紙を受けて変に思うだろうね、バイロイトではもうとくに豪勢な行事が始まって

ドレーズデン、七五年七月二七日

いるのだから。事実僕が出掛けるのはもう、そう遠いことではない、出発は次の金曜と決めてあるから。健康とそして食事の変化に依然極めて敏感らしい胃とへの顧慮が僕を特に引き留めたのだ。ところで僕は既に三週間位前から調子が良くなっているから、僕の巡礼行に全く元気で出発する。今は、長かった無気力状態も失せたので、健康の点、特に丸一年間常規を逸していた消化機能の点で実際僕にはもう何の不足もない、そして、春に僕と一緒に出掛けたら良かったのじゃなからうかという君の前便における遅い洞察は実際僕の心に沁みた、何故なら僕自身の経験が今はどうしても僕の心を、君が僕とカルスバートへ行かなかったのは非常に抜かったのではなからうかという憂慮へと傾けるからだ。約七週間の、無論実に情なかった期間を代償とすることによって僕は、どうやら素晴らしい湯治をしたことになる様だ。シュタイナが同じ成果をもつと安く君にもたらさんことをノバイロイトについては残念ながら君の今回の手紙は完全に黙している、これは多分、離れていようという前以ての計画が実行に移されていることを意味するのだろう。そうであれば益々、僕が君にあそこで再会することになったりした場合の驚きは素晴らしいものだろう。そうならなければ再会は約一ヶ月後だ。ここでは僕はまゆにこもったさなごの様に暮らし、家族の間から外へ出ることは殆んど全くなかった。さまざまな心配ごとがこの家族にのしかかっている現在だけれど、この家族の一員であることが僕には快く思われた。僕は太いに散歩をし、歩きながらあれこれのことを考えた、しかしその他の仕事は殆んどやらず、読むことはもっとやらなかった。ところで或る喫茶店で最近文学団雑誌に載った君の最近の考察の或る批評文を手に行っているダーヴィト・アッシャーとぶつかった。彼はショーペンハウアー崇拜の老練的人物にして初めて可能と思われる傾倒ぶりを君に対して示し、序でながら「mitgebräucht」⁽¹⁾に関する、大したものだが確信に満ちた学校教師口調の馬鹿談議で幕を閉じた。ロームントについては君に何も報せることが出来ないだろう。会っても無駄だ。彼の人柄についての僕の知識と彼が絶対に変っていないことを示している彼の手紙とによって僕は彼が故意に会見を避けてきたのだという確信を得ている。最近彼は、彼が遅くとも今週の初めにオルデンブルクへ出発するとい

う報せで僕を驚かせた。僕は彼に対して、彼には全く便利な場所にあるケムニッツで金曜日に会いたいと注文していたのだ。ワグナー夫人から君が貰った手紙を送り返す代りに、僕にきたものを同封する。これはロームントのことに触れた序でに、哲学との関わりについての彼女らしい元気な分別ある言葉を幾つか述べているから君は喜んで読むだろう。僕は君のを保管するから君はこれを保管してくれ給え。バウムガルトナー夫人はどうしたのだろう？僕が手紙を出してから何の便りもない、受け取ったのならないが？君が手紙を出す時には、どうかよろしく。君とまた一緒にいると思われる妹さんにもよろしく。バイロイトへ行かない場合には、出来たら直ぐに君の様子を報せてくれ給え。しかし僕がバイロイトへ行けばどうせ誰かから報されることは確かだろう。ローデからは最近は何の便りもない。では心から元気を祈る。

君の
オーヴェルベック

(1) 「教育者としてのショーペンハウアー」第六節の「悪用され雇い入れられた文化」 *genüßbrauchte und in Dienst genommene Kultur* の中の過去分詞 *genüßbraucht* における前綴 *ge* の位置を問題にしたのであろう。

二二、オーヴェルベックより

バイロイト、七五年八月四日

親友よ、今日これから、ごこの僕たちにとって二週間の義務である天国的日課に取り掛かる前に、つまり試演に出掛ける前に、君に短かい挨拶を送る。君が僕たちの間にいないということ以外には僕たちには目下悩みはない、それ以外は素晴らしいのだ。昨日はローデさえ感激した。彼は一昨日打ちしおれた容易ならぬ状態で到着し、直ぐ引き返すとさえた言っただが僕は力をふるってそれを止めさせたのだ、確かに良いことをしたと思う。彼の事柄は引き続いていて、その上——詳しいことはまだ僕に分っていないが——非常に苦しい分かれ目にあるとのことだ、しかし昨日は今述べた様にローデは、ゲルスドルフと僕との心を満たしたものに十分関心を寄せる様になった。土曜に僕が着き、

翌日ゲルスドルフが、月曜にローデが着いた、僕はオーケストラと一緒にだった、オーケストラの一二名は土曜と日曜午前とに到着したのだ。午後には一種の下稽古が行なわれた、行事予定では今月一五日まで毎日二回の試演が行なわれることになっている、午前一〇——一二時にオーケストラだけで、午後五——七時に同じものをオーケストラと歌手たちとで。ワーグナーの考えによれば全体を読むことが肝腎なのだ、それによって彼の狙いが何処にあるかを音楽家たちに分つて貰おうとしているのだ、若干の大事な部分しか注意したり説明したりせず、ぐんぐんと進んで行く。さてそんな工合に僕たちは昨日と一昨日、ラインの黄金を聴いた。完全な正確さと歌手たちの熱心な協力とのため、午後の試演はもう本物の上演といつてもよい位のものになっている。君がここにおいてこのオーケストラの快い音を聴けばなあ、ハーモニー、リズムその他に未聞の大胆な点が多くあるけれども全体は流れる黄金の如しだ。ラインの黄金の大波小波の音——ワーグナーが試演の際に音楽家たちを鼓舞しながら言ったところによれば「全体の中で最も馬鹿げていると言つてもよい位の部分」——は僕が聞いたことのある音楽の調べの中で最も驚くべきもの珍奇なものだ。そしてニーベルンゲン音楽、そして僕の耳と心から全然出て行こうとしない三人のライン娘たちの歌、今日はワルキューレが始まる、僕は言い様のないほどこれが楽しみなのだ、ところでもう出掛けねばならない。オーケストラを下に隠したことが素晴らしい発明であることは確かな様だ、音響効果の状態の凡てとなるとまだ予測は許されないが。この発明によって歌手たちの声は、どんなに強力な楽器編成の場合でも良くとおろし、オーケストラの響きは、夢見心地に響くのが常である教会の中において得られる印象と似ている。ズイクムントの役が今日どうなるのか僕は知らない、ニーマンが怪しからぬことに逐電したのだ、彼は或ることを悪く取って、いやになったらしい。毎晩八時にワーグナー家でリセプションがある。リストが金曜から出席している、フォン・シュライニッツ夫人は一日からだ。昨晚ローデが君の手紙の中の僕たち皆への箇所を朗読した。絶えず君の話が出る。この手紙は一つの叫びの積りなのだが乱雑で済まない、僕は既に述べた通り、出掛けねばならない。君がいつまでシュタイナバートにいる

のか僕たちに報せてくれ給え、心から抱擁したい

君の誠実な友なる ○

クルムバッハ街五六一号、年金生活者ユーリウス・ヘーンライン方

(1) 「ニーベルンゲンの指輪」の第一部。

二三、ニーチエより

〔シュタイナバート、七五年八月⁽¹⁾〕

わが親友オーヴェルベックよ、今はバイロイトから手紙がくるたびに半時間の痙攣が起こるのだよ。いつも僕はとび上がつて凡てを投げ捨てて君たちのところへ急がねばならない様な気になるのだよ！散歩の途中でしばしばあのオーケストラの響きの「流れる黄金」の如きものが不思議な誘惑の様に聞こえてくる、そうすると僕は何時も無限に心を奪われてしまった様な感じになる。僕を本当に慰さめてくれる唯一つのことは、君たちへローデ、ゲルスドルフとオーヴェルベックがそこにいることだ。僕たちの中の一人もそこにいないことだって、否、どんな幸福がそこで僕たちに見だされ得るかを僕たちが殆んど知らずに過ごすということだって、容易にあり得たのだ。しかし君が僕に色々と話してくれるだろう、僕は今からもう、まことに滑稽にも「この音はどんなだった？そしてここは？」という様な質問をしている自分の姿が眼に浮ぶのだが。

僕の湯治に関しては僕は、さし当り大した効果はなかったのじゃなろうかという若干の懸念 *curia* を持っている。しかし僕は少なくとも、今後守るべき食事療法の点では有益な良いことを学び、一人の眼識ある医師を知った。この人は医学の分野における革命家であって、薬剤調合の書類に替えるに科学的根拠のある台所用料理書を以てするのだ——簡単でしかも発見困難な考えだと思う。

僕はいつも独りでいた、そして皆と一緒の散歩の類を敢て行なうことはたまにしかなかった。それでも僕はドイツ最大の醸造所、深い花崗岩地下室を持っているシュワルツワルトのロートハウスを見物し、養豚とチーズ製造にも注意を払った。

僕たちの友ゲルスドルフへの頼みだが、同封の手紙を名宛人に渡して貰いたいのだ、これはワグナー夫人に尋ねれば可能だ。一つはフォン・マイゼンブーク嬢宛で、もう一つはパリのシュレ氏宛のものだ。僕はこれ等の人たちが外国からの客の中に見出だされると考えたんだ。手紙は読んでいいよ、君たちが興味があれば。近日中に僕は帰宅する、既に妹が僕の住居を整えて僕を待っている。

悲しみを持つ凡ての者に慰めが、希望を持つ凡ての者に保証が与えられんことを心から願いつつ

誠実をもって君のものなるF・N

(1) 八月十一日のもの。歴史的批判的全集、書簡篇第四卷二二八頁参照。

二四、オーヴェルベックより

バーゼル、七六年三月一三日

親友よ、木曜にツューリヒから戻る時の僕は君がまだここにいるかも知れないとの懸念を持っていなかったとは言えない、君が発したと知って一種の安堵を覚えた。そして天候が如何に不良でも、空気と空の転換が君の身体に全く良からうという僕の確信は揺がない。天候は無論ひどいわけだが、この様な場合に風邪をひくのは君ではなくて君の旅行仲間の方だということを僕は知っている、ゲルスドルフには実に気の毒だと思ふけれど、覚悟を決められんことを僕はエクスパートとしてお願いする。今日は妹さんのところでまた何か君について聞けると思ったのだが、何にもなかった。それで僕はこの手紙でちょっとした報告を直接僕の庵室へ誘い寄せようと思う、無論僕は来週土曜にま

たここを去って復活祭休暇の中の二週間を婚約者のところで過ごすのだけれど。その間は「ツューリヒ、ファルケンシュタイン」へ宛てれば手紙は僕に着く。今度帰ってきて僕は実に嬉しい人と面識を得た、ライプツィヒの若い神学私講師ハルナックだ、この人と僕との文通を君は知っているね。僕は彼において、実に博識な賢い人物を見出した、青年らしいぬべれがまだ可成りに付着してはいるけれど、ライプツィヒの彼の同僚とかその他あれこれの凡くから神学者より利口であつても何にもならないことが時と経験によつて分ればどうせ消えてしまふと思われる程度のものに過ぎない。彼は君をも訪ねる積りだったのだ、彼がライプツィヒで交わっている若者たちの仲間——彼は特にゲーリングという哲学的な私講師だったか哲学の私講師だったかを挙げた——では君の諸著が大いに問題にされているのだ、そして優秀な神学者の彼自身は主に君の第二の考察に感謝の義務を負うていと言明したが第三のものには余り関わりたくなさそうだった。彼にライプツィヒ気分があるのは勘弁してやらねばなるまい。僕は、彼が君にここで会えなかつたのを非常に残念に思っている旨を君に伝えることを引き受けた。彼自身は土曜に帰つて行つた。彼は僕に、僕たちの脅迫的な同僚（——）の或る手際のよい編纂物のことを話した、序でながらそれは彼の学問的啓発を助けていると共に邪魔してもいる。彼の雑誌の中に「これはハルナックに係していることではない。『脅迫的な同僚』が或る神学関係の党派的雑誌の編集者だったのである」僕は最近、ラガルドの報告に対して本当に怨みを抱いている一論文を見出した。その著者は、踏まれた虫けらがやるのよりもっと不ざまに身をよじらせ、むしろ、カルタで組み立てた家をこわされた坊やの様に振舞つていた。フォン・マイゼンブルク嬢の回想録についても僕は新自由新聞で、全体的には賞めているのだけれども全く態度の悪い批評文を見つけた。その批評は、無論控え目であるにせよ、報告されているマッソーニの手紙の信頼性を疑ふことを敢えてし、著者のワーグナーへの情熱は全く明らかにせられていた。ワーグナー夫人のお母さんが死んだことを君たちは知っているだらうね？その時どうしたかね？——あの回想録の僕の分は最近到着した、しかし僕はそれを直ぐ製本屋に渡したのでまだ全然読んでいない。——次の木曜に僕はどうかや

ら学長職という恐しく酸っぱい林檎を食うことになりそうだ、この比喩を飛び切りの意味で用いることが僕に許されることは君の知る通りだ。僕は幸いにも今は、この災難に対して自分を慰さめるのに必要であるよりもっと多くのものを持っている。講義以外には僕は今はツューリヒからの実に愛らしい手紙を受け取ることにみに忙しい、そして出来るだけ返事を書く。だから僕については報せるべきことが余りない。さらに報せるとすれば、昨日ここは物凄い大暴風で、最後にはどしゃ降りの雨が加わったこと、ウィーゼ川が今日の午後、今までになかった水位に達する恐れがあるとのこと、今朝ミュールハウゼンとバーゼルとの間の橋が旅客列車の通過中に折れたこと、今晚ゼルマル・バッゲがマタイ受難曲についての講演をすること。この最後の報告を以て僕の手紙の牛が語レリ *bos locutus est* の部分を終えるのが適当であろう。

君の力と元気が甦ってきたという様な報せを早く呉れ給え、ゲルスドルフによろしく、ここに置かれていた名刺を僕は、今回は彼のをこれだけしか得られないのを甚だ残念に思いながら読んだ。——二週間後の今日バウムガルトナーが旅立つ、今度の土曜に僕は多分レラッハへ行く。

幾重にも友情をこめて

君の

オーヴェルベック

二五、ニーチェより

シヨン付近のプラントニエール(二八七六)⁽¹⁾

良き親友よ、手紙を書かなかったことは本当に済まないと思う、君は罰として二度目の手紙をくれた。如何に君が寛容の気分の中にあり、如何に君がひとにも分かち得るほどの幸福を持っているかを僕は知っているよ。ところで僕

はここに坐している、相変らず孤独な男の僕は。坐しているというのは無論全く非本来的な意味でだ、何故なら僕は朝から晩まで登ったり降りたりしながら真の幸福感の何時間かを作り出しているからだ、多くの不快の真只中でだ——僕の身体の悩みが実にしばしば「道徳的な」悩みと間違えるほど似て見えることは君が知っている通りだ。それだからあの幸福感も、頭痛がないというだけのことよりも少々ばかり以上のものであるのが常だ。僕は非常に多くの問題において窮地におとし入れられている様な気がする——健康とは僕にとってはそのから抜け出ることだ。この幸福を僕は山をうろついている際に時折先取するのだ、これ以上の良いものを僕は知らない（「実に哀れだ！」と君は言うだろうし、その通りだ！）。

明日ジュネーヴへ行く。新しい町は野獣の様に恐しく思われる。ローザンヌ行きは全くベルガモ人のようだった、僕は気分が悪く悲しかった、そして再び月の下方にシヨン城が見えサヴォイの雪の山々が涼しい澄んだ夜の中に輝いた時には救われた想いだった。フォン・ゼンガー氏には手紙を出した。この最初の試みがうまく行かなければ、直ちにバーゼルへ帰る。

これ以上書くことは眼が許さない。養育ノ母 *alma mater* ⁽¹⁾ が君を先頭にして兵舎へと行進することになるのは実に嬉しい⁽⁴⁾。では元気なれ。

心から君の友

水曜。「白紙の裏面に斜めに」バウマン夫人にくれぐれもよろしく！

(1) この手紙は四月五日に書かれたものであり、次の二六番の手紙のあとに置かれるべきもの。歴史的批判的全集書簡篇第四卷二六三頁及びシニレヒタ編ニーチェ全集第三卷一三六八頁参照。

(2) 「山だしの」の意。ベルガモ人は田舎者の典型。ニーチェがローザンヌで道が分らずに迷い歩いたことについてはベルヌリ書第一卷一六九頁以下の「ピカル教授の思い出」を参照のこと。

(3) 大学を指す。

(4) 古い校舎が狭くなったので大学を兵舎へ移転させる様にとの請願書が六〇〇名の市民によって七六年三月に州議会に出されていた。それは結局七八年に否決された。

二六、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七六年四月四日

親友よ、数日前にゲルスドルフが手紙をくれたが残念ながら二度目も僕の部屋からだ。自身については彼は全然何も報せてくれなかったから君からもっと聞きたいと思う。君については僕の望み通りのものではなくて、ひどい悪天候が君たちを追って行ったので僕が心配していた通りのものだった。君はパンション・プラントニエール⁽¹⁾にまだ飽きないのかね、何週もその名前に馬鹿にされてきているのに。特に僕は、僕たちが一週間前からやつと恵まれている春らしい春の日日を君がもう少し人間の多い地帯で過ごしてきた後にこの手紙を手に行っているのなら嬉しい。また、僕は君に会いたくてたまらないのだけれど、来週バーゼルで再会したくはない。僕自身は勿論来週月曜には僕のパトロンの Hoffman から新しい職の奥義を授けて貰うためにそこへまた行かねばならない。いやいやながら行くのであることは察しがつくと思う、しかし結局は、こんな風に世の中から離れてばかり暮らすわけには行かない、今僕がここでやっておりますの婚約者のおかげでそうせざるを得ずにいる様には。僕は君にこうしか言えない、君もこんな女を探せ、そして他の目標と共にこの目標によっても健康へ駆り立てられる様にしてくれ給え、と。——僕の婚約者が目下ここでは凡てだ、僕の方もこんな良い土地でこんなに笑っている空の下で彼女を傍に持っていることに忘恩的ではありたくないと思っはいるのだが。音楽の一夕もちょっとしたものだ、これは彼女のピアノ教師フロイント氏のおかげで、この人はタウズィヒとリストとの弟子であり、これ等の巨匠をも彼の故郷——ハンガリー——をも恥ずかしめる人ではない。僕たちは彼を土曜日にファルケンシュタインにヘーガル夫妻と共に招いたのだ。シューマンの三重奏曲の後が主要曲目、ショパンの一連の珠玉的作品で、これをフロイントは実に見事に弾いた、それからマイス

ターズインガーとニーベルンゲンとのあちこちを思い出しながら弾いた。勿論この男はバイロイトへ行く、序でながら彼は決して単なるピアノ奏者ではない、そしてユダヤ人にしては立派な態度を持っている。——僕たちは新婚旅行の行く先をバイロイトにしようと思案で考えている、そして僕は差し当りドレスデンの宝くじの結果を期待している。最愛の友よ、若し僕が君に健康とそして君があそこへ行ける保証とを贈ることが出来るものなら僕は喜んで諦めるのだが。——フォン・マイゼンブルク嬢の第一巻を僕たちは昨日読み終えた、勿論実に心の重くなる作品だ、そして彼女の「⁽²⁾」は彼女の限らない愛情に値しなかった様に思われる。無論彼女の性格と比べては一人の男の性格は辛い立場に置かれることになり、ややもすれば弱々しく見えることになる。——僕の婚約者は君に心からよろしく言っており、僕が君に対して抱いている凡ての願い、特に健康で再会出来ればよいという願いの点でも僕と同じだ。とに角この夏は健康を本気で考えてくれ給え、そしてすっかり元気になって帰るといふわけに行かなかった場合には少なくとも毎日の仕事の一部を遠ざけてくれ給え。

心から元気を祈りつつ

君の

O

(1) 「春の宿」の意。

(2) Theodor (テオドル)。「理想主義女性性の回想」第一巻参照。

◆ニーチェはこの手紙を受け取ってその返事(二五番の手紙)を書き、六日にジュネーヴへ出掛けた。フォン・ゼンガーの女友達マチルデ・トランベダッハ嬢(二一歳のロシア娘で後にフォン・ゼンガー夫人)にニーチェが突飛な求婚の手紙を書いたのは一日である。

二七、オーヴェルベックより

バーゼル、七六年八月二日

もう一度短かい便りを、親友よ、古いバウマン洞穴からだ、ここを僕は明朝去る。僕にとってはこの洞穴によって印づけられるこの生涯の一時期を僕がふり返る時に、中心に立っているのは君なのだ。何と多くのものを君はこの中で本当に仲好く僕と分かち合ってくれたことか、何と多くの忘れ難いものを僕は君のおかげで新しい生活の中へ携えて行くことか！実に情ないのは、現在僕に祝辞をくれる友人たちが皆んな君についての不安の念を逃れられずにいるという事態だ。最近の情報は勿論、バイロイトが君の健康に良からうといつもひそかに考えていた僕の信念を元気づけてくれるものだった。今日は君の妹さんに会った、もう彼女は万事うまくやってしまっていて、土曜には君のところへ行く。九月に必要であれば無論僕の部屋を使っていいたいのだ、悲しいほどすつからかんになったけれど。このすつからかんにする作業を僕は顔に汗をかいて今終えたところだ、そしてこの数日の煩勞の下でこそ「結婚の港に入る」という心像が益々はつきりしてきたよ、僕はみじめな諸経験のことを言っているのだ、それらのためにこんな心像が生じてきたらしいのだ。ところで今からもう僕は、数日の、もっと穏やかな日を樂しむことを考えている。明日は婚約者のところへ行き、火曜に結婚式ということになる。そしてその後すぐにバイロイトでの再会だ！ところでそこでは僕たちはフロイントに関して珍しい経験「——」をすることになるらしい、若し彼に関してまだ経験が問題であり得るとすればだ！良き友人たち皆に心からよろしく、君には僕の婚約者から特によろしくとのことだ、彼女と彼女の母は君と君の妹さんが不在だったので最近実に実に残念がったのだ、特に僕たちは当時君があんなに早くバイロイトへ旅立とうとは夢にも思わないでアイゲンタールへ出掛けたりしたのだから。大事業の華々しい発芽の中にあって君が元気でいてくれることを心の奥底から願いつつ

君の誠実な友

フランツ・オーヴェルベック

(1)

ルツェルン付近の湯治場。

◇この手紙はバイロイト宛に出されたものである。ニーチェは七月二十四日にバイロイトへ発ち、八月五日にクリンゲンブルンへ逃避し、十二日（ラインの黄金）の第二回公演の前日）に再びバイロイトへ戻つて友人たちと会い、二七日にシュレ及びレーと共にバイロイトを去った。

二八、オーヴェルベックより

ドレーズデン、七六年九月八日

親友よ、この手紙がこの宛先で君に着くという確かな保証が全然ないのは残念だけれど、全くの見当違いではなからうと思う。何よりも先ず君に告げたいのは、僕が直きにバーゼルで君とまた会うということだ。僕たちは今度の木曜にここを発つ、そして多分来週の日曜に家に着く、これは二度目ではなくて初めてだ。昨日フラウを連れてザクセン・スイスへ⁽²⁾出掛けた、そのためゲルスドルフに会いそこねた、彼から遂にまた君のことを話して貰えるところだったのに、そしてバイロイトの行事がどんな工合に終わったかということも。しかし僕は、君には分っているかも知れないが、今こそ彼と話さなかったのを非常に残念に思う理由が他にもあるのだ。彼は僕たちの出発前にまた来るかも知れない。僕がここに着いた直後に、バイロイトから出された⁽³⁾の愉快とは言えない手紙がきた。この場合には全く願わしからぬほど長々とした敘述の意味するところは、要するに、彼が君から知らされた僕の見解なるものにどうして僕が到達したのかということの答弁を僕に求めているのだった。僕はまだ返事を出していない、しかし出来るだけ早く全く率直に書いて出すことにする、この手紙書きは僕には実に嬉しくないのだけれど。結局のところ彼自身の手紙そのものが答を暗示してくれているのだ。何故なら彼はまたもや彼の態度全体によって、彼——（——）——自身が彼の性格に対してよりも彼の精神に対して多くの関心を持っていることを示しているのだから。

君の知る如く、僕たちがここに着いた時は情ない状態だった。それ以前のことは、僕たちが僕の母に会った時の悪い状態に比べればまだ増しであつて、僕の母は長患いにひどくやられているのだ。その上悲しいことに僕たちは元々

氣候の荒いこの土地で天氣の激変にぶつかったのが大いに手痛かった、しかも僕のフラウは盛り沢山の新婚旅行で少々疲労していたのだ。しかし彼女と共にバイロイトの忘れ難い日目を体験したことが僕にとってどれほど価値があるかは全く君に言えないほどだ。僕たちは遅ればせながらここに到着してから直ぐに君の最後の考察を読んだ、そしてこの考察がこの様な表題を持っていることは僕たちには信ズベカラザルコト *Iustus a non lucendo* の様に思われた。僕たちにとってこれ以上の後祭りはなかった。——しかし君の調子はどうか？それについて全く分らずにいるのは、幸いにしてもう余り長いことではない。レーとバウムガルトナー一家に呉々もよろしく言ってくれ給え、バウムン夫人と古い洞穴にも。——フラウが君によろしくとのことだ、近い再会を楽しみにしながら今日のところは左様ならだ。

誠実をもって

君の オーヴェルベック

(1) 妻。即ちイーダ・オーヴェルベック。

(2) ドレーズデン東南方の名勝。砂岩の山地。

(3) ピアニストで音楽著述家のカルル・フックスである。バイロイトにおけるニーチェとフックスとの決裂についてはベルヌリ書第一巻一九三頁以下が参考になろう。

◆ニーチェはバウマン洞穴のオーヴェルベックが出た後の部屋で暮らしてから一〇月一日にレーと共にペー温泉（一九日まで）、その後ジュネーヴでアルバート・ブレンナーを加え、ジェーノヴァから船に乗ってナポリへ。マイゼンブルク嬢が借りていたソレントの別荘に着いたのは二七日。翌年一〇月まで病氣休暇を貰っていた。

二九、ニーチェより

〔葉書、消印はソレント、七六年二月一日〕

誕生日を迎えるわが友に良きもの願わしきものが無限に与えられんことを、そして僕たち二人に待望の再会が与えられんことを。お便り有難う、しかも返事は残念ながら葉書にせざるを得ない。何故なら全体的に僕の調子は去年の今頃より良くない。ジェーノヴァでは病臥したし、ソレントではもう四回激しい発作があった。ワグナー一家は数日前にローマへ去った。僕の祖母が死んだ。老ゲルラッハは良い人だった、哀れなパーセルの文献学よ！《ゲルラッハは死し、ニーチェは休暇を取っていた》ベルンのハーゲンが事情を報せてくれと頼んできたが、僕は報せてやることが出来ない。——ブレンナーが君の演説《オーヴェルベックの学長就任演説》のことを話してくれた。それを手に入れたいなあ！——忠実な奥さんと君との元気を祈る。

三〇、ニーチェより

(ソレント、七六年二月六日)

誠実な親友よ、ちょっと良くなったと思ったのだがまた悪く、持続的に悪くなってしまうて、まだ全然希望が持てない。健康になるための外的諸条件は凡て揃っているのだ、そうとあれば何か出てこなければならぬ筈だよ、ね？しかし辛棒が必要だ。幾つものお便りには心から感謝している、例え返事は殆んど書けなくても。ウォルツォーゲンに僕は、僕の健康が許す様になったら何らかのものを何時か渡すという確約を与えた《バイロイト雑誌》への寄稿のこと。しかし彼の企ての本旨は僕たちのものではない。僕たちをブリュッデマン一味と間違えたり一緒にしたりすることは断じて許せない。——

「——」⁽¹⁾「家はゲルスドルフの求婚に同意した。——金は、話し合った通りの郵便為替の形式でお願いしたい。どれだけ貰えるのか知らないが、その中の一〇〇〇フランを先ず送ってくれ給え。

カウフマンの相場表は欲しくない。⁽²⁾——ゲルラッハの後任についてはどんな話になっているかね？

僕たちは大いにヴォルテールを読んだ、今はマインレンダーの番だ。君と君の奥さんに心からの友情をこめて

F・N

(ソレント) 一八七六年二月六日

(1) 省略されているのはフィノチュエッティという家名である。フィレンツェの伯爵家を指すものと思われる。原書七一頁のフォン・シュテンゲル嬢に関する原注参照。

(2) カウフマンは、人名索引によれば原書三四頁に出てきた人物と同一である。カウフマン氏がニーチェのために為替相場表をオーヴェルベックに託したのであらう。カウフマンという名前は「商人」の意味であるから愉快である。

三二、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七六年二月一八日

親友よ、同封の証書を持ってソレントの郵便局へ行けば、僕が今ここで君のために払い込んだ一〇〇〇フランを受け取れる。手数料は一〇フランだ。事務所における君の会計は、今期分の俸給二二五〇フランから君が既に受け取った八〇〇フランと君の代講者への賠償一九〇フランを差し引いた一二六〇フランを君が要求出来る状態にあって、それを僕が君の代りに受け取ったのだ、それであの一〇一〇フランを払い込んだ後にまだ二五〇フランが今後君の使える分として僕のところにおいてある。他には今日は余りおしゃべりは出来ない、何故なら僕は有難いことには来週木曜に学長職を退いてフィッシャーに渡すので、君にも察しがつくと思うがこの最後の週はやらねばならぬことがたつぷりあるからだ。——君の今度の手紙を読んで僕の気持は本当に暗くなった、必ずしも驚いたわけではないが。どんどん良くなっているという報せをそう早く貰えるだろうとは僕だって考えはしなかった。しかし今は、回復を待たせられるのがもうそんなに長いことではなからうと期待している。君がまたもや、例えちよつともせよ、健康が甦ってきただけという感じを持ったことの値打は実に大きい。その様な前触れなしに健康が元の場所にすっかり納まることはな

ろうと思われる。新しい年に対して僕のフラウと僕との最も切なる願いは、君の健康が甦ることだ。——ゲルスドルフから昨日、実に驚かせる手紙を受けた。万事がまだぐらついているのだ、事態は絶望的ではないが、哀れな彼は明らかにひどく落着きを失って興奮している、そしてクリスマスの後あたりに数週間またここで過ごすことを考えている。彼はバーデン・バーデンから手紙をくれたのだが、シュレーズィエンの宛先を報せてよこしており、この宛先へ僕が手紙を出せば彼に届くのだ、ただし今月二日以後とのこと。僕がどんなに彼を歓迎したいと思っているかは君には分るだろう。——新しい音楽堂のこけら落としのことは、僕の間違いでなければもう君に書いたと思う。僕たちは予約者にはなっていない、しかし昨日はフィシャーの代理でベートーヴェンの誕生祝賀演奏会に出た。ツューリヒのフロイントが実に見事にト長調協奏曲を弾いた。ベートーヴェンを愛する気持はどんな場合でも変らない、だから僕はベルナイスの歌詞が加わっているエグモント音楽に余り文句を言う気はない、しかしそんなやり方で上演することの野蛮さには腹が立ってたまらない。——フラウと一緒にマイスターの徒弟時代を読み終えて、今は遍歴時代のくるみ色の少女のところまで来た。著者の卓越性が遍歴時代によって益々分る、しかし我々の周囲の今日の文学を考えると、この様な作品が既にドイツ文学の中に存在しているのだという驚きが始終念頭から離れない。——ゲルラッハの後任に関しては僕たち二人はあれこれと空想をたくましくした。彼もいることだ、つまりメリさ、だから他処からの招聘は全く考えられていない。——昨日バッハオーフェン夫妻が僕たちのところに来た、そして君に呉々もよろしくとのことであり、バッハオーフェンに対しては、一切の反時代的なものを遠ざけておくという彼の平生の態度を良しとしてくれる様にとのことだ。彼のお父さんが最近亡くなった、ゲルスドルフのおばあさんも。レーはまだ君と一緒にいるだろうか、彼はどうしているだろうか、そして彼のモラリス的な仕事は？まだそこにいるのならどうかよろしく。ローデには近く僕自身が便りをくれる様に頼む。フラウが呉々もよろしくとのこと、僕たちは土曜に一週間の予定でツューリヒへ行く。親友よ、僕たちの願いは何処へでも君に付き添って行く。何処にいても元氣と希望とを保

つてくれ給え。

君の

オーヴェルベック

何らかの事故を予防するために、金の受領を直ちに報せてくれると有難い。来週は僕の住所はツューリヒ、ファルケンシュタインだ。

三二、ニーチェより

ソレント、七七年三月二十六日

良き親友よ、僕は最近はずっと、眼病の悪化のため読み書きの出来る状態でなかった。それで僕に出来たことと言え、静かな沈黙の思いやりの中で君の痛みを尊重し、君の大きな喪失《オーヴェルベックの母の死》を悼むと共に、自然の根を切られても人間がなおも生き続けるのを全体的に不思議がることのみであった。そして僕はこう結論した、人間は彼が通例考えているよりもずっと多くの根を持っているのに違いない、人間は若干の根を失っても新しいのを作り出すのだ、と。同時に僕は君の結婚のことを考えた、そしてそれが最も良い慰さめとして君の役に立っただろうと思っている。僕が祖母を失ったことを君に書いただろうか？

僕の状態は僕に多くの危惧を起こさせる、僕は再び医者の方に頼る必要を認めて今はシュレーン教授（ナポリ大学）の世話になっている。ナルセインを頭に塗り込む、それから臭化ナトリウムを用いる、若干の食餌規定もある。三ヶ月後に報告することになっている。事実、今は眼はまた良好になっている（僕は読むことが完全に不可能だったのだ）。

先月は非常に悪天候だった、冷え込みと嵐と雨が殆んど絶え間なしだった。レーとブレンナーは三月末に発つ。ザイトリッツ夫妻が僕たちのところへ来る。僕たちはここに留まる。——ローデが聖霊降臨祭に結婚する。ゲルスドル

フの事柄《彼の婚約》はうまくない状態だ。

親友よ、奥さんによろしく、それからバウムガルトナー夫人、バウマン夫人、インメルマン夫妻にも。

ケーゼリッツに僕は感謝の返事を書かねばならぬのだが。

元気なれ、そして君の友の愛を信じてくれ給え。

僕はあれこれのことを考え抜いた、これ等は僕たちが会った時に君に先ず話さねばならない。

ソレント、一八七七年三月二六日。皆がよろしくと言っている。どうか本屋の勘定を払ってくれ給え。

三三、ニーチェより

〔ソレント、一八七七年春〕⁽¹⁾

誠実な親友よ、調子は益々悪い、だから僕は早く出発せねばならない、僕は三日毎に寢床に横たわっていた。明日船で発つ、ラガッツ付近のプフェーフエルスで湯治を試みる積りだ。手紙はどうかラガッツへ局留で。

僕が秋に講義を再開することは考えられない。だから！

どうか僕に少し力を貸してくれ給え、僕が僕の辞職願いを誰に（そしてどういう称号を付けて）出すべきかを報せてくれ給え。これは今のところ君の秘密にしておいてくれ給え。決心することが僕には困難になっている、しかしフオン・M嬢は決心が絶対に必要だと考えている。僕は今後何年も僕の病気が続くものと考えねばならないのかも知れない。

これは君を悲しませることだ、しかし他にどうしようもない。

フーク⁽²⁾の勘定を払ってくれるかい、同封の帽子屋の三、三フランの勘定も。

お便りは実に有難かった、僕は全くみじめな状態の時に受け取ったのだ。

奥さんに心からよろしく。君の友にして兄弟なる

F・N

ソレント、月曜日

(1) 五月七日と推定。歴史的批判的全集参照。

(2) ツェーリヒの楽譜店。

◇ ニーチェはソレントを五月八日に発ち、ナポリからジェーノヴァまでひどい船旅をして一五日にラガッツに着いた。

三四、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七七年五月一三日

親友よ、君の手紙が僕をどんな悲しみにおち入らせたかは見当が付くと思う。無論僕は最近それ以前に生じていた事情の凡てから推して既に不安になっていて、良いことは何も予感していなかった。そして君の手紙を受けた後でも僕の憂慮は、余りにも定めなくさまよっている。君の辞職の問題において何事かをひとりで、親しい人と相談せずに行ってしまうことは僕には余りにも苦しいことだった。それで僕は、君の了解は得られると思うし僕に課せられた秘密厳守を破ることによって如何なる悪用をも生ぜしめる心配はないと確信してヤーコプ・ブルクハルトと昨日話し合った。僕が話し出すと直ぐ、彼が僕の報告を受け取った態度によって、君への彼の関心についての僕の心からの期待が完全に裏書きされた。僕たちは差し当りこのことを最も厳密な意味で秘密にしておくことに意見一致した。君の辞職願いは、たとえ避けられないことであるとしても、ここ数週の間は全然急を要しない。こちらの側としても、君がもっと待つて、例えばプフェールスでの君の湯治の効果を見ることにしたところで、全然利益が損なわれはしない。だから、このことを直ぐさま押し進めねばならない特別な理由が君の側に生じているに相違ない、しかしそれについて僕に先ず報せて欲しいのだ。勿論僕は今君と是非じかに会って話したい気持で一杯だ。何時頃君がここへ来る

ものと期待出来るだろうか、或いは君が二、三時間ラガッツを離れることが出来るならそここの中間の何処かで近々会えないものかどうかを知らせてくれ給え。いよいよの時には、そうすることが君に必要なという手紙をくれれば直ぐに僕は日曜一杯ラガッツへ行く。僕は君が今そこで全くひとりぼっちなのではなからうかと恐れる、それにしても、僕はラガッツの温泉開きについて僕の知っている凡てから判断して、君が今からもうそこに腰を下ろそうと考えているのを不思議に思う。——ブルクハルトが心からよろしくとのことだ、そして君の病氣に深く同情していると伝えてくれる様にとのこと。僕のフラウもだ、直ぐに彼女は、ここにおける僕たちの未来についての僕たちの夢の大部分が今や消え去る様に思われると言った。個人の場合もそうだが、一つの所帯も結局は、一つだけぼつんとしていることを欲しない中心点の様なものなのだ、この町において僕たちの所帯は親しい他の所帯との結び付きが得られる見込みを殆んど持っていない。

出来るだけ早く便りをくれ給え、そして既に言った様に、それが君にとって望ましいとなったら直ぐに僕を呼んでくれ給え、何れにしても近いうちに僕たちはまたお互いに口で話し合わねばならない。

誠実をもって君のものなる

F・オーヴェルベック

◇オーヴェルベックは聖霊降臨祭休暇を利用して五月二〇日から二日にかけてラガッツを訪れた。

三五、 ニーチェより

〔葉書、消印はラガッツ、七七年六月一日〕

まあまあの状態だ。悪い日が一日あった。入浴は一七回。当局に対してはまだ何も処置を取っていない。ために予科をやめてみればうまく行くかも知れない。頭の全体的疲労は無論まだ消えそうもない。月半ばにはもっと高い処

へ行く積りだ。——プフェーフェルス村への道、橋、欄干はきれいに修復された、君にはお気の毒だ！今日から温泉楽団が演奏を始める。君と奥さんの元気を祈る。

三六、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七七年六月三日

親友よ、ラガッツにおける悪い一日というのが僕の去った翌日だったのではなからうかと気になる。しかしあんなに長く離れていた後にあの様な再会をした場合にほんのちよつとも脱線しないという様なことがどうしてあり得たろうか！君が本当に今度の冬学期にここでまたやって見る気なら、予科をやめることに決心が付かないままではいけないと思うよ。僕は昨日ヤーコプ・ブルクハルトと話したいと思ったが、会えなかった。何れにせよ君は今断じて自分の健康だけを考えることにしてくれ給え。実を言うと僕は、君が自然と楽しい時間とに心からの喜びを感じてゐることを知って、君の状態に大いに望みを持つ様になったのだ、ところで自然は楽しい時間を僕たちにも最近もたらしてくれたよ。とにかく君が早く本当の元気を感ずる様にならないければ、君がここで秋にまた勤めを始めようとするのは全く氣遣わしい。早速君のところへ行つて自分で様子を見たい氣持だ。今回、君に再会したかしないかのうちにまた引き離された時は僕は本当に悲しかった。君は今もうあんなに独りぼっちではなからうね、そして美しい日日がその後君にも恵まれたに違いない、何れにせよ今日は好日だ。——最近ゲルスドルフから手紙がきた、ローデにはたつた今手紙を出したところだ。前者についてはB「¹」を通じて一昨日消息を得た、この男はすっかりしやれ者になってやつて来た、金の首飾りをぶら下げていただけのことだがね、僕はこのお化粧の動機を考えてみたのだが、最近プロイセンとトンガ諸島との間に結ばれた条約が何かに対して敬意を示さずにいられなくなったものとしか説明が付かなかった。ところで彼は今度の冬学期についての彼の理性的決意をまた放棄してしまつたらしい、彼

の言によれば、彼がいないと彼の母が仕上げ得ない或る翻訳のためだそう。遂にブルクハルトは今のフランスでは問題にされないことになるのだろうか？⁽²⁾あの意向変更が目的に適っているだろうかという僕の徹底的疑念、或いはむしろその逆を良しとするという僕の言葉に対してBは、彼が前の冬に得た知識の有効性と量についての彼の感じを僕に話した。量の方はとも角として、彼がちゃんとした方法を身につけておらぬ限り有効性の方は疑わしい。——木曜に評議員会の滑稽な会議があつて、バグゲのケーゼリッツに対する苦情が議せられた。メーリとハイネとが討論の獅子であつたが、彼等はお互の尻尾まで食い合つた、何故なら彼等は意見が反対だつたから。学長による譴責ということに決つた、Kはその後それをフィシャーから受けたことと思う。この事件についてのフィシャーの道徳的興奮は、彼がその瞬間の辛さと下らなさとを乗り越えるのを助けることになつただろう。——僕たちの給料は多分今月二一日にはもう出ると思う。だから君は今後は、金が要るならば、最終支払日の直ぐ前頃に来ればよいだろう。——フラウが君に呉々もよろしくとのこと。君の回復への僕の心からの願いを彼女も分かち持つている。

君の古い友

オーヴェルベック

(1) アードルフ・バウムガルトナー。

(2) アードルフの母のバウムガルトナー夫人はブルクハルトのものをフランス語に翻訳中だったのである。同夫人は既にニーチェの第三及び第四反時代的を翻訳し、後者は出版されていた。

三七、ニーチェより

〔葉書、消印はラガツツ、七七年六月六日〕

三日悪い日が続いた。お便りはベットのの中で受け取つた。医者は湯治を続けることに反対であり、高地へ出掛けることをすすめる。今度の日曜に僕は発つ。それまでに五〇〇フランを届けてくれることが出来るだろうか？(集金為

替で)。ここはむしろむしろする空気で非常に暑い。——ローデの結婚は夏休みに入ってからだ。

元気なれ、良き親友よ

(水曜)

三八、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七七年六月八日

親友よ、君の今度の報せは、その前のを受け取った後なので、またもや驚きだった。有能な臨床医に相談すべきではなからうか。チューリヒのユグネンを有能な人だと賞讃する声を僕は最近聞いた。相談してみる気があれば、僕の義母がお役に立つと言っているから利用し給え。さもなくばドイツの何処かに問い合わせるべきではなからうか。今度の冬学期に隠退状態を続けることに決ったわけではないにしても、万事がまたぐらついてしまったのだと思えてならない。最近ズィーベックが今度の冬学期用の講義目録のために君の住所を僕に尋ねた。僕が君と聖霊降臨祭にラガッツで会ったことが皆に知られていなければ——僕が帰路にチューリヒの駅でぶつかった最初の人間がハーゲンバツハだったのだ——僕は返答を避け得たのだがな。とも角も君はまだ数日は考える暇がある。次の評議員会は多分今月の二一日だ。——僕が昨日君のために国庫から引き出した五〇〇フランが今日は君のところに着いていると思う。直ぐに残りを引き出す全権を君は僕に与えるだろうね。何れにせよ出来るだけ早く、君が再び訪れようとしている高地から信号を送ってくれ給え。そこが君に効能あらんことを！

誠実をもって君の

オーヴェルベック

ケストナー嬢の死去のことはバーゼル情報によって既に知っているだろう。彼女は特別な病気ではなく老衰のために

亡くなったのだ。一昨日は君のためにゴータの君の保険の割増配当を受け取って同時に今月三〇日からの新しい保険料を払うこともやっておいた。僕たちは八〇パーセント「儲けた」、だから新しい保険料として二マルク五〇を支払った後にまだ八マルクつまり一〇フランが君のものとして僕の手にある、これは序での時に、或いは君の請求があれば直ぐに届ける。昨日これと一緒に送ることが出来なかったのは、五〇〇フランが集金為替の最高額だからだ。裏面に、約束してあったラブランド人たちの歌のメロディーを記す。

◇楽譜が書いてあるのだが省略する。

三九、オーヴェルベックより

バーゼル、七七年六月二〇日

済まないね、親友よ、今日やつと返事を書くなんて。⁽¹⁾フリッツ・ブルクハルトは昨晩までバーデン・バーデンで湯治をしていたのだ。今日やつと彼に会えた。彼は君に呉々もよろしくと言うと共に、君が長く予科から離れていることは好ましくないがアヒレス・ブルクハルトによる代理の継続はまだ可能であろうと明言した。とにかく予科の側からは、君が理事会にその意味の願書を出せば、その弁護をして貰える。ところでその願書は今の理事長の参事官カルル・ブルクハルト博士に宛てるべきだろう。これで僕は、君が今度の冬学期はここに居るものと考えられるので心から嬉しい。差し当っては君がローゼンラウイバートに依然同じ様に満足していることのみを願う。一昨日送ったイーダ・リッチュルの婚約通知その他は着いたと思う。直ぐにまた良い報せを聞かせてくれ給え。フラウがよろしくと言っている。

誠実をもって君のものなる

オーヴェルベック

(1) ニーチェは六月一日にラガッツを去つて途中ルツェルンで一泊の後ローゼンラウイバートへ行つた。そこからオーヴェルベック宛に手紙を出したものだと思われる。

四〇、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七七年六月二十九日

親友よ、昨日は会計係から言われて、七月一日分の君の俸給の残額一〇八五フランを国庫から受け取った。君がこれを何時でも使える様にこのことを早速報せておきたい。君の長い沈黙のために僕はまた心配になりかけている、僕たちは最近君の健康の変り易さを大いに経験したからね。フリッツ・ブルクハルトとの会見の結論を報せた僕の手紙は受け取ったと思う。君はどう決めただろうか？このことで僕のやれることがまだあれば勿論直ぐ報せてくれ給え。母なる評議員会は君の不在中に不妊だったわけではない。この夏に彼女はもう四人の男の子を例の黒衣の助手の援助下に産んだ、一番後はミステリとタイヒマンだ。それで彼女は力が尽きた様に見えるが、それでも次の学期のためにまたもや、プラークへ行くコルヌの後任として一人生まれる筈だ、ゾルダンという人だ。まだ講義があるので今日はこれ以上書けない。そもそも今後はプログラムのために大忙しになりそうだ。——最近僕は、五月二二日のための僕の祝辞に対する返事としてワグナー夫人から手紙を貰った。明日午後僕たちはレラッハへ行く、バウムガルトナーはまた考え直して今度の冬学期には兎も角もイエーナへ行く。フラウが心からよろしくとのことだ、そして早く良い報せがくるのを僕と共に待っている。

君の
オーヴェルベック

(1) 教員を産み出すのでこう言われていたのだろう。

(2) ワグナーの誕生日。

四一、ニーチェより

〔ローゼンラウイバートからの葉書、消印はマイリンゲン、七七年七月二日〕

わが親友よ、依然として目立つた回復は何も報せ得ない、とにかく僕は、何れはこの滞在が効き目を現わすに達しないと思つてゐる。この高地は全く美しく、力に満ち、健康的だ、そしてホテルは非常に良い。僕は今サン・モリッツ鉱水を飲んでゐる。ラガッツのあとにこの療法を行なうことを僕は大いに勧められたのだ、根深いノイローゼに對する薬としても。——妹が今月六日頃にやつてくる。どうか彼女に金を渡してくれ給え、その受け取り作業には心から感謝してゐる、ブルクハルトとの会談にも。このことではまだ何もやつていない、もう少し待つ積りだ。

F・N

四二、ニーチェより

〔ツーク付近のフェルゼンエック館、七七年七月半ば〕

わが親友よ、妹とのランデ・ヴーが長くなって、ローゼンラウイへ戻るのが一週半ほど遅れてゐる。僕たちはお互いに実に多くの話さねばならぬことがあるのだ。僕たちの滞在地はツーク付近の療養所フェルゼンエックだ。

「一理想主義女性の回想」の君の蔵書をここへ送つてくれることが出来るだろうか、それが余りにも綺麗に製本されてゐないものと仮定しての話だ。僕たちは勿論土曜にはもう出発する積りだけれど、僕にはそれが入用なのだ。僕の本はナウムブルクにあるのだ。僕の状態は哀れなほど變化する。

今日は君と奥さんに僕たち二人の心からの挨拶のみ。

フェルゼンエック、水曜。

四三、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七七年七月三〇日

親友よ、来たる冬学期に対して君が最近決心したことについての僕の喜びをまだ述べていなかった。一昨日以来僕たちはここにいて、差し当り僕はフラウと義母とは別居だ。庭の中の素晴らしい木蔭に離れて立っている小さな建物があって、僕は今後数週間残念ながらどうしても必要な勉強部屋をその中に定めたのだが、この隠遁生活の中から君に挨拶をして、それから直ぐに僕のプログラムに取り掛かる積りだ。——君の妹さんは金曜に非常な元気で僕たちのところに現われた、そして僕たちは彼女から君がどんなにアエジで虐待されたかを聞いた。グラート街の君たちの住居は実際、大した幸運をひき当てたらしいよ。僕はバーゼルでの最後の日にそれを検分する暇が残念ながら全然なかった、けれど他からそのことを聞いた。ただ僕が実に悲しいのは、僕たちが遠く離れてしまうことだ。この隔離に対して気を静めるためには、ソレントの時のことを考えねばならぬ位だ。

昨日は哀れなW「⁽²⁾」が、ほんのちょっとだけだがやってきた。彼はここの役所に教職の件で出掛けた。彼の事情は実際絶望的なものだ、彼を助け得るのは結局のところマエケーナースの様な人の慈善のみだろう。彼は彼の婚約者のことを考えねばならず、彼のお父さんの援助は彼のかつかつの生活にさえ足らぬ位で、しかも止まりそうになっている。それで彼は教職につくことを考えているのだが、彼の予備教育不足のために殆んどどう仕様もない障害にぶつかってばかりいる、そして何れにせよそのために、彼が思っている以上に彼のその他の真剣な生活計画も脅かされているのではないかと思う、その様な計画は落着いた余裕があってこそ可能なのだが。彼はドイツのあちこちの役所にも問い合わせがあり、この数週間決定を待っているのだが、今は実に憔悴して見える。ここへ来ることを僕がすすめたのだが僕は実のところどうして良いか分らないのだ。彼を僕は心から可哀そうだと思う。ケーゼリッツの状態はそれに反して素晴らしいものだ、そして君の手伝いを何でもすると言っている。ところで君がバーゼルへ帰る前にここに寄って行かないかね。君が来れば僕たちは皆んな非常に嬉しい、そして僕はここが、特に今日遂にめぐってきた様

な好天の日には、実に素晴らしいということだけは言える。空気は相変らずバーゼルとは全く違っている。君のための宿泊所は、君に非常に適していると思われる北向きの部屋だ。ただ八月一二日から二〇日までの間は、出来れば避けて欲しい、他に来訪者があるから。君がくれば皆んな大喜びをする、このことを義母とフラウが君に保証しながら、心からよろしくと言っている。君がこなければ僕たちはそう早くは再会出来ないだろう、僕たちは一〇月一日より前にはバーゼルへ帰らないから。絶えず快方に向っているという報せを直ぐ僕にすることが出来る様なら嬉しい。それを切に切に望みつつ

君の オーヴェルベック

(1) トゥーン湖南岸に近い避暑地。

(2) ウィーデマン。七五年一二月初めにガストと共にバーゼル大学に入ったザクセンの音楽家。ガストは七八年四月まで在学したが、ウィーデマンは七六年三月までであった。

(3) アウグストウス帝の友人で、ヴェルギリウス、ホラティウス等の文人たちの庇護者。

四四、ニーチェより

(ローゼンラウイバート、一八七七年八月)

親しい親しい友よ、僕は数日中にバーゼルへ帰る。妹はもうそこにいて色々整えている(彼女はいつも大いによまぐやる、この種のこと)。そこから僕は何れの日かに君のところへも、否、君たちのところへも出掛ける積りだ、君と語りそして議することを僕は心から望んでいるのだから。この高地滞在が僕の健康狩猟全体の中で最も賢明なものだったことは確かだ、しかしここからも健康を持ち帰るわけではない。それでも暫くは持ちこたえろと思う。しかし一つのこと僕には今、実際にはつきりと分る。つまり、結局は大学の勤めは僕にはやり切れないということだ。僕が一日に使える視力は約一時間半なのだ、このことは注意深い観察によって今の僕に分っているのだ。それ以上長く読

んだり書いたりすれば、その日のうちにもう痛みで償わねばならないし、その後数日間はおなじみの激しい発作に見舞われる（昨日もまたそれにやられた）。僕は、医師としても人間としても優れているフランクフルトのアイザー博士（夫人同伴）の四日に亘る来訪を得た、そしてこの人の治療法に僕は今すっかり身を委ねている。彼のみたところでは、シュレーン教授は僕を類似療法⁽²⁾といつてもよいやり方で治療したのだ。

さて今や僕の諸思想が僕を前へ押しすすめる、僕は実に豊かな一年（内的成果において）を過ごしたのだ。日日の苦しい文献学職務の古い苔の層が取り除かれさえすればいいのだという気がする——そうすれば一切がみずみずしい緑になるのだ。今僕が自分の収穫をはたらかしておかねばならず、それに対する新鮮な感覚を失うことによつて一切を失うことになるのではないかと考えると憂鬱だ！どこかに小さな家が一軒あればいい、そうすれば僕はここでの様に毎日六——八時間散歩をしながら色々なことを考え、あとでそれ等を完全な確信をもつて一氣に紙に書きつけるのだ——そんな風に僕はソレントでやったのだし、ここでもそうだった、そして全体的に不快で陰鬱だった一年から多くのものを手に入れたのだ。（ねえ、君には僕の自負のこの率直さを託びる必要なんかないね？）

他の凡てのこと（しかも色々なこと）は口で伝えることにする。君の御家族皆さんに、温かい思いやりと繰返してお招きに対する僕の心からの感謝を伝えてくれ給え。古い親友よ、心から君と握手しつつ幸いを祈る！

F・N

（１） ニーチェが七月にマイリンゲンで会ったアイザー博士はニーチェの愛読者であつた。

（２） 患者にその病毒と同種の薬を少量用いる療法。

四五、オーヴェルベックより

ツューリヒ、一八七七年九月一日

親友よ、君の手紙は僕を実に喜ばせ、僕を辛い不安から解放してくれた。君の滞在地さえ僕には良く分らなかつた、何しろ僕たちがバーゼルを発った時に君の妹さんさえその点について確実なことを言ってくれることが出来なかつたのだもの。三日前にウィーデマンから、君の妹さんがいつも良い報せを受取り続けてきた旨を報せて貰えたのが、せめてものことだった。君の来訪を僕はもうすっかり諦めていたのだ。バーゼルから来るのだから妹さんも一緒に来るのが疑いもなく可能だろう。二人ともここに泊まれるよ〔欄外に。一晩だけという意味でないことは勿論だ。〕、そして是非泊まって貰いたい。しかしこのことはフラウに言葉をゆずることにして、僕としては、来週は来ない様にと
 いうお願いだけ述べておく。その中の二日間僕はルツェルンでトライチケと会うことになっていて、彼がまだその日を決めてよこしていないのだ。さらに木曜か金曜にM〔――〕B〔――〕⁽¹⁾がトランクを取りにまたやつてくる、そして彼とぶつかることを僕は全然おすすめ出来ない。経験セシ我ヲ信ゼヨ Crede mihi experto。十日間僕たちはこの自称「芸術家」を泊めたのだ。幾つかの珍しい経験をいざれ話してあげるよ、びっくりする様なものでないことは勿論だが。この男はまさしく、音楽的教養俗物と言えば想像が付きそうな人物であつて、美女ヘーレナ、フリティオフ、オデュセウス、アルミーニウス、⁽³⁾冬の夜の童話、最近はまだスコットランド伝説、こういったものをめぐつて甘ったるい鈴の音を響かせている。半ば強制的に来訪したこの男は直ぐには出て行かず、皆があんなに願つていた君の来訪は全然なさそうに思われた。だから僕たちは君の手紙が来るまでは運命に対してぶつぶつ言っていたのだ。再来週ならこちらでは皆が君を大喜びで迎えるだろう。月末頃に義母はプファルツへ行かねばならない、そして何れにせよ余り待たせずにやつて来て欲しいと君にお願いしている。一〇月四日か五日に僕たちは帰る。――君の状態に対する僕の見方は全く君と同じだ。

そもそも今度の冬の主要課題は、肝腎の点を決して害しないこと、つまり君にとって大事な事柄へ楽しく帰って行くために健康を保持することだろう。目下その事柄を中止せざるを得ない君のいら立ちには僕は心から同情する、何

故なら僕は君が今年の苦境から宝物を手に入れる術を心得ていたことをちゃんと知っているからね。君が庵室を持つていれば本当にいいのだがな、僕はこの数週間ここにそれを持つていたのだ、僕には贅沢だった。僕に肝腎だったことは勿論、僕のフラウが彼女の家族の間で明らかに快適な休みを過ごしたことだ。皆が君にもう直き会えるのを心から楽しみにしている、僕だって少なからずだ。

君の
オーヴェルベック

ウィーデマンかケーゼリッツに会ったら、僕が昨日アーラウへ手紙を出したことを前者に知らせる様に頼む。

(1) モーリッツ・ブッシュであらう。ブッシュは、オーヴェルベックがライプツィヒの大学生時代に交わったトライチケ仲間の一員で、ジャーナリスト。

(2) ノルウェーの伝説的英雄。

(3) ゲルマンの英雄。西暦九年にローマ軍をトイトブルクの森で破ったヒエルスカー族の長。

(4) アールガウ州の首都。

四六、ニーチェより

〔バーゼル、一八七七年秋〕

親しい親しい友よ、バーゼルに帰った記念として僕はいつも悪く過ごしてきた。さて僕がツューリヒでもっとお行儀がいいかどうかを共に見ることにしよう。そうであればいいと僕は君の、否、君たちのために願う、君たちが病人を招いたことを後悔せずに済むために。

それで、僕は明後日、木曜午後、ベーツ山地鉄道で君のところへ行こうと思う。一二時二八分ツューリヒ着だ。駅で僕を待たないでくれ給え、どうか！二、三日滞在出来るかしら？

再会が何と楽しみなことか！

今日はフォン・マイゼンブーク嬢が僕たちのところにいる。

僕はブレンナーの小説（「ルントシャウ」誌に載った）《題名は「燃える心」》。この小説はアルバート・ニルソンという偽名のもとに一八七七年七月のドイツ・ルントシャウ誌に載った》を持って行く積り。

皆さんに心からの感謝と挨拶を前以て送りつつ

F・N

火曜、ゲラート街二二号

（1） ベーツ山地はバーゼルとツューリヒの中間のブルツク付近にあり、一八七四／七五年にトンネルが作られてバーゼルからブルツク經由でツューリヒへ行ける様になった。

◇ ニーチュはロートプレッツ夫人のところ（ファルケンシュタイン荘）に九月一日から一九日まで滞在した。

四七、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七七年九月二三日

親友よ、君の出発の翌日が曇ったいやな日だったことが僕たち皆にとつては君が去ったことに對する最良の慰さめだった。君の方の天候が別様であつたのならいいがと思う、特に君の健康を考えるとね、そして君が今度の小旅行から良いことばかりを感じてくれたのならしいがと思う。今日はあれこれのことを報せなければならぬ、僕たちの再会まで延ばしておきたくないのだ。第一に、僕が昨日受け取ったパリのゲルスドルフからの、実にぞんざいに興奮しながら書いた一枚の小紙片の手紙についてだ。スイス切手の貼られたパリのフォン・シュテンゲル嬢《この問題》（一二行目以下の）と関係のあるフレンツェの伯爵令嬢の家庭教師で後には相談相手。五一頁六行目と九四頁八行目をも参照のこと》宛ての手紙が同封されていて、それを投函することを僕に依頼しているのだ。ゲルスドルフは、彼への送付物がベルリ

ンから僕に届いたら、フィレンツェ局留で彼自身に送ってほしいと言っている。僕の知るところから判断して、君には分るだろうが僕はこの問題に関係することは非常にいやなのだ、少なくともそれを何とか促進する意味で関係することは。僕が君にこのことを報せるのは、また何かが進行中であることを君が知っていて、そして干渉すべき時があったらそれをなおざりにしないためだ。僕はゲルスドルフが非常に心配なのだ。次に、僕は最近戻ったフランケンホイザーと君について話し合った。君は人間種族の中で彼の専門ではない方の半分に属しているのだけれど、僕の話からとつくと君の病気の性質を、他の人たちが実際に眼で見て分かるよりも正確に認識しているので、僕は彼の意見を信用しているのだ。彼は断固として電気治療家に相談することをすすめており、その様な医師としてハイデルベルクのエルプ教授を推薦している。このことについてアイザー博士と話し給え、何れにせよこのことを心に留めてくれ給え。またフランケンホイザーは、長い散歩が君に必要であり、その時には疲れることも恐れてはならないと言っている。——ザイトリッツはもうここへはこない、そしてザルツブルクに彼の居所を置くだろう。ホテルから僕に戻されてきた原稿とそして「ルントシャウ」誌とを僕たちはザイトリッツが主人に告げた宛先（ミュンヒェン、マクスイミリアン街一七号三階）へ送ることにする。

昨日B「——」がトランクを取りにきて別れを告げて行つた、僕自身は僕の筆写作業を終えた、僕たちを近頃ほつとさせた雞はつぶされた。しかしもう一羽はその後逃げてしまった。従つてあれがベットの所で死ぬだろうという予想は当らなかったことになる。——三日前から僕は僕の庵室でストーヴを燃している、ファルケンシュタイン荘では女性たちが羊毛頭巾、毛糸ジャケツ、短外套、ショールその他にくるまって物も言わずに荒々しく一〇度の中を這いずり回っている。今日は少なくとも太陽がまた出てきたが、今のところは寒い。

土曜に義母は出発する。君が何時フランクフルトにいるかを出来るだけ早く報せてくれると彼女は喜ぶ。皆が君に心からよろしくと言っている、妹さんにも同じくよろしくお伝えあれ。フラウ共々君に直ぐ再会出来るのを楽しみに

している。

君のオーウェルベック

(1) 「人名索引」で分かる様に、フランケンホイザーの専門は婦人科である。

(2) ニーチェは近いうちにフランクフルトのアイザー博士を訪ねる予定だった。

四八、ニーチェより

〔葉書、消印はバーゼル、七七年九月二十五日〕

今受けたお便りにお礼の言葉をちよつと。僕たちの哀れなゲルスドルフを僕たちは今はほつて置かねばなるまい、事柄はもう止めようがない。彼はパリから手紙をくれた、そこにNと⁽¹⁾その父親とが⁽¹⁾いるのだ、ゲルスドルフは万人に対し、特にフォン・マイゼンブーク嬢(ノ)に対して怒りに満ちており、Nだけが是認と愛顧を得ている。今啓蒙してやっても彼を怒らせるだけだろう。彼は彼女以外の如何なる人間をも信用しないのだ。哀れだ、気の毒なほどだ。——アイザー博士は一〇月第一週に僕を待ちもうけている。バウムガルトナーは今日発つ。——電気療法は納得出来る、僕はきつとハイデルベルクへ行くだろう。僕は自分がすっかりいやになった。君のところは、君たちのところは何と良かったことか。君と奥さんとの再会を楽しみにしつつ！

N

(1) ネリーナ。フイレンツェの伯爵令嬢。

四九、オーウェルベックより

バーゼル、七八年三月九日

親友よ、シュマイツナーが三月七日の日付でこう書いてきた、「今日私はライプツィヒから、E・W・フリッチが破

産したという報せを受けました。それで私は今やどうやらワーグナーの『全集』を、そしてニーチェの『悲劇の誕生』を手に入れることになるかも知れません。必要な処置を既に講じました」と。

序で言えば、僕は君が去ってから、きびしかった冬を思い返しながら、君を案じ続けてきた。君の無事到着を僕たちはもう知っている、明日は君の妹さんが僕たちところで食事をするから、もっと色々なことが分る。君が戻つての楽しい日日が早く来ればいい！フラウが心から元気を祈ると言っている、僕もだ

君の
オーヴェルベック

《四九番の手紙は裏面にニーチェの手でこう書かれている、ただし当時の彼の普通の書体ではない、「従つて——三度言うが——宗教の衰頹と共に国家も衰頹する——しかしこのことはどう見ても不幸ではない。》

(1) ニーチェは三月初めにバーデン＝バーデンへ出掛けて水治療を試みた。

五〇、ニーチェより

〔バーデン＝バーデン、一八七八年春〕

明日（木曜）ザール河畔ナウムブルクへ発つ。

親友よ、明日ナウムブルクへ発つ。療養は全体的に余りにも短か過ぎた、それはそうと冷水は主要事ではなかったのであつて、独居と散歩とが有効なのだ、本能が繰返し僕に指し示すのもそれなのだ。ともあれ——ここでは僕は我慢出来た、これに反しバーゼルの冬は夢魔の様に僕の上にのしかかつていた——そして思い出の中では今でものしかかっている。

四月一二、一三、または一五日に僕の所得収益税を払ってくれる様にお願ひ出来るかしら？そのために郵便為替で三五フランと申告書を送る、後者の封印をお願いしたい。いつも心から君を思いつつ、君の素晴らしい奥さんにもよろ

しくお伝えを乞いつつ

君の フリードリヒ・ニーチェ

◇四月五日にナウムブルク着。二四日にバーゼルへ出発。四月末に「人間的」が友人たちに届けられた。六月末に妹との同居生活は解消し、ニーチェは市の外れに近いパッハレテン街一一号へ移り、妹はナウムブルクへ帰った。

五一、ニーチェより

〔葉書、消印はインテルラケン、七八年八月二五日〕

わが愛する友よ、今までのところ僕はうまくなかった。僕は或る高い山、グリンデルワルト付近のメンリッヒエンの上⁽¹⁾にいた、そして僕の健康が益々悪くなつたので三週間後にそこを去った。今は僕の望みをインテルラケンにかけている、ここで僕は今年の三月にバーデンでやつた生活と同じ様な生活を始めたのだ。しかし、はかばかしくない。若しかすると僕は結局君たちのユートリ山のウィール博士⁽¹⁾にまた身を委ねることになるかも知れない。――僕⁽¹⁾のこの住所はホテル・ウンテルゼーエンだ。しかしこれを漏らすなかれ！⁽¹⁾落着きが僕にとって必要なのは嵐の海の船頭にとってと同じだ、ホラーツイウスの頌詩「静穏 *oium*」等を参照あれ。心から常に君を思い、良き再会を期待している。

75

敬慕するツューリヒの皆さんに呉々もよろしく、特に奥さんに。

F・N

(1) ニーチェは七五年七月にシュタイナバートで、当時ボンドルフの医師だったウィール博士に会い、その後たびたび世話になった。ユートリ山はツューリヒ西郊の山で、ウィール博士はこの療養所へ移ってきたのであり、ニーチェは七七年九月のロートブレツツ家訪問の際に同療養所へ出掛けている。

五二、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七八年八月二八日

親友よ、この休みの天氣がひどいので僕は君から余り喜ばしからぬ報告がくるのではないかと既に氣になつてゐた、そして今受けた報告は残念ながら予想より良くなかつた。君がグリンデルワルト付近の高地に巣くつたことは既にドレーズデンでシュマイツナー氏から聞いていた。君がせめて今はずっと下にいるのを知つて嬉しい。良かつたらもつとずっと僕たちのところまで降りて来給えよ。義母と義妹が昨日海水浴から帰つてきたので僕たちファルケンシュタイン族はまた一緒だ、そして君がくれれば心からの喜びをもつて再び迎えるだろう、君がまたウィール博士の療養所へ行くという見込は僕たちに少々不安を感じさせるけれどね。フラウと僕はまだ一ヶ月位はここにゐる。ドイツから僕は一週間前の今日歸つてきたのだ。イエーナとドレーズデンでの色々なことを君に話さねばならない。ドレーズデンではフックス博士に会つたが、その際に彼にとつて有利だったのは、僕が全く好意的であるとは限らない先入見をもつて彼と会つたことだ。僕は彼と共に非常に面白い一日を過ごした。この熱血漢は君の著書(1)に実に感激してゐて、君が今所有している最良の読者であるかも知れない。僕から主として得たいと思つてゐたものを彼は彼自身驚いたであろうほどにはつきりと与えられたのであつて、それは、一種の覚醒の時期に彼が君の書にぶつかつて正氣づかせられたことの祝辭を僕が彼に言つてやつたからだ。——ゲルスドルフのお父さんが亡くなつたことを君はもう知つてゐるかい——既に七月にだ——。ゲルスドルフはオストリッヒ(2)へ移る。それ以上のことは僕にも今は分らない、そしてまた今はこれ以上君に文字を読ませたくない。何故なら僕は君に直ぐまた会えると思うし、今日は主として君に、僕たちの間の連絡がやつと回復されたことの喜びを述べれば足るのだから。とにかく直ぐまた僕に短かい報告をくれると有難い。——家の者一同が君の元氣を祈つてゐる。僕のフラウは特にだ、そして僕自身も。

君の

オーヴェルベック

(1) 勿論、「人間的」を指す。

(2) ゲルスドルフ家の地所。シュレーズイエーンにある。

五三、ニーチエより

〔葉書、消印はインテルラケン、七八年九月三日〕

前進中だ、上昇中だ、長い試みと熟慮の後にだ。今は一貫した忍耐をもつて九月末まで続けることだけが肝要だ。無論その場合にはツューリヒを、君を諦めねばならない。親友よ、君以上に僕が今、心中を打ち明けたと思う相手がいるだろうか、そんなことが出来る相手がいるだろうか／多くのものが僕の中で徘徊している。外から来るものは殆んど撃退せねばならぬものばかりだ。いやな手紙の数々《ワグナーのニーチエ攻撃の後にワグナー崇拜者たちから来たもの》。パイロイト雑誌の八月号に載ったワグナーの僕に対する意地悪な悲しい論難文は僕も読んだ。僕は痛かったよ、しかしワグナーが狙ったその箇所ではない。——昨日僕は最近の数年間に關する決算をすませて幸福を感じた——僕は五つ六つの本質的な点で自由と独立を獲得したのだ、大きな犠牲を払ってであることは勿論だ。今や健康は前進するに違いない、そうなれば一層多くの喜びもまたやってくる。君と君の御一家に心からの敬意をもって

77

F

インテルラケン、ホテル・ウンテルゼーエン、火曜

五四、ニーチエより

〔葉書、消印はインテルラケン、七八年九月一七日〕

親友よ、ファルケンシュタインの敬愛する女主人《オーヴェルベックの義母、ロートプレッツ夫人》がよしとおっしゃれ

ば、二、三日出掛けることにする。この前の葉書を出してから僕の調子は実に悪かった、それで今の僕は逃亡中の如くであつて自分の頭を何処に横たえたらいのか殆んど分らない。休暇の残りはナウムブルクの母のところまで過ごすということを既に報せてやつた。しかしその前に君たちに会いたいのだ。今日僕はバーゼルへ行く。駄目だという報せがなければ、木曜（昼頃）にツューリヒに着くだろう、つまり去年と同様に。（何という一年がその間に横たわっていることか！戦慄と恐怖！）

誠実をもって君のものなる

F・N

インテルラケン、火曜

五五、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七八年九月一九日

親友よ、君の今日の電報は嬉しくないものだけれども、少なくとも、君がくる前に僕が皆を代表してもう一度心から君に歓迎の意を述べるだけの余裕を与えてくれている。君の昨日の葉書は、その前の良い報せの後だったから驚きであつた、そして、やつて来るのを遅らせるという今日の報せからも悲しいかな僕たちは君の調子が現在悪いのだと推測出来る。やつとでも動ける様になつたら直ぐ来給え、ここであつて君の看護は出来るのだよ。皆が君を招いているよ。

君の
オーヴェルベック

◇ニーチェは二〇日にファルケンシュタイン荘。二四日から一〇月一七日までナウムブルク。

五六、オーヴェルベックより

バーゼル、七八年一〇月一三日

親友よ、この手紙が君の誕生日に、特に、先日旅立った時に見たよりも良い状態の君に着いてくれるといい、そして新しく始まる年が遂に健康を君に返してくれるといい。これを僕たち、僕のフラウと僕とは心から願っている、この様に願うのは残念ながら初めてではないのだがこれを最後として遂に願いが叶えられんことを。僕たちは感謝しながら近頃特に君を思うことがまたもやししばであった。君の推薦に従って僕は最近フラウの誕生日にシュティフターの晩夏を、それ以前に抱いていた別の意図よりも優先させた、そして目下僕たちは読んでいる最中で、本当にたけなわになり芸術的にも実に喜ばしい印象で今も心が一杯になっている。今晚は第二部に入る。

週末には君は、万事がうまく行けばまた僕たちのもとにやってくる。そのことを考慮し、そして君の荷物を不必要に重くしないために僕は、君の実に独特な蔵書の明らかな欠陥の一つを埋めるべく君にあげようと考えたショーペンハウアー訳グラスティアン⁽¹⁾をここに留めてある、僕がツューリヒから持ってきた法相フォン・ミュラーも同様⁽²⁾。

明後日は会食だ、二日より前には誰も講義を始めない、ブルクハルトさえもだ、僕は君の掲示もその様に変更しておいた。——娘が生まれたというローデの通知——一〇月七日付——を受け取ったろうね。

フラウが君と御一家に呉々もよろしくと言っている。新しい財産⁽³⁾を皆さんが本当に喜んでいることと思う、それを段々と皆さんのアスベルン屋敷に作り上げることだろう⁽⁴⁾。

出来るだけ健康で早く帰ってきてくれ給え、その間に転覆するなかれ、瓦壊するなかれ、そして住民各層の調和を危ふからしめるなかれ。そうするために、ビスマルクの最近の演説がまたしても国家の知恵の絶頂とは言えない代物だという見解も役立つのであれば、この見解をも他の数々の真理と共に君の心の奥に納めてくれ給え。

僕たちに良き冬が与えられんことを。再会を期しつつ

君の

O

(1) グラスイアン(一六〇一—一六五八。スペインの思想家)の著「処世術神託提要」(一六七四刊)のショーベンハウアーによる独訳。一八六二年に出版された。

(2) 「ゲーテの法相フリードリヒ・フォン・ミュラーとの対話」(一八七〇)であろう。

(3) ニーチェの母が、従来借りていたナウムブルクの家を買取つたのである。ニーチェはその報せを八月にグリーンデルワルトで受けている。

(4) アスペルン屋敷はエスリング屋敷と共にウィーン付近にあり、ここで一八〇九年にオーストリア軍が初めてナポレオン一世の軍を破つた。堅固なものにすることを意味しているのであろう。

五七、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七八年二月三一日

親友よ、僕たちが今年は、そしてこの休み中には、ツューリヒで君にもう会えないということは今や決つてしまつた様だね。君を自宅にしばらくつけたものが実際に最近の日日の有用性であるのなら嬉しいのだが。ところで僕たちが君のために実に沢山持っている新年の祝いと願いの言葉を直接述べることが出来ない以上は、せめてこの紙片に、僕たち皆、つまりフラウと僕と全ファルケンシュタインを代表してそれをやつて貰おう。僕たちは君のことをしばしば考えた、一般的なことに關しても特殊なことに關してもだ、後者は例えば君が提起した色々な計画についてだ、君が君の孤独の中にいるのであつて僕たちの中にはないと思ふと僕たちは辛くなった。僕たちが金曜に發つ予定は變らない、土曜午後には僕は君を兎に角訪ねる。手紙をローデから受けたが、レナートゥス《リピナーの詩》については非常な不満を述べている。健康、健康、健康、これこそこの僕たち皆が新年に當つて君のために願っているものなのだ、僕も心の底からだ

君の
オーヴェルベック

五八、ニーチェより

〔名刺大の小紙片、バーゼル、一八七九年初め〕

昨晚から絶え間ない猛烈な痛み。どうなることか！——休講。——

◇ ニーチェは七九年一月一八日にナウムブルクへこう書いている、「冬の最悪の週を過ごしました！、月曜悪く、火曜発作、水曜悪く、木曜及び金曜またもや非常に激しくて全く止もうとしない発作、今日は疲れてくたくた。これからはまた良くなる筈だ、と思います。しかし講義を延期せねばならないのは全く腹立たしいことでした」。

五九、ニーチェより

〔葉書、消印はバーゼル、七九年三月一七日〕

親友よ、僕は恐るべき状態だ、どうやって堪えたらいいのかわからない。——
休講。

F・N

六〇、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年三月三日〕

愛する友よ、僕の状態は良くない。僕の住所は、ジュネーヴ、ホテル・ド・ラ・ガール。

一切が陰鬱で冷たい。孤独は堪え難く、胃は悪く、頭は常に痛みで一杯だ。

サヴォイ連山は雪をかぶった墓の样に見えた。

一回入浴した。

良きお二人の元気を祈る。

日曜。

君たちの友

F・N

六一、ニーチェより

僕は既に翼を持ち上げたのだ、帰るために。ところで僕はホテルを替えて、今は湖畔に滞在している、「ホテル・リシュ・モン」だ。

この上なく苦しい発作が一度（多くの嘔吐を伴って）——

常に病氣だ、胃は全くおかしくなっている。

さて、僕は堪えようと思う。

わが友なるお二人の元気を心から祈る

F・N

水曜。

僕あてのシュマイツナーの手紙がきているかも知れないのだが？

六二、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年三月二七日

親友よ、葉書を本当に有難う、暗い感じのものではあっても、とにかく一安心ではあった。僕たちのところの様子

と周囲の動きを君が知っているほどには、目下の君のことが僕たちに分っていないのだからね。ただし今フラウがかかつている鼻風邪だけは君にも正確には分るまい。これは僕が今までに出会った最も凄惨なものの一つだ。しかし今日は、俗論がそれに指定している九日間の生命の没落期に本當に入って行く様だ。——ボマルシェはまだ十五頁訳に残されている。⁽¹⁾僕自身は今或る評論を書き上げたところだ。——目下僕たちは一緒に十九世紀ドイツ史を⁽²⁾読んでいる。入口の十八世紀のところ僕たちは幾度か、こだわった。その部分には、僕たちは今やまさに通曉 *abgefaßt* しているのだからね、少なくとも、牧師補ベックが聖者たちについて知っている程度には。——ブルクハルトが君を最近訪ねて、君がヴェネツィアへ——ウィーデマンが彼にそう言ったのだらう——ではなくルツェルンへ行つたのだと聞いて安心したようだ。君のところに来た郵便物の中にシュマイツナーからの手紙があれば少なくとも報せること位は必ずやる積りだ。

日に何回も僕たちは君のことを話し合う、そればかりでなく各々が独りでいる時も君のことを考えている。僕たちがこんななまで願っている君の健康への心からの願いが少しは実現したという報せを君が早く呉れることが出来るといい。二人して祈っている。

君の

O

この手紙にまだ封をせずにいたら君の第二の葉書がきた。これは残念ながら全然まだ僕たちが願っているものとは言えない。シュマイツナーの手紙を送るよ。

(1) オーヴェルベック夫人はニーチェのすすめでサント・ブーヴの「月曜閑談」を訳していたのであって、「ボマルシェ」はその中の一篇である。シュマイツナー社から出版された時の表題は「十八世紀の人々。サント・ブーヴ著、月曜閑談より」。なお原書九七頁の原注を参照のこと。

(2) トライチケの著書。第一巻。

六三、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年三月三〇日〕

親友よ、二、三回僕は翼をまた動かした、飛び立つために。しかし僕自身が余りにも疲れ過ぎていて、駄目だった。それで良かったのかも知れない。その後僕は住居をもう一度替えた、ホテルの内部でに過ぎないけれど。僕が住んでいるのは非常に高い処（六階）で、美しく、健康的だ、ディデーの以前の住居で湖畔にある。——僕の生活は保養というよりむしろ拷問だ。——レー博士かフックス博士から手紙がきているだろうか？後者は送ってくれ給え。——「盲目であればいい！」この愚かな願いが僕には今や一つの哲学となる。何故なら僕は読むからだ、読んではいけないのだ——考えることだっていけないのだが——それでも僕は考える！

君と奥さんの元気をこちらにも願っているよ。お二人の読書時間には僕も精神において少なからず同席している！

F・N

この孤独者にとっては快癒は存在しない。——フォントネルの死者タチノ対話 dialogues des morts は僕には血縁の如く思われる。

日曜。

（1）スイスの風景画家。

六四、オーヴェルベックより

〔バーゼル、一八七九年三月末か四月初め〕

親友よ、今日受けた君の葉書は、現状下で君が旅立ったことに対して僕が抱き続けてきた懸念を強めるものだ。殆んどどうにもならぬ事情のために僕がそちらへ行行って君の相手をしたり助けになったりすることが残念ながら不可能

なので、僕には実際こうすすめる以外に良い手がない。君の孤独感が持続するならば是非また僕たちのところへ飛び帰って来給え、と。君が今日ここにいないことを考えると僕は勿論ほっとする。何故なら空気が恐しくうつとうしいからだ。けれどジュネーヴが今これより良いとは限らぬかも知れないし、何れにせよこの季節には、別の日も期待出来る。フラウも君が帰ることに賛成だ、僕たちは君が残念ながら丸で良くならずに帰ってくるのが嬉しくないだけだろう。

レーカフックスから手紙がきていないかと僕はもう何度も君のところへ見に行った、今も行ってきたところだ。まだ一つも来ていなかった。明後日までは一つでもくれば直ぐ君に送る積りだ、しかしその後は、君の今度の葉書が述べている君の滞在延長がどう決定するかを待つことにする。最近僕自身の手紙の数時間後に送ったシュマイツナーの手紙は受け取ったろうね？

この手紙を受け取る時に君が、君の葉書に書かれているのと違わない気分であるならば、また戻って来給えよ。これを心から僕たちはすすめると共に願っている。

君の

オーヴェルベック

六五、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年四月七日

親友よ、今日君の住居へ行ってまた手紙のことを尋ねたらハンブルクからのものを渡された、書留だ、その上書きが非常にフックスの筆跡らしく思われたので僕はそれを君に送ろうとした。その時僕の頭に浮んだのは、君がハンブルクとは、別のつながりをも持っていて僕に或る払い込みについて話したことがあったことだ、その後これは僕たち

の話題に上らなかつたけれど。この思いつきは多分当っていると思うのでこの手紙は留めておくことにして、若干安全を期するために僕のロッカーに入れてあるが、さて尋ねたいのは、僕がこれを開封して支払いをすべきかどうか、そして幾らであるかが封入物から分らない場合には幾ら払えばよいか、ということだ。家へ帰ったらツューリヒからの手紙も丁度着き、その中に、君がここへ帰る前にツューリヒに立ち寄る気はないかという質問が含まれている。君が要求した屋根裏部屋はきれいにしてあるとのことだ。君の著が最近シュマイツナーから着いた、そしてツューリヒにはもう配布されている。義母は自分でもその礼を君に述べるとのことだ。——僕は今週はずっと史学雑誌のための、アウグステイヌスとヒエローニムスとの文通に関する論文で多忙だった。二、三日中に終ると思う。その際に僕の穀倉にとって、クリスト教的な友情に関する論文のために役立つ二、三粒の穀物がこぼれてきた。クリスト教が何もかもを洗練しているけれども結局のところ友情は古代と何も変わっていない、このことに僕は今回もまた気付いている。僕たちは何としても友情に関しては異教の立場を取り続けよう。

君の

O

何時になったら一体僕たちは君の休暇の成果についての嬉しい報せを貰えるのだろうか？心から僕たちはそういう報せが次の葉書でもうやってくることを願っている。まだ包み隠されているハンブルクの秘密の内容がなるべく結構なものであればよいという願いをも付け加える。

(1) 「人間的」の補巻「さまざまな意見と箴言」。

六六、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年四月二一日〕

親友よ、僕たちはまたもや一つの願いを共にしている、つまり友情に関する古代のおびただしい思索を総括し復活

させる仕事を誰かがやることだ。百個のさまざまな鐘からの様な響きが響きわたるに違いない。——ツューリヒは氣持よく迎えて下さるから聖靈降臨祭にお邪魔したいと思っていた（僕が生きていれば）。——ハンプブルクの手紙は保管しておいてくれ給え。それは、申し込んでおいた宝くじが入っているのであって、既にバーゼルで支払い済みのものだ。——フックス博士の手紙の消印は「ダンツィヒ」で、レー博士のは「テュッツ」だと思う。——トニカク僕ハ、バーゼルハ見棄テラレルベキモノト思ウ Ceterum censeo Basileam esse derelinqendum。僕はスイスの実にさまざまな地方の出身である凡ゆる階級の人たちの批評を手に入れているのであって、バーゼルが頭痛を起こさせる悪い重苦しい空氣を持つていているという点では意見が一致している。僕はそこでは、僕が例えばここで数日来持つている様な全く自由な頭を数年来持ったことが全然ない。次に、僕は読み書きには二十分までしか堪えられない。ダカラ大学ハ見棄テラレルベキデアル Ergo : Academia derelinqenda est。君はどう思ふかね？心から元氣祈る

僕は出来る限りここに留まる。

君たちの F・N

六七、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年四月二日〕

有難う、親友よ。ああ、哀れなフックス博士よ、三六時間のピアノ授業とは！——ミュンヒエンの「かも知れないもの」《フォン・ザイトリッツ男爵がミュンヒエンからニーチェへ宛てた手紙を指す。次の手紙を参照のこと》だけを送ってくれ給え、思い切つてお願いすることにした。——

昨日君に葉書を出した。——

今日の調子は良くない。悪い天氣だ。——

誠実をもって君のもの

(土曜)

六八、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年四月一八日〕

親友よ、僕のために黒板に掲示することをお願いしてもいいだろうか、講義目録の通りにだけれど末尾にこう付け加えて。「届けは最初の講義終了後。四月二十六日土曜九時に開講、第三講義室」。

僕は今度の月曜に帰る積りだ（午後五時頃だと思う）。このことを一言ベスィガー夫人に言っておいてくれるね。

——天候は土曜以来極めて思わしからず、非常に寒く、雨ばかり。僕は病氣だった、そして二、三日寝て過ごした。

——ミュンヒエンからの手紙はザイトリッツからだった。——ヤーコプ・ブルクハルトが枝の主日⁽¹⁾に一通の手紙をくれたが、これはまさに棕櫚の枝と言ってもよいものだった。——さて僕は直ぐまた君たちのものだ（呪われたパーゼルにおいてでなければいいのだと思う、そこに対しては僕は幽霊に対すると同然の恐怖を持っている!!）

心から君の友

(1) 復活祭前の最後の日曜日。クリストが受難を前にエルサレムに入り信者が棕櫚の枝を敷いて彼を迎えた日。

◆ニーチェは四月二一日にバーゼルへ戻ったが、発作の連続のため講義不可能。五月二日に退職願を出した。

六九、ニーチェより

〔葉書、消印はジュネーヴ、七九年五月三日〕⁽¹⁾

そうだ、親友よ、君の言う通りだ、そして若し僕がパーゼル恐怖症 Basileophobia、つまり僕の悩みの不吉な発生

地たるその町の悪い水、悪い空気、要するに憂鬱な性質全体に対する全くの不安と弱気を持つてさえいなければ、僕は直ぐに行くのだが、そういうわけで僕は矢張り今いる場所で辛抱しなければならぬと思う。僕はバーデン滞在の時の凡ゆる条件を次第に作り出した、僕はこの休暇を健康のために利用するという課題に全思考を投入している。ただし、不可能事を自分に要求するわけには行かない。——今は、実に苦痛だった二日間の病床から離れたばかりだ。

お二人の元気を心から祈る。

(1) この手紙の日付は五月三日となっているけれども、五月二日に退職願を出した後のニーチェは、オーヴェルベックからの報せによつて妹がやつてくるのを待っていた。五月七日にはパウムガルトナー夫人にバーゼルから「土曜に妹がきます」と書いている。妹は十日に到着し、十二日に兄をベルン高地のブレームガルテンへ連れて行き、その後バーゼルへ戻つてオーヴェルベック夫妻の助力を得て兄のバーゼルの住居の片付けを行なつた。以上の様な次第だから、この六九番の手紙の日付は実際は四月三日なのだと思う（消印がはつきりしないために判読を誤つたのであろう）。つまり六四番に対する返事である。ニーチェは七九年三月三〇日と四月五日との家族宛の手紙でもバーデン滞在（前年の同じ時期に妹と共に過ごした）に触れており、特に後者においては「バーデン＝バーデンでと全く同じ様に生活している」と書いている。

七〇、ニーチェより

〔葉書、消印はウィーゼン⁽¹⁾、七九年六月八日〕

親友よ、調子は全くのところ、これ以上ないほどに悪い。しかし、「凡ゆる新しい環境の中で、そこから何が出てくるかを待つこと」というモラルが僕を高みに留めている。場所、家、部屋、ベット、食物、世話、凡てが非常に良くて僕に好適だ。（インメルマン家が昨日申し込みをしてきた。何時この「家族」が進入してくるのかをそつと聞くことが出来るかい？そして他に誰が来そうかをも？）——補整的丸薬 regulating = Pillen についての君の注意は、慎重を極めている僕の水車にとって大助かりだ、今回も「高みの空気」に期待をかけよう。同時に君が安心するために

言っておきたいことは、僕が今ではこれ等の問題においては如何なる医者にも劣らない「くろうと」であつて例えは僕たちの優秀な ⁽²⁾Ma. よりも十倍も用心深いということだ（この人に僕はそれ等について十分詳細に問い合わせたのだ！）—— ——— 胃痛、孤独、散歩、悪天候——これが僕の循環だ。興奮は痕跡すらない。むしろ一種の、無思考無感覚の不快状態だ——

ではお二人共お元気でノ感謝に満ちて君たちを思っている

F・N

(1) ダヴォス付近の保養地。

(2) パーゼルの医学教授ルードルフ・マスイーニを指していると思われる。この教授の診断によつてニーチェは前年三月に予科の授業から決定的に解放されたのだった。

◇ニーチェは妹とブレームガルトンで一〇日位過ごしてからツューリヒのロートブレッツ夫人のところへ約一週間世話になった（同夫人は夏の間もずっとツューリヒからニーチェの旅を援助した）。ウィーゼン到着は五月二二日。

七一、ニーチェより

〔葉書、消印はウィーゼン、七九年六月一三日〕

親友よ、状態はむしろ悪化した。ベットについていることが何と多かつたことか！その他。さて僕は金曜にエンガディーンへ向う積りだ。計画を貫くのだ、喜びもなく期待も薄いけれど。どうか今からトランクを発送してくれ給え、僕より前にそれが到着しているようにするためだ、「上部エンガディーン、チャンフェール局留」だ。

親切なケーゼリッツが自分で描いたリードの絵を二枚送ってくれた、彼は君宛の手紙を参照する様にと指示している、繰返しを避けるために。——クレツツァー博士も絶縁状をよこした《ニーチェの変化に無制限の同意を与えるわけには行かない旨を述べている手紙がクレツツァー博士からきたのである》、予想された様に随分こじつけて。——シュマイツナー

氏が、復活祭大市の決算によれば僕の主著（人間的）がひどい不成功だったということを報せてきた。一〇〇〇部という彼の予想に反して一二〇部しか売れなかった。（彼はそのために破滅するだろう！）——レー氏は非常に弱って危険な健康状態なのに、彼が書こうとしている良心の歴史の構想を送ってきた。

君たちは僕の妹を実に積極的にそして親切に手伝ってくれたのだね。君たちのところで、そして君たちによって初めて自分の元氣と快活とが甦ってくるということを彼女は毎回書いてよこした。

心からの愛着と感謝をもって

F・N

どうぞ、どうぞ、僕の手から楽譜架を取ってくれ給え、それが君たちの氣に入らないということがなければ僕は実に嬉しい。

（1） ヴエネツィア南方の島。

七二、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年六月一七日

親友よ、ケーゼリッツが自身の手紙を引き合いに出しているのだから、その手紙そのものを君に送ることにする、同時にハンブルクからの一通の手紙もだ、これを送ることは今回はまだ変ではないと思うが、こんなものを今後も送ることは必要かも知れないね。だから若し君がなおも、このハンブルク書類が僕のところへ来た時に送って貰いたいかどうかを報せてくれ給え。——土曜に僕は手紙を出した、君はそれを昨日受け取ったと思う。日曜の君の葉書は僕たちを心から悲しませた。——楽譜架に関しては僕たちの小さな意志を通させてくれ給え、君たちがブレイムガルトンにいた間に既に僕たちはこの道具の検分のためにベスイガー夫人を訪ねたのだ、寸法は丁度僕たちが使えるもの

であつて今年中には何れにせよ買おうと思つていた通りのものだった。妹さんが戻つてきた時に直ぐ僕たちはそれが自分たちのものであるかの如くにそれを取りに人をやり、彼女とは話をつけた。この小さな品物は、僕が君のためにつけている小さな会計簿の中の君の貸しの欄にとくに記入されている。これを先ず消さねばなるまい。何しろ君を思い出させてくれるものには無上の価値があるのだ、そしてこの品物には兎に角君への思い出がこびり付いているのだ。だからこの件については話が決まつたものとしようや。シュマイツナーの報せは全く憂鬱だ、彼がその出来事を克服することが望まれる、彼が君を余り攻撃することは許されることではない。僕は、君の書が五冊か六冊位の小冊子として順次に出版されたとしたら現在既に違つた運命を持つていたろうと確信している。僕たちの読者はそもそもそんなものなのであり彼等のかわいい小犬どもに對してだつて同じことなのだから、一〇マルクのこの書は差し当り困難な立場にあつたのだ。今の時代の水車場に課するにはこれは少々多量過ぎたのであるが、水車場はこれをもこなすだろう、何故なら売れた分は、この書を結局水車場へ到らしめるのに丁度十分であるからだ。

君の退職に関する今日のバーゼルの諸新聞の記事を同封する、他ならぬ僕が書いているから。前回の手紙で僕は、カルル・ブルクハルトが君の回復を心から願つてゐる旨を伝えて欲しいと言つていたのを君に伝えるのを忘れた。君のトランクを今日チャンフェールへ発送する。その鍵は同時に郵便小包で局留で君に送る。

最近の僕の幾つかの質問に對する答と共に君についての報せが直ぐまた来るものと期待している。好調の報せならいいがと心から願つてゐる。 君の

O そしてフラウからも

呉々もよろしくとのこと

七三、オーヴェルベックより

パーゼル、七九年六月一九日

親友よ、今、辞令等の書類を僕が受け取った、その写しを同封する。僕は封筒の中味を知っていたし原物は現在旅行中の君にとって邪魔だろうから、失敬して開封した。同封の写しなら君は気楽に君の家族へ送ることも出来る、書類そのものは、君が良ければ僕が君のために保管することにして木製小箱にしまっておく、もう何回も君に報せようと思ひながら忘れていたことなのだが、この小箱は、或る日君の妹さんが一つの鍵でそれが開くかどうかを試した時に、全然鍵がかかっていないことが分ったのだ。

ところで君の年金には、さらに大学協会の負担金も加わる、これのことも間もなく君に報せることが出来ると思う。一昨日、まだウィーゼンへ宛てて、僕自身の手紙の他にハンブルクからの一通と市内郵便一通を送った。トラシクと鍵はチャンフェールへ発送済みだ。遂に君の回復が始まらんことを、心から元気を祈る

君の

O

七四、ニーチエより

「二八七九年」住所、グラウビュンデンの

サン・モリッツ、局留。

若干の言葉だけだ、親友よ！考えの足りないところは君が補ってくれるだろう。多くの良いものが君からやってくるし、やってきた。僕を免れさせてくれたり補充してくれたたりしたやり方は全くの喜びだった。何もかも受け取った。金についての諸提案は実行してくれ給え、サン・モリッツ局留で。(一〇〇〇フランは君の名前で職工銀行に預けて貰えるだろうか？お願いだ。)——勘定書は支払いを済ませた、全く小さいもの二つを除いて(メンメルと黄金葉局だ——君が払っておいてくれるかい？)。ハンブルクとは(三五度目の失敗の後に)一切の関係を断ち切った。——

この前に葉書を書いて以来、ベットに横たわっている時が大部分だった。これは注釈の一つであって本文の方は省略させて貰う。

ところで僕はエンガディーンに捉えられてしまって、僕の本来のすみかにいる様だ、全く不思議だ、僕はこの自然とは親類だ。

今こそ僕は軽快さを感じる。ああ、何と待ち焦がれたことか、僕の居場所を誰にも隠してくれ給え、特に婦人全部に、君の奥さんは例外だが。(この件では君の奥さんはまさに百の中のひとつという「例外」なのだよ。)

ローデは手紙をくれなかった。どんな疑惑が彼を悩ませているのやら？彼にとつてまだ「疑惑」があるのだろうか？

リード研究者ケーゼリッツ 《九四頁参照。ガストはヴェネツィアの木蔭と気候の状態をオーヴェルベックに報告したのだった。》
のものを同封する。⁽²⁾

ではお元気で、親しい親しい友よ

F・N

月曜。ツューリヒから君はさらに若干のことを報されるだろう。実に多くの良いことが君に関係している。

(1) パーゼルの文房具屋兼製本屋。

(2) ニーチェが同封したのは、オーヴェルベックから送られたガスト書簡ではなく、七一番の手紙に載っているガストの絵であつたと思われる。

七五、オーヴェルベックより

親友よ、遂にきたこの便り、僕たちはこれが最も望ましいものであると、つまり完全に良いものの始まりであると

パーゼル、七九年六月二十五日

期待することが出来るし、早速そう期待したいと思う。君の居場所を洩らしはしない。君の指示に従って今日君のためにサン・モリッツ局留で払い込んだ、ただし一〇〇〇フランだけ（それぞれ五〇〇フランの郵便為替二つ）。僕は最近君の会計について君を迷わせたね、何故なら僕の記憶では僕は君の今度の給料を二五〇〇フランと見積ったのだから。ところが君には分っている様に二二五〇フランだけだった、そしてそれを僕は先週君のために貰ったのだ。だからまだ僕の手許にある君のものは

餘額の残り 1250フラン

家具の売上げ 315

1565フラン

このうち今までに雑費に一四フランかかっているから、一五五一フランだ。その中から一〇〇〇フランを明日、君の希望通り僕の名前で職工銀行に預ける、その残りは君が自由に使える様に僕が家に保管する。メンメルと薬局には払う。最近新聞広告を出した君の家具の残りは今までのところ引き取り手がない。しかし食物戸棚は消える見込がある。書架は多分ゲルラッハ夫人のところへ行く。

最近ゲルスドルフから君についての短かい問い合わせを受けた、彼は君の辞職について何かを聞き込んだのだ。僕は今日受けた君の報せをのみ待っていたのだ、彼に返事するために。序でながら彼は「今や彼女の家庭を破壊する者どもの手に委ねられてしまったあの不幸な少女」について若干のことを述べているが、この受動形についてはこれ以上何も説明していない。

僕のフラウは、君が今日報せてきた回復を非常に喜んだ。君が山の中にいて彼女から安全であると知っているものだから彼女を「婦人全部」の中の例外にしてくれたことだと彼女は言っている。——呉々もよろしくとのことだ。——リード作品は、もっと写影法的であればいいのだと思う。この肝腎の点において彼の作品は殆んど安心を

与えてくれない。——僕たち、忘恩者どもは今まで君に、バーゼル及びその近傍の実に有難い地図のお礼を言うのをいつも忘れていた。

心から元氣祈る

君の

○

七六、ニーチェより

〔葉書、消印はツェレリーナ、七九年七月二一日〕

親友夫妻よ、僕はここでも、いつもと同じ様に病氣だ、そしてもう合計八日間ベットの中だった。これは愚痴というものだ、いやになるのは僕だけでなくて君たちもだ！それでも——サン・モリッツはいい処だ、ここは僕の気分と感覺器官（眼／＼）に非常に合っており、病人に向いている。空氣はソレントのよりももっと良い位であり、また僕の好きな香りに満ちている。僕の一日の分け方、生活と食事とのやり方は、古代の賢者がこれを採用しても恥ずるに及ばぬだろう、凡てが非常に簡素であり、しかも実に繊細な五〇の顧慮から成る一体系なのだ。僕は今回は非常に上演に満足している、しかし脚本が全く話にならない——つまり僕自身が。パハニック氏へ帶封で送ったのが行方不明になった。——金を本当に有難う、僕は幸いにも旅券を持ち合わせていた。——秋に君がサン・モリッツへの小旅行を何とか考えてくれると嬉しいのだが、奥さんと一緒に。つまり僕は、最近断固として言明された奥さんのサン・モリッツ嫌悪が難攻不落であるとは思えないのだ。余り多く約束し過ぎることはしないでおく、既に言った様に僕のこの土地に対する好みは余りにも個人的だから。しかしここは一度試してみる価値があると思うよ。——本当に心から元氣を祈りつつ！そして感謝しつつ！

（1）サン・モリッツ東北方の村落。保養地。

七七、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年七月一九日

親友よ、君にまた便りを出すために僕がもう何日も待っていた報せが事実だった今、僕に伝えられた、それで直ぐ君に報せることにする。つまり大学協会の決定のことだ。教育庁の書記官ツェーントナーが僕に通知してくれたのであって、今後六年間毎年一〇〇〇フランを君の年金に加えるとの決定だから、年金は今や三〇〇〇フランになる。⁽¹⁾君の一〇〇〇フランがここの職工銀行にあって三パーセントの利子がつくことも忘れるなかれ、さらに約一〇〇フランが僕のところにある。メンメル（ハフラン九五）と薬局（三フラン）の勘定は払った。僕のところにある金は、君にいつでも送れる様にツューリヒへ持つて行く。また、君が君の毛布とか本とかを近日中に必要とすると思うなら二週間以内に僕たちに報せてくれる様お願いする。つまりその間は僕たちはまだここにいるのだ。——パハニッケへの帯封送付物は、僕の記憶では、僕が出したのだ。僕が今週の初めに君のために投函した彼の手紙——三通一緒の手紙——が同じ様なことになっていなければ良いが。——見当がつくと思うが、サン・モリッツに対する君の喜びは僕たちにとって最大の喜びだ、そしてそこが長いうちには君に効果を示すに違いないと思う、否、さして長くないうちに君から、その土地が君に報いてくれたという報せを貰えるものと期待している。その土地に関しては、非常な誤解が今度の君の葉書の中にあつたよ。僕たちがこの休みに二人で君を訪ねないとしても、それはサン・モリッツ「嫌悪」とは何の關係もない。それどころか僕のフラウはその土地の印象によって期待を裏切られたことがなかったのだ、そして僕は目下のところ全くまだ彼女の印象、そして今や君の印象以外のものを持っていないのだ。君がいなくて、僕たちにとってこの休みには、若し可能だとすれば、サン・モリッツ訪問ほど心を惹くものは先ずなからう。ところがまさにうまくないのだ、情ないふところ工合のためだ、こいつが色々の理由からこの夏は特に悪い状態で、そのため僕たちは今年は、悲しいかな必ずしも金製ではない短かい鎖で大方は土地にしばらくつけられて暮らす。

しかし若し出来れば、僕の方だけでもせめて一日か二日君のところへ行く。僕は君にまた会いたくてたまらないのだ。——天候はどうかね？これこそが君にとって不利でなくて、気象学者の君を無傷に保っているのかも知れないね。先週の射撃大会は衰れにも完全に雨で台無しだった。君が君の住居にいたとしたら、続けざまの銃声に堪えられなかったろう。あそこでは僕たちのところよりもっとはつきり聞こえたのだ。——君の妹さんのことは僕たちには数週前から何も分らなくなっている。フラウから呉々もよろしくとのこと。マダムワゼル・ド・レスピナスとマダム・ラトゥル・フランクヴィルとが終った《何れもサント・ブーヴのエッセイであって、オーヴェルベック夫人の翻訳が一八八〇年にシュマイツナー社から匿名で出版された。一二三頁の「サント・ブーヴ翻訳者」及び一三三頁参照》。次はヴォヴナルグだ。

君の ○

親友よ、君に今日の手紙を書かねばならなかったそもその動機が、つい忘れられてしまつて、この追申と相成つた。つまり、僕は三日前に——不可解なほど遅く——ツューリヒの代理店から報せを受けたのであつて、君の保険申し込みは受理されなかったのだ、ゴータ保険は他の動産と一緒にでない図書の保証を行なわないという理由なのだ——これは僕の経験とは矛盾する——、その上ツューリヒ当局は君が未知の人でありそこに居住登録されていないからこの保険を承認しないだろうということだ。僕は自分でもう一度この代理店に問い合わせる、しかしそれと共に君にもだ、これからどうしようかね。

君の ○

(1) ニーチェの任官当時の年俸は三〇〇〇フラン、最終の年俸は四五〇〇フランであつた。

七八、ニーチェより

〔一八七九年七月末〕

親友よ、再会の楽しい期待を与えてくれたことをもつと早く君に感謝したかったのだ、しかるに発作と就床の一日が入り込んできたのだ。夏は本来的には終った、エンガディーンの人たちの記憶にある限りでの最悪のものだった、雨と雪とで台無しだった。雪はまだ低く谷間へ垂れ下っている。それにも拘らず、これは僕が行なった最良の山地滞在だ。良い晩夏がくるかも知れない。

大学生バハニッケへの本は何と着いていたのだ、しかるに「息子ヘルマン」《バハニッケ博士は「人間的余りに人間的なもの」を読んだ後にニーチェに、自分の父になってくれないかと書いたのだ》は婚約をして、そのために、当然のことながら、若干の事柄を忘れたのだ。婚約者の両親が彼に大学生活を続けさせてくれる。

大学協会は僕に実に嬉しい驚きを与えてくれた。こんなに良い取り扱いを受けたりして、丸で僕がそれに値しているかの如くだ。しかしこの点では僕は永遠に最も懷疑的ナル者 *ὁ ἀσέβητος* だ。

サント・ブーヴの独訳がどんどん進捗していると聞いて嬉しい。奥さんの上部エンガディーン嫌悪が何でもないと聞いた時は心の重荷がおりたよ、何しろ僕は、自分が非常に愛しているもの（前述の上部エンガディーンの様子）に關しては経験から非常に疑い深くなっていて、その様な場合には自分が大いに間違っているのではなからうかと自問するほどのことから。——今や僕は君に約束する、ここが君の氣に入るに決っていると。

どうか数百フランを（なるべく金貨で）持つてきてくれ給え。職工銀行の金は将来の突発事のための予備金として残しておきたいと思う、だから六ヶ月定期で預けておいてよいのではなからうか。そうすれば高い利子がつく。とに角このことは君にお任せする、僕には全く分らないから。——

地上に確固たるものを何か持つために、僕は（ごく僅かな金で）ナウムブルク市から六年期限で、いわゆるツヴィンガーを賃借りした。僕の母の家の向いの古い市壁の一部だ。そこで僕は毎春（五月から六月半ばまで）野菜栽培をするだろう。一つの塔がその中であって、一つの部屋を持っている、これを母が僕の住居兼寢所として整えてくれ

る。僕がこのことを言いだしたのであって、運よくうまく行ったのだ。この話は広めてはいけないよ。

奇妙な本のお願ひ。僕に（図書館かホイスラーから借りて）イエーリングの最近の著「法における目的」を送って
くれることが出来るだろうか？

では元気なれ、わが親しい親しい友よ。

F・N

木曜。

（一） ナウムブルクの母の家の近くに巾広い古い市壁があつて、その上に、「ツヴィンガー」と名付けられていた幾つかの内庭があつた。母と妹への書簡集（一九〇九）四一〇頁に付された妹による脚注参照。

七九、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年八月二日

今日は一言だけだ、親友よ、この秋の君の旅程を報せてくれる様お願いするためだ、上部エンガディーン訪問は、君が既に知っている理由、少なくとも那邊にあるかは大体見当がついている理由のために、僕にとって実行が非常に難しい、それで僕は、決心する前に、君がこの秋のうちにもっと僕たちの近くへ移動しないものかどうかを知りたいと思うのだ。君が待ち焦れていた晩夏が実際にやってくるらしい、こちらの数日來の暑さは熱帶的だ、この天候では山行きを諦めるのも容易ではなくなる。しかし、若しもっと近くの下界で君と再会出来るのならば、諦めるべきところなのだ。——君のお望みのイエーリングの小冊子は今は君に供給出来ない。ホイスラーは君の手紙が着いた前日に旅行に出てしまった、図書館は手紙が着いたその日に今月二十五日まで閉館された。その代りに君に、プラトンの對話の順序に関するタイヒミュラーのさして長くない労作を提供しよう、これは僕が最近貰ったものだ。彼はテアイテトスの或る箇所立脚して、對話の形式——會話が物語であるか或いは全くドラマ的な叙述であるか——を、年代の

識別原理にしようとしている。全体がまことにもっともであり、気の利いた印象の故に本当に気持よく読める。

君の一〇〇〇フランは差し当りまだ三パーセントで職工銀行に置き、いずれ別の預け方を君自身と相談する。

前世紀の有名なパリの女優ソフィ・アルヌーについて僕が最近読んだ若干の逸話を記そう、この女性については「アルノルディアーナ」の表題で彼女の死後に同様の話を一杯載せた一冊のちゃんとした本が出版されたのだそうだ。君はロレン及び彼の著した世界史のことを知っているだろうね、この著は前世紀にフランスで人気があった本だ。ところで、既に暫く前からオペラを去っていた或る女優がロレンという名前の総借家人と一緒に暮らしていた。或る会合で誰かがソフィ・アルヌーにあの婦人は誰なのかと尋ねた。アルヌーはこう答えた、「えっ、彼女を知らないなんて。あれはロレンの『古い歴史』よ」。——或る皮膚病、癩病の様なものにかかっていた批評家ラアルプについて彼女は或る時こう言った、彼が古代人から受け継いだものはあれだけだ、と。

水曜にバウムガルトナー夫人が来訪した、君に呉々もよろしくとのことだった。アードルフは今度の冬学期はまだチュービンゲンに留まる。僕たちは心から君の元気を祈っている。また君のナウムブルクのプランを素敵だと思っている。君の妹さんからちょっと報されたベルリンのプランの方は、君が本当には快方に向っていないとすれば、僕たちは心配だ。さして遠からぬうちに再会出来ることを期待しつつ

君の

O

返事はツューリヒへお願いする、僕たちは水曜にそこへ移る。ツューリヒからは断然君の保険証書があると都合がいいと言ってきている。しかし君は持ち合わせていないだろうね。若し持っていたら送ってくれ給え。

八〇、ニーチェより

〔葉書、消印はサン・モリッツ・ドルフ、七九年八月一二日〕

親友よ、僕の状態はその後悪化した。この良い、最良の気候がなければどうなっていることか見当もつかない！時々僕は思う、今度の冬が最後の冬だと、そしてそれからナウムブルクの色々なプランを作る、またベルリンをも考えた、レー博士のためだ、僕は彼ともう一度会いたいのだ（彼も一層悪くなっている、療養のあとでだ、彼は苦勞しながらゆっくりとまた郷里へ運び帰された）。だから僕が秋にツューリヒを経由することはあり得るだろう。しかし少々見込が出てくれば南方へ行く。僕はとくに自分に言い聞かせていた、君の来訪を考えることは許されないと。恐しく物価高で全く混んでいるこの高地の谷間へやってくるための法外な費用と駅通馬車旅行の難儀をつくづくと考えたのだ。無論、断念の夢魘——僕が自分に押しつけねばならない本当に色々な面での断念の——が全く恐しく僕にのしかかることが折々ある、そうなると僕は君に来て貰いたいと思うのだ。元氣をつけてくれる一言を、手紙での一言を、本当に頼むよ、時々ね！僕はそれなしではいられないのだ。——（イエーリング書は小冊子なんかではなくて立派な部厚い一冊の書物だ）。周りの親しい誠実な親切な人たちが皆に心からよろしく

君の友

F・N

ああ、この眼！僕が読み始めた最初の本はフランス書だ（ローマのモラリスト達、フロートー著）。失敬、マルタ著だ。

八一、オーヴェルベックより

〔葉書、消印はツューリヒ、七九年八月一七日〕

親友よ！電報での君の報せに対して直ちに僕の到着によって答えることが出来なかったのは残念だ。今や僕は明日、月曜に出発してユーリエル峠を越えて火曜にサン・モリッツに着く。

今は心から挨拶のみ

君の

O

◇オーヴェルベックは二〇日から二三日までサン・モリッツに留まった。

八二、ニーチェより

〔葉書、消印はサン・モリッツ・ドルフ、七九年八月二七日〕

親しい親しい友よ、君が来てくれたことは、今に到るまで僕に快い後味を残してくれている。しかし僕の状態は、くる日もくる日も、君が体験したのと全く同様だ！それでも僕は二、三回、君を思い出しながら農場で食事をすることが出来た。療養に堪えるべく元気を奮い起こしている。君が知る如く、僕は飛び去りたいのだ、しかし飛ぶこと（旅行）は僕には恐しい、そして何処にとまればいいのやら／相も変らず、途方に暮れるのみだ！——君の論文には、君の凡ゆる美德を備えた五本の指先が見て取れる（オブリエ風の比喻）——この二人の文通者はまさに狡猾な犬どもだ。しかし当時のお偉方は手紙を書く時は全世界を前にして書いたのだ、誠実さでさえもその際には外出服を身につけていたのだ。——君が歴史家の仲間入りをしているのを見るのは楽しい、今やもう君はカトリック雑誌を必要としないかも知れないね。

君と奥さんに心からの愛着をもって

F・N

（1）アウグスティヌスとヒエロニムス。原書八五頁参照。

八三、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七九年八月二七日

親友よ、先日君から別れてきた時の事情が僕には気になって、今また君からの報告が欲しくなっている。別れの日是不調の日だったね、僕は残念ながらそのことを確信しながら去った。僕自身は、君のことを考え続けながら済まな
いと思った位に、調子が良かった。素晴らしい旅行が、好天に恵まれながら、クルルの直ぐ手前で激しい雷雨が襲つて
くるまで続いた。何よりも僕を苦しめたのは、今度の冬のこと、そしてそれについての君の決定を阻んでいる幾多の
影を僕が追ひ散らし得なかったことだ。僕は再三再四強く、君自身にまた持続的孤独を課する様なプランに身を任せ
てはいけないという忠告を繰返し得るのみだ。ケーゼリッツには手紙を出した、同じくロームントにも、そしてま
た、暑さにすっかり参っている葉書を一昨日よこしたローデにも。暑さのため彼は尚早にフィレンツェから逃げる。
返事をマルセイユへくれる様にと書いてあった。ジュネーヴから余り遠からぬ場所ですと君と会うことの可能性を彼は考
えていた、彼はジュネーヴ付近へ引き返してくるのだ。全く不可避なものを除いて如何なる旅行も君としては全面的
に不可能だということを僕は今回報せておいた。

昨日トライチケがここに来た。彼は非常に思いやりをこめて君のことを色々と尋ねた。彼がG・F「1」につい
て話してくれたこととては、この男は六二歳だというのに自分の料理女と結婚したのだ、子供は三人いて、一番上
のは、氣狂いになった奥さんの死によって解消した最初の結婚の最後の時期に生まれたのだ。トライチケは、このこ
とは国民的不幸だと言った。僕はこう言つてやつた、そんなことが国民的不幸だということは少なくとも国民的不幸
だ、と。ブッシュ編のビスマルク食卓談話集についてトライチケは、同書が——僕はこのことを決して疑わなかった
のだが——ビスマルクの全霊傾注の出版物だと保証した。ビスマルクはその校正刷を一枚一枚検閲した、そして特に
選び抜いた時期に出版したのだ。彼が己れの事業を理解している度合は、疑いなく、公衆が彼を理解している度合以
上だ。

良い報せを貰えるなんて僕が期待することは全く許されないね。それでも直ぐに、どんな工合かを一言報せてくれ給え。それを僕と共にファルケンシュタインの皆も待っている。妹さんが今日、君と一緒に秋にリーヴァ⁽²⁾で過ごす可能性のことを報せてくれた。僕たちが先日その場所を語り合った時には僕は彼女も一緒である場合を考えなかった。しかしその場合でも僕は、特に木蔭の点で、メラ⁽³⁾ンの方がいいと思う。元気を失わないでくれ給え、この冬が君に健康を返してくれたらどんなに素晴らしいことか！いつもそれを願いつつ

君の

O

(1) グスタフ・フライターク(一八一六——一八九五)であろう。フライタークとトライチケ及びオーヴェルベックとの関係はベルヌリ書第一巻を参照のこと。

(2) 北イタリア、ガルダ湖北岸の町。

(3) リーヴァよりずっと北の、オーストリアに近い町。

八四、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七九年九月二日

親友よ、先日は君の葉書と僕の手紙とが行き違ったね。待ち遠しく思っていた報せをくれて本当に有難う。今日はケーゼリッツの返事が来たことをお伝えする。僕は彼に、彼の時間がどうなっているか、そして彼が内心の闘争なしに君のために毎日約二、三時間を、特に朗読にも捧げ得るかどうかを正直に言ってくれる様に頼んであったのだ。それに対して僕が受けた返事は感動的なものであって、この良き若者は、彼が「移住のことを論ずる全く即物的な論じ方」を誤解されはしないかと本気に心配している。彼自身に如何なる移転をも目下禁じているものは、実際、金に困っていることだけだ。自分の時間を惜むことを彼は勿論必要と考えているが、二、三時間なら喜んで容易に暇を作るし、却って気晴らしになるだろうとのことだ。しかしこんな言い方は冷た過ぎる、と彼は述べており、君にヴェネ

ツィア行きをすすめることを僕に強く乞うている。蚊は九月半ばには消える、少なくとも減るとのこと——彼の言葉通りに書いているのだ。一〇月と十一月はヴェネツィアはまだ非常に快適だから、君が来るのが遅過ぎない方がいいとのこと。部屋の暖房の点は、彼の「専門知識」が及ぶ限り、或るうまい修正を加えた設備を取り付ける責任を引き受けると言っている。実際僕はこの冬の君にとってヴェネツィア以上のものはないと思う。そこで過ごすうちには、若し凡てがうまく行けば、十分に準備されたナウムブルクの春が爽やかにやってくるのだ、しかも君は、君にこの上なく誠実であるばかりか彼の手紙がまたしても証している様に優れた人間でもある一人物の保護下にあるのだ。君が彼のところへ行けば彼は喜ぶのだ。勿論このことは、気候的に君にとって疑いもなくヴェネツィアよりも良い場所の何れもが孤独というこの上なしの欠点を持っているというのでないと思えば、引きさがらざるを得ないであろうがね。離れている友人である僕たちにとっても、君が冬に北へではなく南へ行くのだと考えることは断然楽しいことだ。北へ行くとすればそのことは僕にとっては、君の状態についての君の気分を示す痛ましい徴候であるだろう。ケーゼリッツを考慮に入れば、君のヴェネツィア移住の障害になるものは実際何一つ無いのだ。

金曜に僕たちは君の妹さんの訪問を受ける、その場合に僕たちはこの訪問自体が嬉しいばかりでなく彼女が君のところへの途上にあるということも嬉しい。今や僕たちは、さして遠からぬうちに、君が独りぼっちなのだと思います。済む様になる。——僕は、君が君の療養から感ずる効果に対して本当に緊張を感じている。鉱水を飲むのと入浴するのとが一緒では、サン・モリッツは非常に強い作用を及ぼすということだ。余り多過ぎぬ方が良いと思う。

無責任にも僕は最近君にフラウと義妹たちとの感謝に満ちた喜びを伝えるのを忘れていた、僕が彼女たちに分配することになった贈り物に対してのだ。彼女たちが皆んな心から君によりしくと言っている。彼女たちと共に誠実をも

って

君の

○

八五、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七九年九月九日

親友よ、今朝タミンス向けの君の手紙が僕たちに与えた喜びをせめて一言君に述べずには、君宛の同封の手紙を送る気になれない。君の妹さんを通じて受けていた最近の報せが僕たちを完全に打ちのめしていた後に、君は僕たちをまた元気づけることに成功したのだ。自分の健康を再び戦い取る可能性をどうか信じてくれ給え、僕たちはそれを信じたいと思う、君と一緒にだ！だから、この冬に対する君の決定についての君の手紙の暗示も僕たちには心からの喜びだ！その遂行の前提である力も既に生じているのであって欲しい、これがファルケンシュタインの一同の日日のパンに際しての願いであり、僕も毎日それに加わっている。

君の
O

僕のこの前の手紙の直ぐ後に、ズィグマリンゲン⁽²⁾の消印のあるもう一通の君宛の手紙を送った、その筆跡はまたもやフックスのものの様だった。今日の君のところの天気が僕たちのところより良かれと思う。ここは最初の長雨が数週間前から続いている。

(1) 編者が「タミンスからの」と訂正しているけれどもそれは間違ひであつて、原典の「タミンス向けの」が正しい。ニーチェはまだサン・モリッツにゐる。九月一日に妹宛にサン・モリッツから「九月二〇日にナウムブルクへ旅立ちたいと思う」と書き、九月一日に「私は水曜(明後日)クルルへ発ち、午後四時頃着く」と書いている。そしてグロイター版ニーチェ全集IV 4、八〇頁によれば結局ニーチェが妹とクルルで会つたのは九月一七日である。従つてニーチェがタミンス(クルル付近の町。妹がニーチェ伝第二巻第一部三三四頁で触れているグラウビュンデンの仲好しの婦人の住所であり妹は当時そこにいた)から九月上旬に手紙を出した筈がない。且つオーヴェルベックがその様な手紙を受け取つたのならば、この書簡集に載せられていなければならない。

それでは、「タミンス向けの君の手紙」というのは何であつたらうか。それは妹宛の手紙だった筈である。八四番の手紙を受けて、妹が金曜(九月五日)にオーヴェルベックを訪ねることを知つたニーチェは、妹への手紙を書いてそれをツューリヒのオーヴェルベ

ツク宛に出し、妹がタミンスへ出発した後ならば転送してくれる様にと依頼したのであつた可能性がある。或いは、タミンス到着後の妹がオーヴェルベック宛に、兄から病状良好の手紙を受けた旨を知らせたのであつたかも知れない。「母と妹へのニーチェ書簡集」(一九〇九年版)を参照すれば、後者の可能性の方が大きいと思われる(ニーチェが妹宛に好調なりとの手紙を送つた形跡が全くないのである)。タミンス向けの手紙なるものは、妹がオーヴェルベックに対して、サン・モリッツ訪問取り止めの理由として作り出した架空のものであつたと考えられるのであり、兄の看護にはとづくにうんざりしていた妹がサン・モリッツ訪問をもともと本気に考えた筈はないのである。

もう少し当時の事情を詳しく述べるならば、妹はバーゼルのニーチェの住居を片付けてからもナウムブルクへは帰らずにスイス西部地方に滞在していたのであつて、七月六日の妹宛ニーチェ書簡には、サン・オーベン(ヌーシヤテル湖北岸の町)の名が見られる。妹がタミンスに出掛けることは可成り早くに決まつていた様である(七月二四日の妹宛ニーチェ書簡参照)。八月一日にニーチェは、妹が持ち出したらしいトゥーズイス(タミンスの南方の町)での会見を旅行不可能の故に拒絶し、何れ冬のために北へ行くとすればタミンスかクールに立ち寄るといふ意向の手紙を書いている。とも角も妹はニーチェの窮状を、次々とやつてくる便りによつて熟知しながらも、サン・モリッツを訪れようとはしなかつた。そして八月二日から九月一日までの自分宛のニーチェの悲惨な手紙を「母と妹へのニーチェ書簡集」の一九二六年版では凡て削除した。九月上旬もニーチェが不調であつたことは九月一〇日の妹宛書簡により明らかである。ニーチェが帰郷したこの冬の間も妹はスイスに留まり続けた。彼女はニーチェにこう書いた、「お分りでしょう、どうしても已むを得ないというのでなければ、私はこの冬はナウムブルクへ帰る気持がなかつたのよ。いい年をして結婚してない娘を見ているのはお母さんにとつて気分の良いことではないし、その上、正直言つて、一人増えれば苦勞も増えるし、そして一番まずいのは、一人の病人に看護婦二人は多過ぎることだわ」(グロイター版Ⅳ4、八一頁)。

(2) ボーデン湖北方、ドーナウ河畔の町。

八六、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、七九年九月二日〕

親友よ、ナウムブルクからの最初の便りだ。ここが今度の冬の宿場だ。若し君がヴェネツィアとナウムブルクとの間のものもろの根拠の差引勘定を僕と同じ様にやつてみるならば、君の判断は僕と同じになるに違いない。しかし間

題になる一切を伝えることは到底不可能だ。要するに、僕の冬の療養プログラムの主要思想——僕の絶え間ない内面の仕事を出来るだけ休むこと、自分自身からの休養、これを僕は数年来持たなかった——がヴェネツィアでは実行不可能と思われたのだ。——氣候的諸条件はこの方が勿論、あの入江のシロッコの都市よりも良いのであって、エンガディンからあそこへ降りて行くことは最悪の危険な実験であつたろう。——前述の様に、君の理性（それを僕は「僕の第二の、上等な理性」としばしば呼んでいる——失敬！）も僕の決心をよしとするであらうことを僕は疑わない。僕が心から君に感謝している君のケーゼリッツとの文通が決着をつけてくれたのだ。

皆さんに心からよろしく。

八七、オーヴェルベックより

ツューリヒ、七九年九月二十九日

親友よ、ここの家族皆を代表して、もう一度ツューリヒから短かい挨拶を送ると同時に、同封の手紙をも送る。僕たちのこの前の話し合いの後だから、君がナウムブルクに決めたことは僕を必ずしも驚かせはしなかった。僕がこれだけは嬉しいのは、君をそこへ追いやったものが単なる意気沮喪ではなかったことだ、この点については、後に君の妹さんとそして君とから受けた報告が僕を安心させてくれた。旅が君にそれほど辛くなかったことは何と言っても山の空気による君の神経の強化の徴候だ。それが君を助けて冬を凌がせてくれるといい。さらに、君がナウムブルクにいと分っていることは僕たちにとって小さからぬ安心だ、そして君のお母さんのためにも嬉しく思う、どうか呉々もよろしく。ケーゼリッツが君の決定を報されているのかどうかを一言報せてくれ給え。——サン・モリッツで君に話すのを忘れたのだが、アーヘンのドイセンの生徒でその両親にとっては唯一人の息子が決闘で射殺されたのだ。僕は最近僕の伯母が、ドイセンがこれからどうするかを僕が知らないだろうかと問い合わせてきたので、またそのこと

を思い出したのだ。僕は、彼が矢張りアーヘンにしばらくつけられていると思う。君は近頃何も耳にしていないだろうね？——木曜に僕たちは遂にバーゼルへ戻る。先週の半ば以来天候はひどい、晩秋がきたらしい。君は丁度良い時に退却を成し遂げたのだ。

フラウとその家族が呉々もよろしくと言っている。君のための心からの願いで一杯になりながら皆んな冬に入って行く、その先頭には

君の

オーヴェルベック

八八、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、七九年九月二九日〕

親友よ、ナウムブルクの一週が過ぎた。サン・モリッツの最後の数週間のひどかった状態に比べると非常に恵まれている。療養が効き始めたのだと思う、そして僕は夏のプログラムの首尾一貫した実行が出来るのを喜んでゐる（九〇日のサン・モリッツ、そのうちの最後の三〇日は療養）。冬のプログラムがどの様に実行されねばならないかを証明するものとして述べるが、友人レーが今回数週間の予定でここを訪問すると告げてきたのだよ、しかも僕は思い切った辞りを言うことにしたのだ。御免よ、僕がこれほどの断念を少々誇らしく思っていることをね！そうすることが必要なのだ。——君と奥さんとに夏のような明るい良い秋と万事がうまく行くことを願いつつ

君の F・N

八九、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年一〇月一三日

親友よ、君の誕生日に当って僕が君に真つ先きに述べねばならないのは、残念ながら相も変わらず、昔ながらの、少なくとも数年は年経ている願望だ、つまり君が早くまた健康になる様にといいことだ、そして僕のフラウも心底から同じ願いを持っている。この手紙がお祝いの当日に、何とか好調でいる君にめぐり会えるだろうか？最近の報せは思いがけなくもその様な期待を起こさせてくれた、しかしその報せも今では何週間か昔のものになっており僕たちはまた少々心配になっている。ただ、君が目下受けている世話の点に関してだけは僕たちは安心感を持っている、この感じは数年来の君の生き方が僕たちに決して与えてくれなかったものだ。君の妹さんから僕たちは最近、その世話の点に関しての実に親切な報せを貰った、そしてテューリンゲンにも少なからぬ実りをもたらしているこの美しい秋は兎に角君にとっては特に有難いものであらう。君が直ぐツヴィンガーでやり始めることが出来ないのは残念だ。僕が最近ツューリヒで特別な目的のために僕の小さな義妹の庭仕事用前掛を身につけていた時、僕のフラウは、君もそれが二、三枚入用かも知れないと思いついて、それを作ろうと決めた。本当は君の誕生日に届けられる筈だったが、ここへの帰宅ということがあつて最近数週はフラウが色々と忙しかったため前掛が今もぐずぐずしているのを君に詫しねければならない。君が仕事に出掛ける前には何れにせよ君の手に入る。——ところで僕はこの手紙を無茶に長たらしくしないために一連の実務的報告に早速入らねばならない。先ず、僕が土曜に君のために郵便局に払い込んだから多分今日君に届く四〇〇マルクは、この半年の君の年金の中のホイスラー遺贈の分だ。君は新年までにもう二回これだけの額を期待できる。僕がここにおける君の会計掛であるのだということを決してはつきりとは協定しなかったけれど、君には異存がなからうと僕は思うし、そうすれば万事が一番簡単だ。送金方式の点では、最も安いものを選んだと思う。郵便為替は問題にならない。君は五〇〇フランに対し五フラン払わねばなるまい、ナウムブルク郵便局での両替が不利かも知れないということは別として。今度の方式では郵税は八〇サンチームだけだった、そして君は両替の際に五〇〇フランに対し四〇〇マルクと四フランを手に入れたのだ。だから問題になり得るの

は、ナウムブルクでの両替がもつと得かどうかということだけだ、それを試すために、若しお望みなら、五〇〇フランそのままを君にこの次送つてもよい。それから僕は申し合わせてあった様に君の一〇〇〇フランを八フラン二五サンチームの利子と共に職工銀行から引き出して、その代り直ぐ四、五パーセントの連邦債券（一八六七年、文字B、番号二四七八の連邦公債）を買った、勿論これは現在三五フラン割増しの相場だから君は高い支払いをしなければならなかった、君の券がもう次の抽籤で当って償還されるという不幸な偶然でも起こればそれこそ高過ぎる。半年分の利子二二、五フランは一月末に僕がここで貰ってあげる。——次の問題は、君が今バイロイト後援会から抜きたいかどうかだ、若しその気なら君がここを去ったのが好機だ。君が同会に留まるのなら、僕がまだ預っている約八〇フランの現金から二〇フランの額を取るよ。近いうちにツューリヒの君の蔵書のための保険証書の支払いもせねばならないだろう、同証書は僕たちがそこを発つてきた時には、とくに注文してあったのにまだ出来ていなかったが、代理店の保証によればもう直ぐに入るだろうとのことだ。今週僕たちはゲルラッハ夫人のところにおいてある君の書架をもう一度新聞に出す積りだ。

これ等の報告が多岐に亘っていることを許し給え。これだけ書いて置けば暫くは大丈夫だろう、そして今日はこれでもういいのだ。次回は別のことを書こう。来週の今日からまた講義だ、昨日はイエーナからきたゲルツァー夫妻を食事と呼んだ。彼はプリュースに次いで、この夏に照会を受けた。彼の拒絶の後にワッケルナーゲルということになった。この人は残念ながら休暇中または可成り病氣だったが、今は明らかに良くなっている。

生きているしをほんとに簡単でいいからまたお願いする。君に心からお祝いを言おうと共に君のお母さんに呉々もよろしくお伝えを乞う。今日はこれで左様ならする。君の

今月九日にジェーヴァの消印のある手紙を送った、その前にパハニッケの手紙も。

○

九〇、ニーチェより

(ナウムブルク、一〇月二三日)〔一八七九年〕

親しい親しい友よ、実に多くの良いものの与え手である君から受ける祝辞は他の人たちから受けるものとは違う。

誕生日には一日中君のことを考えた、そして君がこの一年間に、つまり教会信仰によれば生ノ半バニ in media vita 僕に示してくれた数々の親切を本当に有難く思いながら総計してみようとした。「生の半ばにあつて僕は良きオーヴェルベックに包まれていた」(≡生の半ばにあつて我等は死に取り囲まれている)という教会歌の冒頭を思わせる。一七六頁参照

——さもなくば他の仲間が姿を現わしたかも知れない——死神 *Mors* 也。

調子はまあまあだ、夏よりずっといい。初めて一回激しい発作があつた(僕の誕生日の翌日に)、その他は僕の悩みの小さな銃火が昔ながらに続いている——毎日だ。エンガディーンを去つて以来、丸薬も浣腸剤も全然飲んでいない、もうそれは必要ではなかったのだ。何かをすること(読むこと書くこと考えること)の無能力は、ぼんやり暮らすことという僕のプログラムにびつたりだ、これが今の僕の療法なのだ。(ヴェネツィアではこれは不可能だったろう)。僕の思想と彼の思想とで一杯になっている僕たちの愛するケーゼリッツは僕には強過ぎる食物だったろう。——

ライプツィヒで最近シュマイツナーとウィーデマンに会つた(僕はこの非常に気持良かった会見をその翌日に償わねばならず、静かに一日ソファで過ごした)——

この秋は非常に陰鬱だ、否、暗鬱だ、そのことは少なくとも僕の眼には工合がよい。——送金有難う、君は、僕が考へ得る限り最も好都合で安い方法を発見してくれた、ただ悲しいかな君自身にまでも苦勞を負わせて僕が楽をする結果になった。手紙に対して感謝する、先ず君の手紙に、それから転送してくれたものに(その中には僕に対する風刺詩があつた、グラーツの或るオーストリア詩人からだ、ハーメルリングかも知れない)。

奥さんに呉々もよろしく、敬慕するツューリヒのお義母さんにも。——シュマイツナーに僕はサント・ブーヴ翻訳

のことをちょっと話したところ非常に喜んで受け入れた。同様にワッケルナーゲルの仏教講義のことも。

シュマイツナーはデューリングの或る作を出版するのだが、彼はこの人物の不愉快な性格については全く驚いている。それから彼は最晩年のラサールの書簡を出す——これこそは僕たちが彼に望んだ類の出版物であると思うよ。

友ロームントの手紙を同封する、僕は彼がすっかりは分らない。信仰を持てとの訓戒に到っては僕は全く分らない——何への信仰なのか？——と間拔けな僕は問う。彼は信仰への信仰でも考えているのじゃなからうか。——一個のバター付きパンの方がそんな色褪せたものよりも僕にとつては価値がある。

心から君のものなる

F・ニーチェ

一〇月二二日、ナウムブルク。

もう何回か忘れた僕の母の感謝の挨拶を忘れちゃ大変だ！

司教ウルフィラスが生きていたのは何時だね？三世紀の中頃だろうか？

九一、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、七九年一〇月二四日〕

親友よ、さらに一言、庭仕事用前掛ニツイテ *à propos*。ツヴィンガーと塔は何れも僕が思ったより美しくて大きいのだが、僕の手からもう別の人の手に移ってしまった。僕はここへ来て、庭仕事には僕の眼が余りにも弱過ぎることと屈むのが僕の頭に非常に良くないことが分った——真近で見て野菜栽培は不可能事なりと判明した、残念、残念！そういうわけで僕は、僕の賃借契約（これによれば僕は洗濯物をツヴィンガーの中に掛けたり酒場を開いたりすることを禁じられていた）を免れて全く幸いだった。この出来事全体で最も良かったのは、僕が期待を持ったことだ。

そして未来ノ *bonheur* 庭仕事というこの幸福に、未来ノ庭仕事用前掛も属している。これに對し奥さんに心から感謝している。

君の友

九二、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、一八七九年一〇月二九日〕

親友よ、さらに忘れたことがあった！どうか今までの様に、バイロイトのための僅かな額を払ってくれ給え、それを払うのを止めねばならない理由がないから。（勿論僕は一八七七年秋以来あの雑誌を全然もう読んではいない）。

心からの愛をもって君の友

一八七九年一〇月二八日

九三、オーヴェルベックより

バーゼル、七九年十一月一日

親友よ、この前手紙を出してから僕はもう三通の便りを君から貰った、これ等に対して何よりも先ず僕は僕とフラウとの大きな喜びを述べなければならぬ、何しろこれ等の手紙は僕たちにはつきりと、或いは沈黙によって、君の状態が遂にどうやら堪え得るまでになったことを示していて、君の手紙を貰う僕たちから長いこと失われていた或る気分を僕たちの心に残してくれたのだから。——ツヴィンガーの代りに何か別のものが見付かるといいね。それがくずれたことにより、僕たちが食事の時もそれによって誘われて色々と話し合った脱線的な数々の夢も罰せられて葬られることになる。ところで庭仕事用前掛の代りに P・アルベールの最近著、文学雑誌 *Variétés littéraires* を考えた、しかしこれも少し待ってくれ給え、フラウが君のためにその最初の論文「慰メテクレル人タチ *Les consolateurs*」(古

代の慰さめ多き書物、セネカとプルタルコス）を訳そうとしているから。彼女は数日来ちょっと頑固な眼のカタルに悩まされているので直ぐには勿論仕事にかかれぬ。バイロイトのための二〇フランを君の金庫から取り出した、しかも君がこれを手離すことに何の不都合もないとあれば、喜んで取り出した。この前の雑誌は生体解剖についてのワグナーの一論文を、それに反対する結社に彼が寄付をするという声明と共に載せている。この論文はワグナーの実に力強いスタイルで書かれており、非常に良い点を含んでいる。残念なのはこの論文もまた、この優れた事柄を陰気な狂信性と盲目的猛烈さを持つている或る調子によって——君も見当がつくであろう様に「科学」に反対してのだ——台無しにする色々な要素を混ぜ込んでいることだ。この事柄を主張する人たちは、もっと動物たちへの素朴な感情に望みをかけるべきだろう、結局理性的にはこの感情にしか呼びかけることが出来ないのだから。

フラウはサント・ブーヴの中で眼をつけた諸論文からさらにシャンフォールのみを訳すことにしている、そうすると八人の人物（九論文）になる。最初としてはこれで十分だろうか？且つ出版の方式を君はどう考えるだろうか？絶対に匿名であることが前提条件ではあるが、それでも短い緒言は必要だろう。シュマイツナーが新しく得た著者たちの中の一人が、死んで見せるという様な悪いいたずらを彼に対して演ずることは、少なくとも今後はもう不可能だ、デューリングがそれを最近やってしまったのだから。ラサールの書簡が現在でも儲けになるかどうかは僕には分らない、料理書なんかの方が結局いいのじゃなからうか、ヘレーネ・ラコヴィッツが自身を書いてくれるかも知れない。僕がこの冬に仕上げようとしているクリスト教文献の発生に関する論文も勿論儲けにはならない。

ウルフィラスが何で必要かね？この人は三一〇年か一一年に生まれて三八〇年を過ぎて間もなく死んだ、そして、四世紀最大の汚辱であるアリウス説で身を汚す可能性が彼に丁度よく与えられたことは年代から見ても分りの如くだが、まさしくその可能性をなおざりにはしなかった人物だ。

ここの学生数は二〇一だ、今度の火曜に会食、その一週後に大学の公開講座が始まる、これの予約は今までのとこ

ろ図書館のための六三五フランで行なわれてきた。——フラウが君に心からよろしくとのこと、そして僕たち二人は君のお母さんの御挨拶に対して君からお礼を言ってくれる様お願いする。

君の O

九四、ニーチェより

〔ナウムブルク、七九年二月一四日〕

親しい親しい友よ、君の誕生日は僕にとつての祝日だ、しかしお祝いとして願わしいものとなると——何がいいのか僕には全然分らない。僕たちが再会することだ——これは常の願いだから平凡過ぎるね。クリスト教文献の発生についての君の論文が冬に出来上がるようにという願いも、その他には、僕が君を思う場合、願うべきことは何にもない、感謝すべきことばかりだ。——

調子は良くない、夏の好影響は終った、不断の苦痛がまたもや実によりになる。今度のナウムブルクの秋が、人々の記憶にないほどに陰鬱なじめじめしたものになったことは、不運だ。一週毎に一度位は午後には太陽と空が見える——という様なことになっている。精神的休息が僕のプログラムだ。事実また僕はそれを手に入れてもいる——が、天候が重く僕の上にのしかかっている。それでも僕の勇氣はまだくじけていない、僕は冬をここで堪える積りだ。

母が僕に読んでくれたのはゴーゴリ、レルモントフ、ブレット・ハート、M・トウェイン、E・A・ポウだ。君が最近出たトウェインの書「トム・ソーヤーの冒険」をまだ知らなければ、これを君への小さな贈り物とすることは僕にとつて嬉しいことだ。

書物の保険の問題を僕たちはギリシャ的鈍感さで堪えよう。僕の眼の中では書物はちゃんと保証されている、それ等がファルケンシュタインに留まり得る限りはね。

君と奥さんに対し深く心を寄せつつ

君の友

F・ニーチェ

ナウムブルク、一八七九年一月一四日

九五、オーヴェルベックより

バーゼル、一八七九年二月二三日

親友よ、君の親切な祝辞は可成り早く着いたのに、僕の感謝は少々遅くなった、僕の時間が現在全く取られてしまっているのね、規則的仕事によってのみでなく、哀れなフラウの眼によってもだ、その眼は必ずしもひどくはないのだが依然として編みもの以外は殆んど出来ない状態なので、僕は彼女に晩は何時も本を読んでやってきた。そのためには、君が実に親切にも僕に呉れようというマーク・トウェインのものも大いに有難い、僕たちは二人ともそれを知らない。フラウの「著述」はそんな状況下で全く停頓している。今は僕たちはトウルゲニエフの処女地を読んでいる、今日のロシアの過激な政治活動の崇高なまでの馬鹿らしさをよく教えてくれるものであり、君も読んで貰うといふ非常に情趣豊かな本だ。――僕の誕生日には今回は僕の義母と僕の義弟の地質学者がここに来ていた、後者は今日になってライブツィヒへ帰った。君の妹さんからは祝辞と共に、僕にとって思い出のために非常に嬉しいサン・モリッツの写真を数枚貰った、――妹さんにも僕はまだ礼状を出していない――ケーゼリッツからも生きているしるしがまたやってきた。――今丁度よく思い出したのは、今まで忘れてばかりいたことだ、つまりヤーコプ・ブルクハルトが君によろしくと繰返し言っていたことだ、そしてもう何週間か前のことだが、彼は目下、彼が秋に英国で集めた宝物の整理に没頭しているところだということを伝えてくれるようにとのことだった。彼はその国の美術館で見た沢山

の美術品によつて心がすっかり一杯になっていた。事実今でも彼の姿を見かけることは普段より少ない。——最近バーゼルとツューリヒとが、バウマン洞穴の君の元の庵室に住んでいるこの一番若い私講師、法学者のブルンネンマイスターを得ようとして争つたが、ツューリヒが正教授に招聘することによつてどうやら勝ちを占めた。

木曜に僕たちはインメルマンを学長に選んだ、カウチが一月四日に或る古いバーゼルの学者、即ちセム語学者で神学者のヨハン・ブクストルフ（年長の方）について講演をした、その話し方に接して、無作法だが實際的であつてその様な機会にバーゼルの人たちを楽しませることが出来るさまざまな手管をよく知ることが出来た。

事務的なことを伝えなければならない、ゴータ保険が君に借りになつていた六マルクを返済してきた、それからヨブの報せだ、つまり君の連邦債券、文字B、番号二七四八が今度の一月一日の抽籤で實際に當つたのだ、しかしこの場合君の慰さめになるのは、来年は公債全部の利率が切り替えによつて低くなるということが今分つたことだ。それで来年一月三十一日に君の一〇〇〇フランがまた戻ってくる、だから君が自分でこれを何かに使いたいか、それとも僕がまた適当に投資を続ける方がよいのかをどうか報せてくれ給え。——夏の好影響が終つたと考えねばならない根拠が増えたり、もつとひどくなつたりしていけないのだが。現在の精神的養生を変えないでくれ給え。今は僕たちのところも陰鬱で、おまけに全く寒くなった。フラウが心からよろしくとのこと、そして君のお母さんにも僕と一緒によろしく言ってくれる様にとのこと。僕たちを喜ばせる様に直ぐまた君について良い報せをくれ給え。

君の O

(I) 凶報のこと。旧約ヨブ記第一章第十三節参照。八九番の手紙で分かる様にこの債券は抽籤に当ると償還されるのである。なお、債券番号が八九番の手紙では二四七八となつており、何れかがミスプリントであらう。

〔葉書、消印はナウムブルク、七九年二月一日〕

前回報告して以来ずっと病氣だ、発作は恐ろしいほどだ（嘔吐その他）、寝ている日が多い。二週間後に南へ旅立つだろう（リーヴァへ）、出来ればだ！僕が堪え得るのは散歩的存在のみだ、それが今はこの雪、この寒さのためにここでは僕に許されていない。僕にそれまでに一〇〇マルク紙幣四枚を送ってくれられるだろうか？来週M・トウェインが君のところに着く、僕のサン・モリッツ滞在の記念品も。奥さんの眼病がもう良くなっているといいが。僕は奥さんにまだお手紙の札を言うことが出来ずにいた！シュマイツナーはサント・ブーヴ翻訳者については完全に沈黙を守る気持になった。君はシュマイツナーの「第一回の出版報告」を見たかい？君の「研究」の第二冊が一年以内にすると予告されているのをそれで知った僕の喜びは大きい。——君の幾つもの手紙に心から感謝し、良きクリスマス

を祈る。

F・N

その母と共に

（1） 古代教会史研究。

九七、ニーチェより

〔ナウムブルク〕（一八七九年二月二日）

有難う、親友よ、僕の葉書が午後に出て行ったら君の手紙が晩に来た。——辛棒だ——負わねばならぬものは多い！——これに反し僕の妹はうまく行っている。心からの愛をもって君の

F・N

矢張りレー博士に会うことは出来ないだろう！

金曜、一八七九年二月二二日。

地震の日は僕にとっても苦痛の一日、否、これ以上はないという苦痛の日だった。

九八、ニーチェより

〔葉書、消印はナウムブルク、七九年二月二八日〕

状態は驚くべきだった、前回の発作は三日間嘔吐が続いた、昨日は只事ならぬ長い失神状態。もっと良いもっと暖かい空気の中へ行かなければ、最悪事態になる。君の数々の手紙と送付物は凡て着いている、貴重な友よ、僕は君の愛情に対して感謝している。ローデが素晴らしい手紙をくれたよ。

ファルケンシュタインの皆さんと君自身とに心から新年の挨拶を送る。

君の友